

平成8年度

唐古・鍵遺跡

第61次発掘調査概報

1997

田原本町教育委員会

平成8年度

唐古・鍵遺跡

第61次発掘調査概報

1997

田原本町教育委員会



唐古・鍵遺跡と第61次調査地（南から）



青銅器鑄造関連遺物

序

唐古・鍵遺跡は大和平野のほぼ中央部にあって、農村地域の地中に埋もれる弥生時代の大集落跡で、おびただしい遺物が包蔵された遺跡です。その面積は約26ha以上に及びます。遺跡の西側の一部は国道24号線によって分断されていますが、東側の大部分は肥沃な水田地帯が広がり、その先には、我が国の古代国家のシンボルである大和古墳群が間近に見られます。

昭和11年に第1次発掘調査が行われて以来、60年を経てこの調査が第61次の調査となり、この間、唐古・鍵遺跡から弥生時代の様々なメッセージを伝えてきました。近年、全国各地で弥生時代の大規模遺跡の発掘調査がおこなわれ、その成果から従来の弥生時代の文化水準や社会体制を根底から見直されようとしています。唐古・鍵遺跡は今後において更に重要な埋蔵文化財として継続的な発掘調査を進めることにより、日本古代史を明らかにしていく一角に位置するものではないかと考えられます。

本書は平成8年度に実施した唐古・鍵遺跡第61次重要遺跡確認緊急調査の成果の概要をまとめたものですが、学術研究をはじめ広く歴史教育等に活用いただき、微力なりとも寄与することができれば幸甚と存じます。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、多大なご理解とご協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

奈良県田原本町教育委員会

教育長 岩井 光 男

例 言

1. 本書は、田原本町教育委員会が平成8年度の国庫補助事業として実施した奈良県磯城郡田原本町大字唐古及び鍵所在の唐古・鍵遺跡第61次発掘調査概報である。
2. 調査は、以下のとおりの調査体制・関係者でおこなった。

唐古・鍵遺跡調査検討委員会（平成8年度）

石野博信（香芝市二上山博物館館長）

岡村道雄（文化庁主任文化財調査官）

金関 恕（天理大学教授）

佐原 真（国立歴史民俗博物館副館長）

樋口隆康（奈良県立橿原考古学研究所所長）

森 浩一（同志社大学教授）

河上邦彦（奈良県立橿原考古学研究所研究部長）

伊藤勇輔（県文化財保存課課長補佐）

増田享利（県文化財保存課係長）

事務局 田原本町教育委員会 教育長 岩井光男

教育次長 池田照美

文化財保存課 課長 仲 弘司 課長補佐 鎌田 貢

調査係長 藤田三郎 技師 清水琢哉・豆谷和之

3. 調査にあたっては、土地所有者である中島誠氏をはじめとし、中島チエ子、鍵自治会長竹村利美、隣接地の竹村喜蔵、竹村利雄諸氏、鍵大字の方々より多大な御理解とご協力を賜り、実施することができた。

4. 現地調査は、藤田三郎、豆谷和之があたった。

5. 調査では、下記の調査補助員、調査作業員、遺物整理員が参加した。

調査補助員 小栗典子、八木健一郎・斎藤有美（奈良大学）、深川義之・小林善也・
（含遺物整理）東山喜一・原 知子・熊田朝美（天理大学）、林 充彦（山口大学）

調査作業員 植中次郎・木下 博・中谷義弘・中村高幸・前田佐喜造・南 治・
山澤節子・山本由美子・吉川順博・吉村 弘

遺物整理員 足立高子・川田陽子・川端元美・黒木円香・末広真理子・鶴田多真代・
中谷利枝・早川伊津子・藤本智子

6. 調査および概報作成にあたっては、下記の方々のご教示を賜った。記して感謝します。

今津節生・寺澤薫・福田さよ子（奈良県立橿原考古学研究所）、小泉武寛（金属工芸家）、岩井宏實（帝塚山大学）、景守紀子（京都大学木質科学研究所）、松本茂（樹木医）、渡邊政俊（竹文化振興協会）、

7. 本書に使用する時期は、特にこだわらない限り藤田三郎・松本洋明1989「大和地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社を使用し、「大和第〇-△様式」とした。既往の編

年との対照は大旨、下記の表のようになる。

既往の編年※	第一様式			第二様式		第三様式				第四様式		第五様式		壺式			
小林・佐原	古	中	新			古	新										
大和の編年	第Ⅰ様式		第Ⅱ様式			第Ⅲ様式				第Ⅳ様式		第Ⅴ様式		第Ⅵ様式			
大和様式	1	2	1	2	3	1	2	3	4	1	2	1	2	1	2	3	4

※小林行雄1943「土器類」（末永雅雄ほか『大和唐古弥生式遺跡の研究』）

佐原 真1968「畿内地方」『弥生土器集成』本編2

8. 本書の執筆と編集は藤田と豆谷が協議し、おこなった。なお、執筆分担は目次に記した。

本文目次

I. はじめに	(藤田)	1
II. 既往の調査と調査地の位置	(藤田)	2
III. 調査の成果		6
1. 調査の方法	(藤田)	6
2. 層序	(豆谷)	6
3. 遺構		7
(1) 弥生時代前期から中期初頭の遺構	(豆谷)	7
(2) 弥生時代中期中葉から後期初頭の遺構	(藤田・豆谷)	7
(3) 弥生時代後期後半の遺構	(藤田・豆谷)	21
4. 出土遺物		23
(1) 弥生土器	(藤田・豆谷)	23
(2) 木製品	(豆谷)	35
(3) 石器・骨製品	(藤田)	42
(4) 金属器・玉類	(藤田)	43
(5) 青銅器鑄造関連遺物	(藤田)	44
IV. まとめ	(藤田)	52

図版目次

巻頭図版1 唐古・鍵遺跡と第61次調査地（南から）

巻頭図版2 青銅器鑄造関連遺物

図版1 調査区全景1

1. 遺跡全景（南から）
2. 調査区全景（上が北）

図版2 調査区全景2

1. 調査区全景 上層遺構（北から）
2. 調査区全景 下層遺構（北から）
3. 調査区全景 下層遺構（南から）

図版3 下層遺構1（溝1）

1. SD-151A 完掘（西から）
2. SD-151BN・BS 完掘（北東から）
3. SD-151CS 完掘（東から）

図版4 下層遺構2（溝2）

1. SD-151西壁堆積状況
2. SD-151完掘（北から）

図版5 下層遺構3（溝3）

1. SD-151BN 楯等出土状況
2. SD-151BN 高杯等出土状況

図版6 上層遺構1（土坑1）

1. SK-118完掘
2. SK-118鍬等出土状況

図版7 上層遺構2（土坑2）

1. SK-108完掘
2. SK-108上層検出状況

図版8 上層遺構3（土坑3）

1. SK-107完掘
2. SK-107土器出土状況

図版9 上層遺構4（土坑4）

1. SK-106柱出土状況
2. SK-117遺物出土状況

図版10 上層遺構5（土坑5）

1. SK-142水差形土器出土状況
2. SK-115送風管出土状況
3. SK-151大型管玉出土状況

図版11 上層遺構6（溝1）

1. SD-101B・102B 西壁
2. SD-101B・102B 完掘

図版12 上層遺構7（溝2）

1. SD-101B 西壁
2. SD-101B 完掘（西から）

図版13 上層遺構8（溝3）

1. SD-102B 西壁
2. SD-102B 完掘（西から）

図版14 上層遺構9（溝4）

1. SD-101B・102B 遺物出土状況
（東から）
2. SD-101B 遺物出土状況

図版15 上層遺構10（溝5）

1. SD-101B 遺物出土状況
2. SD-101B 遺物出土状況
3. SD-102B 遺物出土状況

図版16 上層遺構11（溝6）

1. SD-105B・106B 西壁
2. SD-105B・106B 完掘（西から）

図版17 上層遺構12（柱穴1）

1. 調査区南半柱穴検出状況
（北から）
2. 調査区南半柱穴完掘（北東から）
3. 調査区中央柱穴完掘（東から）

図版18 上層遺構13（柱穴2）

1. Pit-182下部礎板
2. Pit-203上部礎板
3. Pit-203下部礎板

図版19 上層遺構14（柱穴3）

	1. Pit-202礎板と柱根	条痕文系土器・広片口鉢
	2. Pit-1199柱根	図版27 石器
	3. Pit-1200柱根	図版28 骨製品・木製品 1
図版20	上層遺構15（柱穴4）	図版29 木製品 2（四脚合子）
	1. Pit-244土器出土状況	図版30 木製品 3（用途不明木製品）
	2. Pit-177土器出土状況	図版31 青銅器鑄造関連遺物 1
	3. Pit-182上部土器出土状況	（鑄型外枠A型1・その他）
図版21	上層遺構16（柱穴5）	図版32 青銅器鑄造関連遺物 2
	1. Pit-134土器出土状況 1	（鑄型外枠A型2・B型1）
	2. Pit-134土器出土状況 2	図版33 青銅器鑄造関連遺物 3
	3. Pit-134土器出土状況 3	（鑄型外枠B型2）
	4. Pit-145土器出土状況	図版34 青銅器鑄造関連遺物 4
図版22	上層遺構17（柱穴6）	（鑄型外枠B型3）
	1. Pit-120粘土検出状況	図版35 青銅器鑄造関連遺物 5
	2. Pit-133粘土検出状況	（鑄型外枠B型4）
	3. Pit-187礎板	図版36 青銅器鑄造関連遺物 6
図版23	上層遺構18（土器棺墓）	（鑄型外枠C型1）
	1. SX-102検出状況（東壁）	図版37 青銅器鑄造関連遺物 7
	2. SX-102検出状況（南から）	（鑄型外枠C型2）
	3. SX-101検出状況（北から）	図版38 青銅器鑄造関連遺物 8
	4. SX-101検出状況（東から）	（高坏状土製品・鉋滓付着土器）
図版24	弥生土器 1	図版39 青銅器鑄造関連遺物 9
図版25	弥生土器 2（絵画土器）	（送風管・被熱土器片）
図版26	弥生土器 3（絵画土器・文様	図版40 玉類・金属器

挿図目次

第1図	唐古・鍵遺跡の位置	1
第2図	第61次調査地の位置	2
第3図	唐古・鍵遺跡の調査地とその成果	3
第4図	基本土層図	6
第5図	第61次調査遺構平面図（1）	11
第6図	SK-118遺構平面図及び土層断面図	12
第7図	SK-106遺構平面図及び土層断面図	13
第8図	SD-151・151A・151BN東壁土層断面図	14
第9図	SD-151・151CN・151CS東壁土層断面図	15
第10図	SD-101B（101）・SD-102B（102）東壁土層断面図	16

第11図	調査区中央柱穴群平面図	18
第12図	SX-101土器棺検出状況図及び見とおし図	19
第13図	SX-101土器棺実測図	19
第14図	SX-102土器棺検出状況図及び見とおし図	20
第15図	SX-102土器棺実測図	20
第16図	第61次調査遺構平面図(2)	21
第17図	SK-107遺構平面図及び土層断面図	22
第18図	SD-101B・SD-102B土器実測図1(大和第IV様式)	25
第19図	SD-101B・SD-102B土器実測図2(大和第V様式)	27
第20図	SD-101B・SD-102B土器実測図3(大和第V様式)	29
第21図	SD-101B・SD-102B土器実測図4(大和第V様式)	31
第22図	絵画土器及び特殊文様拓影	33
第23図	広片口鉢実測図	34
第24図	木製品実測図1	37
第25図	木製品実測図2	38
第26図	木製品実測図3	39
第27図	用途不明木製品の構造模式図	40
第28図	用途不明木製品実測図	41
第29図	石器・骨製品実測図	42
第30図	青銅器・玉類実測図	43
第31図	土製鋳型外枠実測図1	45
第32図	土製鋳型外枠実測図2	47
第33図	土製鋳型外枠実測図3	48
第34図	土製鋳型外枠実測図4	49
第35図	高環状土製品・送風管実測図	51
第36図	土製鋳型外枠の型式模式図と鋳型復元想定図	55

表 目 次

第1表	調査地の概要	2
第2表	唐古・鍵遺跡発掘調査一覧表	4・5
第3表	主要土坑一覧表	8
第4表	主要溝一覧表	9
第5表	主要柱穴一覧表	10
第6表	土製鋳型の外枠一覧表	54

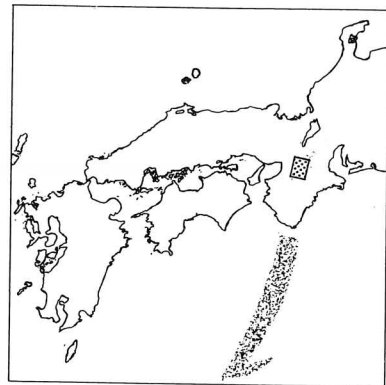
I. はじめに

弥生時代研究の出発点とも言える唐古池の発掘調査とその報告書は日本考古学史に残る大きな業績である。この学史的な遺跡に調査のメスが入ったのは、1936～7年の第1次から40年後であり、それ以降、田原本町では奈良県立橿原考古学研究所の協力を得、これまでに60次に及ぶ発掘調査を実施した。これらの調査原因は、初期の範囲確認調査を経て現在では開発に伴う様々な発掘調査がなされている。とりわけ、国道24号線沿いは店舗等の民間開発が10件あまりある。また、国道より東側の農業振興地域等においては、農業基盤整備に伴う水路や農道整備、幼稚園や小学校の各種施設と通学路整備に伴う調査が実施されている。

この結果、この遺跡が日本を代表する大規模な環濠集落であり、その集落規模と膨大な遺物から近畿地方の中心的な存在と目されるようになった。このような状況の中、本遺跡の保存問題も国の史跡指定という大きな課題として町当局にかかってきた。しかし、30haに及ぶ広大な遺跡範囲は農業を生活基盤とする地権者と短期間の公有化、少ない財政事情というさまざまな問題を含みながら何ら解決の糸口を見いだせないまま近年に至った。

本町では、この遺跡の保護施策の手法を模索しながらも平成7年度に唐古・鍵遺跡整備基本構想を策定し、さらに平成8年度には基本計画を策定する予定をもって進めてきた。このような状況に相応するように、県・国に対しては本遺跡の構造および性格を把握する目的で発掘調査の実施を要望し、平成8年度には国庫補助事業として採択された。これを受けて本教育委員会では、調査に関する様々な問題を検討・指導して頂く「唐古・鍵遺跡調査検討委員会」を組織した。平成8年9月6日に第1回検討委員会を開催し、これまでの調査成果と課題を整理し、本年度の調査場所の選定をおこなった。その結果、唐古・鍵遺跡の青銅器鋳造工房跡の解明を目的とする調査を実施することになった。

調査場所については、遺跡東南部の第3次調査地付近ということになったが、農地という制約もあり、第3次調査地の西側、すなわち、田原本町大字鍵166番地の休耕田を選択した。発掘調査は平成8年11月20日から平成9年3月6日まで実施した。調査面積は小規模ながら弥生時代の遺構は錯綜し、かつ、遺物は多量であったため、調査は難行した。しかしながら、当初の予定どおり青銅器の鋳造に関する各種遺物が出土し、ほぼ土製の鋳型外枠の全容を把握するに至った。ただし、遺構的には工房跡と積極的に評価できるものは確認しえず課題を残すことになった。



第1図 唐古・鍵遺跡の位置

II. 既往の調査と調査地の位置

II. 既往の調査と調査地の位置

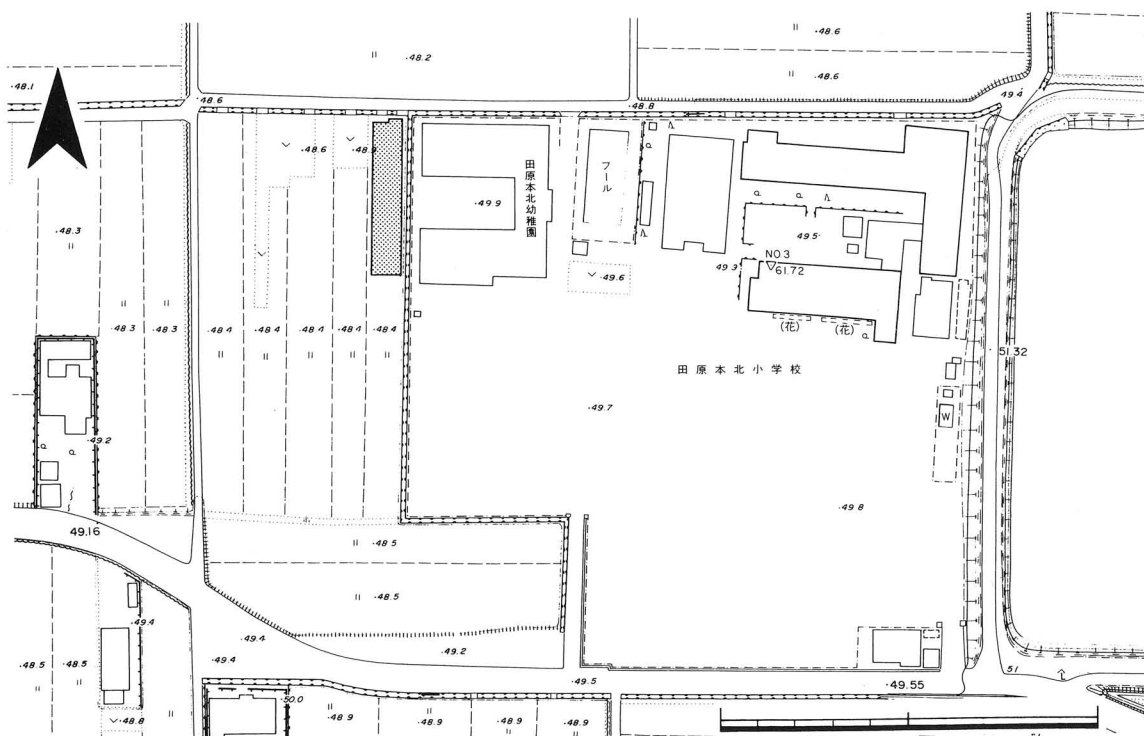
唐古・鍵遺跡は標高47～49mの沖積地に立地する弥生時代の代表的な環濠集落である。その占有面積は約30万㎡に達する。これまで60次におよぶ発掘調査では、幅約10mの大環濠とその外側に掘削されている幅5m前後の3～5条の環濠（環濠帯）、柱穴や井戸、木器貯蔵穴、木棺墓などが検出されている。また、出土遺物においても膨大な量の土器や各地の搬入土器・各種打製石器や磨製石器と原石・未成品、農工具や容器などの木器と未成品、獣骨、銅鏃・巴形銅器など青銅器、ヒスイ勾玉・大型管玉・ガラス玉などの装身具、楼閣・シャーマン・鹿などの絵画土器が出土している。集落が営まれた時代は、弥生時代前期から古墳時代中期までであり、その後は古墳が築造されたようである。

今回の調査地は遺跡の南東部に当たる。付近の調査としては第3・4・33・40・47次調査があり、ムラ内部から環濠帯にかけての諸遺構とムラの出入り口を確認している。また、出土遺物も多種多様で、楼閣の描かれた土器や青銅器鑄造関連遺物や銅鏃、鑿に転用された細形銅矛、木製戈、イノシシ下顎14体分を垂下したものなど重要遺物が出土している。

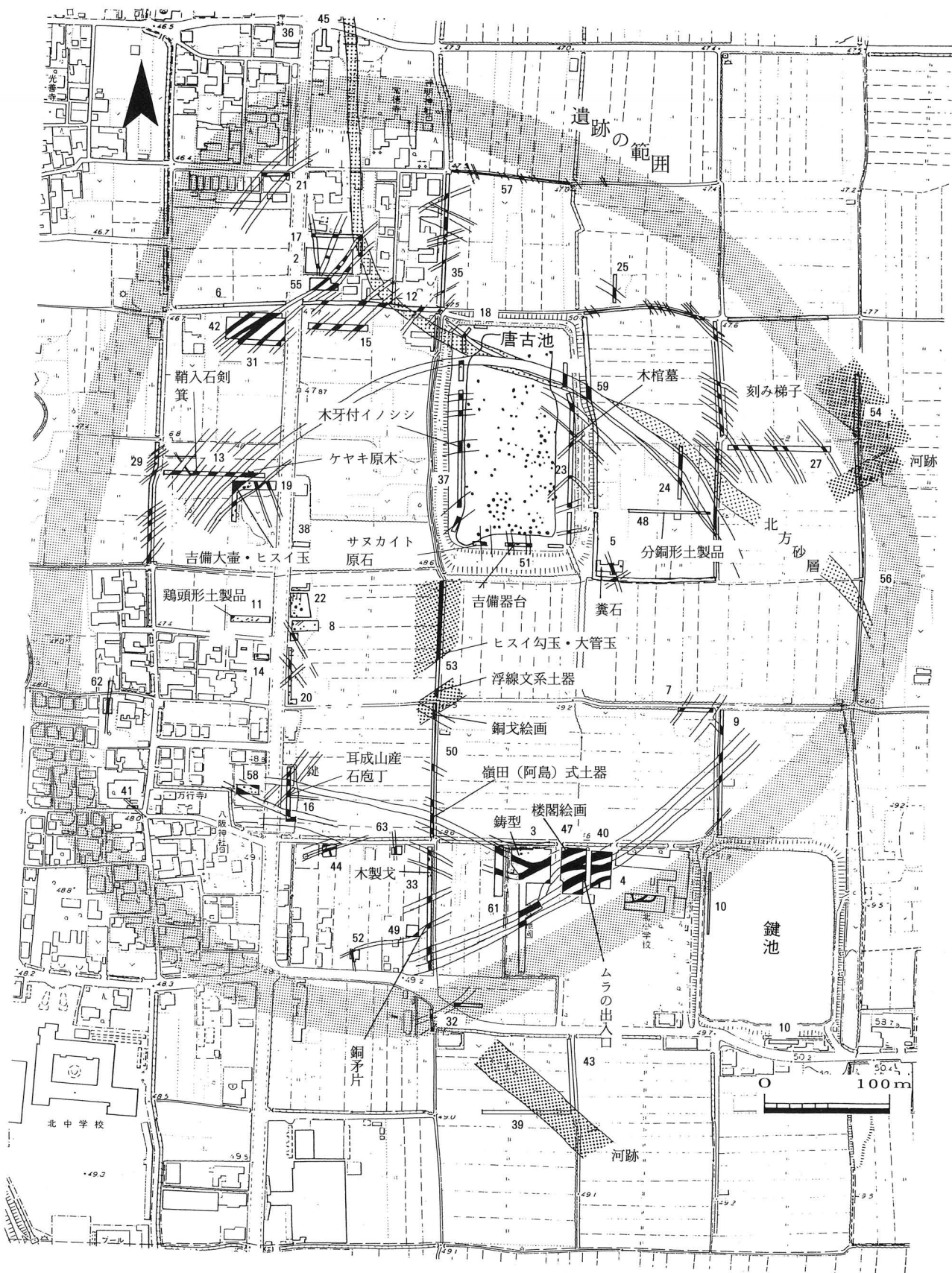
今回の調査は第3次調査の西側隣接地にあたり、弥生時代中・後期の大溝と土坑、弥生各種遺物と青銅器鑄造関連遺物が出土すると予想された。

第1表 調査地の概要

所在地	土地所有者	調査期間	調査面積	調査原因
田原本町鍵166番地	中島 誠	1996. 11. 20～1997. 3. 6	約333㎡	重要遺跡確認緊急調査



第2図 第61次調査地の位置



第3図 唐古・鍵遺跡の調査地とその成果

II. 既往の調査と調査地の位置

第2表 唐古・鍵遺跡発掘調査一覧表

次数	調査地	調査期間	調査面積	担当者	主要遺構	主要遺物
1	田原本町唐古126 (唐古池)	1937年1月8日～1937年3月28日	約 12000㎡	末永 雅雄 他	弥生農耕文化の認識 百敷基の土坑群 木器貯蔵穴、井戸	各種木製品、炭化米、 凸帯文壺、彩文土器、 舟・鹿等絵画土器
2	田原本町唐古82-2 (レストラン)	1967年10月1日～1968年4月10日	105㎡	穠本 誠一 他	遺跡北西限の調査 環濠4条	
3	田原本町鍵161他 (北幼稚園)	1977年8月1日～1977年11月15日	1000㎡	久野 邦雄 寺沢 薫	遺跡南東端の調査 環濠 3条、井戸	青銅器製造関連遺物、 木製四脚合子、猪下顎14 体、ガラス勾玉、銅鐸形 土製品、銅鏃
4	田原本町鍵155他 (北小学校校舎)	1978年4月22日～1978年5月15日	580㎡	久野 邦雄 寺沢 薫	遺跡南東限の調査 小溝、 小土坑	
5	田原本町唐古144	1978年5月16日～1978年6月20日	110㎡	久野 邦雄 寺沢 薫	遺跡北部の調査 土坑、 柱穴 中世木組井戸	管玉、糞石、丹塗壺、 田舟、黒色土器
6	田原本町唐古65-1 (用水路)	1980年1月18日～1980年1月22日	120㎡	寺沢 薫	遺跡北西端の調査 中近 世大溝	
7	田原本町鍵183	1980年1月23日～1980年2月14日	100㎡	寺沢 薫	遺跡南東端の調査 弥生 後期溝2条	特殊タキ壺
8	田原本町鍵308	1980年2月15日～1980年4月4日	200㎡	寺沢 薫	遺跡西部の調査 井戸、 土坑、小溝 中世館跡の 確認	彩文土器、前期の箕、弓
9	田原本町鍵196-2 (用水路)	1980年4月5日～1980年4月19日	200㎡	寺沢 薫	遺跡南東端の調査 弥生 中期環濠2条	
10	田原本町鍵2-5 (派出所)	1980年10月17日～1980年10月19日	80㎡	寺沢 薫	遺跡南東限の調査	
10	田原本町鍵193-1	1980年12月25日	30㎡	寺沢 薫	遺跡南東限の調査	
11	田原本町鍵309-1, 310-1	1981年1月27日～1981年3月28日	210㎡	寺沢 薫	遺跡西部の調査 弥生前 期のドングリビット、柱 穴、井戸 中世大溝、中 世井戸	鶏頭形土製品、打製石剣 古式土師器
12	田原本町唐古96 (用水路)	1981年11月9日～1982年2月5日	340㎡	松本 洋明	遺跡北西端の調査 環濠 5条	
13	田原本町唐古60-1	1982年7月2日～1982年10月5日	215㎡	藤田 三郎	遺跡西端の調査 環濠5 条、井戸、甕棺	納入石剣、ケヤキ原木、 銅鐸形土製品、箕、桶、 猪下顎7体
14	田原本町鍵306 (店舗)	1982年11月16日～1982年12月25日	50㎡	藤田 三郎	遺跡西部の調査 弥生後 期の井戸 中世期の建物	青銅鏡、送風管、管玉、 井戸供献土器、弧帯文様 土器、近江系土器
15	田原本町唐古98-1	1983年1月11日～1983年2月15日	200㎡	藤田 三郎	遺跡北西端の調査 環濠 4条	広楕、尾張系土器
16	田原本町鍵280-1, 282-2	1983年4月18日～1983年6月24日	約 155㎡	藤田 三郎	遺跡南西部の調査 前期 環濠、中期大溝3条	耳成山産石庖丁 広楕木 成品
17	田原本町唐古80-2 (レストラン 駐車場)	1983年9月9日～1983年9月17日	約 200㎡	藤田 三郎	遺跡北西部の調査 環濠 4条、集水施設2基	前期大壺
18	田原本町唐古126 (唐古池北西の 擁壁)	1983年11月28日～1983年12月3日	63㎡	藤田 三郎	遺跡北部の調査 北方砂 層	短頸壺
19	田原本町唐古57-2, 59	1984年2月6日～1984年5月2日	約 315㎡	藤田 三郎	遺跡西部の調査 環濠2 条、土坑、井戸、木器貯 蔵穴、2段組土器井戸枠、 壺棺	銅鐸形土製品、猪形土製 品、ヒスイ玉、ガラス小 玉、骨針、広楕木成品、 尾張・吉備系の土器
20	田原本町鍵302-1, 307-1	1984年11月28日～1985年4月8日	150㎡	藤田 三郎	遺跡西部の調査 前期の 土坑群、井戸、大壺井戸 枠、柱穴	ト骨、投擲、焼土と焼け た土器、炭化粉、アカニ シ
21	田原本町唐古78-4, 79-22 (店 舗)	1985年5月8日～1985年5月13日	約 65㎡	藤田 三郎	遺跡北西限の調査 環濠 2条	横楕
22	田原本町鍵308-1 (8次隣接地)	1985年9月3日～1985年11月25日	約 250㎡	藤田 三郎	遺跡西部の調査 弥生の 井戸、木器貯蔵穴 中世館の環濠	大型絵画土器、独鈷石、 条痕文系土器、穿孔猪下 顎
23	田原本町唐古126 (唐古池東側の 擁壁)	1985年12月9日～1985年2月25日	約 200㎡	藤田 三郎	遺跡北部の調査 木棺墓 2基、井戸、柱穴、溝	矛形木製品、ト骨、巴形 銅器、尾張系土器、布ぎ れ、縄、石棒、銅鐸形土 製品
24	田原本町唐古141	1986年2月13日～1986年3月31日	約 130㎡	藤田 三郎	遺跡東部の調査 環濠2 条、北方砂層、柱穴	刻み鹿角、木製槽、大形 石庖丁
25	田原本町唐古198-2	1986年3月6日～1986年3月31日	約 30㎡	藤田 三郎	遺跡北東限の調査 環濠 1条	打製石剣、壺蓋
26	田原本町唐古126 (唐古池東南の擁 壁)	1986年12月15日～1987年2月24日	115㎡	藤田 三郎	遺跡北部の調査 前期の 大溝、井戸 中世曲物井 戸枠	杓子、打製石剣、枡
27	田原本町唐古161-2	1987年1月23日～1987年3月10日	320㎡	藤田 三郎	遺跡東端の調査 環濠5 条 古墳時代後期の河道	布留式土器、須恵器
28	田原本町唐古黒白地内 (用水路)	1987年2月5日～1987年2月10日	275㎡	藤田 三郎	遺跡北東端の調査 環濠 7条	
29	田原本町鍵36 (東の用水路)	1987年2月5日～1987年4月6日	260㎡	藤田 三郎	遺跡西端の調査 環濠7 条	着柄楕
30	田原本町唐古90他 (東の用水路)	1987年4月6日～1987年4月10日	150㎡	藤田 三郎	遺跡北端の調査 環濠4 条	

次数	調査地	調査期間	調査面積	担当者	主要遺構	主要遺物
31	田原本町唐古65-1, 64-4 (6次南隣接地)	1987年6月15日～1987年7月1日	約350㎡	藤田 三郎	遺跡北西端の調査 環濠 3条	
32	田原本町鍵142-4	1987年9月10日～1987年9月15日	31.5㎡	藤田 三郎	遺跡南端の調査 環濠1 条	
33	田原本町鍵262-1	1987年11月5日～1988年5月1日	約300㎡	藤田 三郎	遺跡南部の調査 環濠4 条、井戸、木器貯蔵穴、 土壌墓	細形銅矛片、銅鏃、木製 戈、勾玉、管玉、着柄石 小刀、卜骨
34	田原本町唐古142他(東の用水路)	1988年2月15日～1988年2月25日	約250㎡	藤田 三郎	遺跡東部の調査 環濠3 条、北方砂層	槽、河内系土器
35	田原本町唐古95他(東の用水路・ 町道)	1988年3月7日～1988年3月8日	約150㎡	藤田 三郎	遺跡北端の調査 環濠3 条	
36	田原本町唐古526-1	1988年8月29日～1988年9月3日	50㎡	藤田 三郎	遺跡北限の調査 弥生遺 構なし 中世大溝1条	中世土器、下駄
37	田原本町唐古126(唐古池西側の 擁壁)	1989年1月9日～1989年4月11日	350㎡	藤田 三郎	遺跡北部の調査 環濠4 条、大溝、南方砂層、井 戸、木器貯蔵穴、柱穴	井戸供献土器、卜骨、木 製牙をさした猪下顎骨、 条痕文系土器、サヌカイ ト原石6点、骨針、牙製 装身具、簪
38	田原本町唐古51-1, 54-1, 55- 1	1989年10月14日～1989年10月31日	72㎡	藤田 三郎	遺跡西部の調査 前期土 坑群、木器貯蔵穴、井戸 中世大溝2条	彩文土器、子持勾玉、各 種木器未成品、条痕文系 土器、古式土師器
39	田原本町鍵40他(用水路)	1989年11月7日～1989年11月29日	160㎡	藤田 三郎	遺跡南限の調査 弥生時 代中期の河道	
40	田原本町鍵158-1他(北小学校 体育館、4次の北西隣接地)	1990年5月18日～1990年8月15日	760㎡	藤田 三郎 北野 隆亮	遺跡南東端の調査 環濠 3条、井戸、木器貯蔵穴	鋳造関連遺物、鉄斧、土 製勾玉、木鏝12点、橋脚、 着柄鏃、鋤、サメ歯
41	田原本町鍵374	1990年6月4日～1990年6月14日	20㎡	藤田 三郎	遺跡南西部の調査 前期 環濠1条	多量の丸太杭
42	田原本町唐古64-4, 65-1(6・ 31次の隣接地)	1990年7月11日～1990年9月21日	740㎡	藤田 三郎	遺跡北西端の調査 環濠 4条 中世井戸	
43	田原本町鍵36～40(39次北東隣接 地)	1990年10月31日～1990年11月15日	150㎡	北野 隆亮	遺跡南限の調査 弥生中 期の河道の北端確認	
44	田原本町鍵268-1	1990年2月12日～1990年4月6日	130㎡	藤田 三郎	遺跡南西部の調査 大溝 1条、大溝に直行する南 北溝	近江・紀伊・河内系土器、 縄文土器、銅鐃形土製品
45	田原本町唐古334, 335-1(店舗)	1991年6月5日～1991年6月11日	約40㎡	藤田 三郎	遺跡北端の調査 弥生時 代前期の河道 中世大溝	前期壺、杓子未成品
46	田原本町鍵315-1	1991年9月12日～1991年9月21日	約10㎡	北野 隆亮	遺跡西部の調査 中世大 溝1条	武器形木製品?
47	田原本町鍵155(北小学校プール、 3・40次隣接地)	1991年10月2日～1991年12月1日	約625㎡	藤田 三郎	遺跡南東端の調査 環濠 4条 ムラの出入口の確認	青銅器鋳造関連遺物、橋 脚、楼閣絵画土器
48	田原本町唐古138, 141, 142隣接 地(用水路)	1991年11月18日～1992年1月16日	約130㎡	北野 隆亮 豆谷 和之	遺跡東部の調査 環濠2 条、土坑、柱穴	タタキ板、渦文タタキ壺、 分銅形土製品、魚絵画土 器、古式須恵器
49	田原本町鍵263-3	1991年12月2日～1992年1月21日	約91㎡	藤田 三郎	遺跡南部の調査 環濠1 条、小溝、土坑	銅鏃、スッポン絵画土器
50	田原本町鍵251～261東(用水路)	1992年11月10日～1992年12月27日	215㎡	藤田 三郎	遺跡中央部の調査 大溝、 河道、井戸、柱穴、壺棺、 大壺・大甕の井戸枠	天竜川流域の土器、 銅戈絵画土器
51	田原本町唐古126(唐古池南側の 擁壁)	1993年1月11日～1993年2月4日	50㎡	藤田 三郎	遺跡北部の調査 大溝、 小溝、井戸、柱穴	卜骨、吉備系器台、楯、 杓子未成品、橋脚、人形 土製品
52	田原本町鍵226-4	1993年2月8日～1993年2月26日	60㎡	藤田 三郎	遺跡南西部の調査 環濠 1条、大溝	流紋岩原石、渦文タタキ の壺
53	田原本町鍵242-2～249-1隣接 地(用水路)	1993年11月9日～1993年12月28日	235㎡	藤田 三郎	遺跡中央部の調査 木器 貯蔵穴、谷地形、大溝	多量の石鏃・石砲丁、鹿 絵画土器、銅鏃、ヒスイ 勾玉、碧玉大管玉
54	田原本町唐古162～166隣接地(用 水路)	1993年11月15日～1993年11月25日	110㎡	藤田 三郎	遺跡東限の調査 河道	刻み梯子、柱
55	田原本町唐古83-1	1994年3月7日～1994年3月26日	160㎡	藤田 三郎	遺跡北西端の調査 環濠 2条	刻み梯子未成品
56	田原本町法貴寺1085-2他(用水 路)	1994年11月17日～1995年1月25日	330㎡	清水 琢哉	遺跡東限の調査 河道	完形土器群
57	田原本町唐古209他(用水路)	1995年3月7日～1995年3月13日	550㎡	藤田 三郎	遺跡北限の調査 流路、 小溝、河道	
58	田原本町鍵281-1	1995年8月17日～1995年9月28日	138㎡	藤田 三郎	遺跡西部の調査 大溝2 条、井戸 中世大溝1条	木製壺、骨針
59	田原本町唐古127(西隣用水路)	1995年11月7日～1996年3月15日	弥生300㎡	藤田 三郎	遺跡北部の調査 大溝、 井戸、北方砂層、柱穴	子持勾玉、玉類、古式須 恵器、馬骨、骨針
		中・近世 1200㎡	中世居館の調査 中世土 壌墓、井戸、小溝		銅鈴	

Ⅲ. 調査の成果

Ⅲ. 調査の成果

1. 調査の方法

調査地である鍵166番地は休耕田で、その北半分を対象とした。調査区は東西8m、南北約42mの南北に長いトレンチを設定した。これは農地かつ私有地であるため、土地境界を越えないでおこなうという制約のため幅広い調査区にはなっていない。しかしながら、本遺跡の調査としては比較的広い面的な調査となり、遺構の状況や性格を把握するうえで有効であった。

調査は水田耕土層と床土層の約0.4mを重機2台で掘削除去し、その後、人力による遺構等の調査をおこなった。鉄分の凝縮した弥生時代後期から古墳時代前期の非常に堅い黒褐色土の遺物包含層がある。この上面に近世頃の素掘り小溝を確認した他は、すべて弥生時代の遺構である。人力による層ごとの遺構調査をおこなったが、柱穴の検出した調査区中央及び、南端と北端の一部は保存のため、弥生時代中期以前の下層遺構は確認していない。

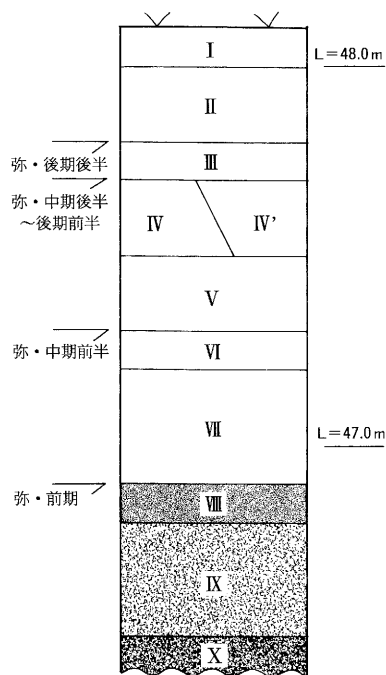
2. 層序

調査地の土層は弥生時代以降の堆積がほとんどなく、単純な層序を形成している。しかし、調査区の北半では中期の区画溝が走行しているほか、調査区の南半でも営々と諸遺構が掘削されていることから基本土層は少なく、調査区中央の一部のみに基本土層が存在する。本地の基本的な土層堆積状況は次のとおりである（第4図）。

第Ⅰ層：灰青色粘質土（水田耕土層）、第Ⅱ層：茶灰色粘質土（水田床土層）、第Ⅲ層：黒褐色土、第Ⅳ層：暗褐色粘質土、第Ⅴ層：黄灰色粘質土、第Ⅵ層：暗灰粘（炭灰含む）、第Ⅶ層：黒灰粘（黄斑）、第Ⅷ層：明灰黄粘（堅い）、第Ⅸ層：緑灰粘、第Ⅹ層：黒灰粘。

第Ⅰ層、第Ⅱ層は近世以降の堆積である。その厚さは約0.4m。第Ⅲ層から第Ⅶ層までは弥生時代の遺物包含層である。また、第Ⅷ層以下の土層は弥生時代以前に形成された堆積層と考えられ、遺物を包含しない。本調査区における遺構検出面は4面である。弥生時代後期後半の遺構は、標高47.8mの第Ⅲ層上面が検出面となる。弥生時代中期後半から後期前半の遺構は、標高47.7mの第Ⅳ層上面が検出面となる。弥生時代中期前半の遺構は、標高47.3mの第Ⅵ層上面が検出面となる。弥生時代前期の遺構は、標高46.9mの第Ⅷ層上面が検出面となる。

調査区の中央は微高地部分にあたるらしく、第Ⅲ層の堆積は認められず、第Ⅱ層の直下は第Ⅳ層であり、中期後半から後期後半までの遺構を同一面で検出した。また、調査区北半の大部分は、中期の大溝群であるSD-151によって掘削されており、基本層となる第Ⅳ層～第Ⅷ層は残っていない。SD-151は弥生時代中期中頃に粗砂層によって埋没し、その上面の暗褐色砂質土が第Ⅳ層上面に対応した弥生時代中期後半から後期前半の遺構面となる。



第4図 基本土層図 (S=1/20)

3. 遺構

検出された遺構はすべて弥生時代のもので、濃密な遺構分布を呈している。主要な土坑と溝に関しては第3・4・5表にまとめた。各遺構の詳細な時期については大半の遺物が未洗浄のため、調査時の所見によるところが多く、変更されるものがあると思われる。また、微高地上と考えられる調査区中央では、弥生時代中期後半から後期初頭の遺構検出面である第IV層上面で多数の柱穴が検出され（第5表）、保存のためにこれより下層の遺構については調査を行わなかった。調査区南半についても、第V層上面までの調査に止めた。ただし、調査区南端に幅約1.5mの土層観察用トレンチを設定し、下層遺構の確認をおこなった。また、調査区北半の大部分を占める中期の大溝SD-151についても、最下層までの調査は東半分でとどめ西半分は保存した。

(1) 弥生時代前期から中期初頭の遺構（第5図）

先にも記述したように、弥生時代前期から中期初頭の遺構は大半が未調査である。調査区の端に設けた排水溝や南端部の土層観察用トレンチによって、その時期に所属すると考えられる遺構を土層断面によって観察したにすぎない。遺構は平面として確認しておらず、その性格や分布状況については今後の調査において修正を迫られる可能性がある。なお、唯一平面的な調査をおこなったSD-151については、砂層埋没後に再掘削された上層溝群との関連があるため、弥生時代中期中葉から後期初頭の遺構の項で説明を行う。

SK-153

SK-153は調査区南半の東側排水溝において、断面のみを確認した土坑である。中層の腐食土層中に、蓋付きの四脚合子をはじめとする多数の木製品を含んでいた。下層においてもまだ多くの木製品が包含されていたが、調査区が狭いために坑底の確認はおこなわなかった。平面規模及び深さは不明である。出土土器は大和第Ⅱ-2様式である。

SD-201

SD-201は調査区の南端部分において、土層観察用トレンチと東西両排水溝により確認した大溝である。調査区の南端部を斜めに東北から南西方向へ横切っている。溝幅は、両肩を確認した東側排水溝の土層断面では約11mを測るが、溝の主軸に対して直交した数値ではないため、実際の溝幅は10mを越えるものではない。調査区南西隅の溝底が隆起しており、SD-151と同様に数条の溝が切り合う状況も考えられる。深さは約1.2mである。埋土中には大和第Ⅱ-1様式の土器を包含しており、本調査区における最も古い遺構の一つである。

(2) 弥生時代中期中葉から後期初頭の遺構（第5図）

SK-151

SK-151は調査区南端の中央で検出した土坑である。土坑南半は調査区外にあり全容は不明であるが、土坑北半の平面形は不整形であった。南側排水溝で確認した断面形は、逆台形である。深さは約0.5mを測る。中層の炭灰層によって、埋土が上下2層に分かれる。炭灰層上面において、碧玉製の大型管玉未成品が1点出土している。出土土器は未洗浄であるが、本土坑は調査区南半全体を覆う弥生時代中期中頃の明灰褐色砂質土によって埋没している。

Ⅲ. 調査の成果

第3表 主要土坑一覧表

土坑番号	平面形態	断面形態	床面形態	坑底土層	規模 (m)			坑底 標高	時期 (大和 様式)	主要遺物	備考
					長軸	短軸	深さ				
SK-105	隅丸方形	逆円錐形	平坦	灰黒色砂質土	1.30	0.85	0.60	46.96	弥・V		
SK-106	楕円形	円筒形	平坦	黒灰色粘砂	2.00	1.57	1.90	45.70	弥・IV	絵画土器	井戸
SK-107	楕円形	逆円形	平坦	灰色砂と黒灰粘の互層	(2.30)	(2.05)	(1.08)	46.42	弥・VI		井戸
SK-108	不整形	逆台形	平坦	暗灰粘	3.60	3.30	1.60	45.90	弥・III		井戸
SK-109	不整形	浅い皿形	平坦	黒色粘砂	1.96	1.76	0.21	47.33	弥・VI		
SK-110	不整形	浅い皿形	平坦	炭灰	(3.50)	2.06	0.20	47.35	弥・VI	ガラス小玉	
SK-111	不整形	浅い皿形	平坦	黒色粘質土	(2.50)	(2.12)	0.14	47.27	弥・VI		
SK-113	不整形	浅い皿形	平坦	黒色粘質土	2.01	1.82	0.12	47.39	弥・VI		
SK-115	隅丸方形	逆台形	平坦	暗灰粘	1.80	1.30	0.53	46.94	弥・III	フイゴ送風管	
SK-116	楕円形	逆台形	平坦	黒褐色粘質土	1.80	1.40	0.40	47.10	弥・III		
SK-117	不整形	ボール状	ボール状	黒色粘質土	1.30	1.05	0.25	47.25	弥・III	石包丁2点	竪穴住居跡の中央炉か
SK-118	不整形	円筒形	平坦	黒灰色シルト	2.05	1.75	1.92	45.63	弥・III	木製農具	井戸
SK-122	楕円形	逆台形	中央にPit	黒褐色砂質土	(1.10)	1.00	0.67	47.05	弥・VI		
SK-123	円形	逆台形	平坦	黒色粘質土	0.6	0.45	0.3	47.2	弥・III		
SK-125	不整形	逆台形	皿状	灰黒色砂質土	0.92	0.80	0.42	47.08	弥・VI		
SK-128	不整形	逆台形	平坦	暗灰褐色砂質土	(1.20)	0.60	0.31	47.35	弥・V	青銅器鑄型外枠	
SK-129	隅丸方形	逆台形	平坦	黒色粘質土	0.94	0.64	0.25	47.14	弥・III		
SK-131	不整形	浅い皿形	平坦	黒褐色粘砂	1.60	1.50	0.28	47.16	弥・IV	絵画土器?	
SK-132	楕円形	逆台形	中央にPit	灰黒色粘砂	1.04	0.82	0.42	47.07	弥・IV		
SK-140	不整形	上部ロート状で円筒形	平坦	灰色砂と黒色粘砂の互層	2.10	(1.10)	1.24	46.42	弥・IV		井戸
SK-142	不整形	上部ロート状で円筒形	皿状	黒色微粘砂	(1.0)	—	1.26	46.24	弥・III	水差形土器	井戸
SK-151	不整形	逆台形	平坦	暗灰粘	—	—	0.4	46.7	弥・III	大型管玉未成品	
SK-152	不整形	逆円錐形	ボール状	黒灰色粘砂	—	0.64	0.25	47.14	弥・II		
SK-153	—	—	—	—	—	—	—	—	弥・II	木製四脚合子	

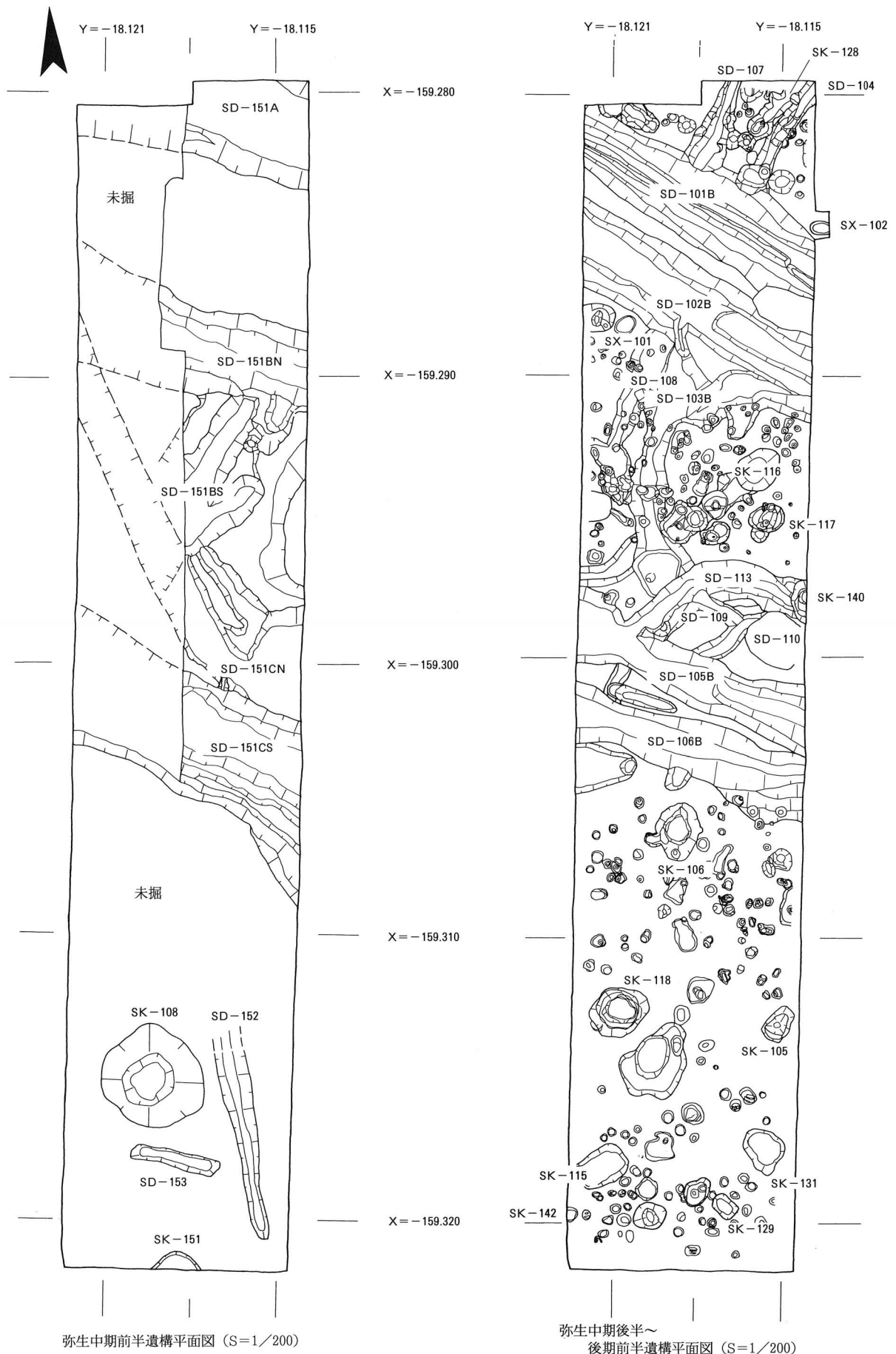
第4表 主要溝一覧表

溝番号	規模 (m)		溝底標高	走行方向	継続時期(弥生大和様式)						主要遺物	備考	
	幅	深度			I	II	III	IV	V	VI			
SD-101	2.00~2.20	0.30~0.42	47.26~47.40	北西-南東									SD-101Bの上層溝
SD-101B	2.25~3.00	0.57~0.80	46.80~47.07	北西-南東							青銅器鋳型外枠		
SD-102	2.80~3.60	0.26~0.46	47.25~47.51	北西-南東									SD-102Bの上層溝
SD-102B	2.75~3.00	0.60~0.73	46.75~46.90	北西-南東							青銅器鋳型外枠		
SD-103	1.00~2.60	0.24~0.50	47.18~47.34	南南西-北北東									SD-103Bの上層溝
SD-103B	1.00~1.10	0.09~0.22	47.29~47.36	南南西-北北東									
SD-104	0.60~0.72	0.07~0.72	47.04~47.62	南南西-北北東							広片口鉢 フイゴ送風管		
SD-105	2.0~2.8	0.13~0.22	47.40~47.44	東-西									
SD-105B	1.50~2.20	0.39~0.76	46.69~47.06	西北西-東南東									
SD-106	4.35~5.75	0.10~0.23	47.42~47.47	東-西									
SD-106B	1.40~2.60	0.47~0.68	46.87~46.96	西北西-東南東									
SD-107	0.64~1.40	0.21~0.37	47.27~47.68	南-北									SD-108と同一溝?
SD-108	0.80~1.40	0.23~0.35	47.16~47.36	南-北									SD-102Bに切られる
SD-109	0.50~0.74	0.16~0.27	47.09~47.15	東南東-西北西									SD-110に切られる
SD-110	0.7	0.25~0.37	46.99~47.05	南南西-北北東									SD-105Bに合流
SD-113	1.40	0.22~0.48	46.88~47.00	東-西									SD-105Bに合流
SD-151A	3.50以上	0.74~1.12	45.5以下	北西-南東									
SD-151BN	2.70~3.00	0.80~1.00	45.60~45.61	北西-南東							用途不明木製品		
SD-151BS	1.34~1.40	0.34~0.49	45.91~46.03	北北東-南南西							摂津搬入土器		
SD-151CN	0.52~0.70	0.13~0.35	46.16~46.29	南南東-北北西									
SD-151CS	3.74~4.00	1.48~1.72	47.28~47.44	北西-南東									
SD-152	1.08~0.50	0.32~0.79	46.26~46.80	北-南							柄状木製品		
SD-153	0.46~0.64	0.28~0.36	46.59~46.73	東-西									
SD-201	10.00以下	1.10~1.20	45.74~45.80	東北-南西									

Ⅲ. 調査の成果

第5表 主要柱穴一覧表

柱穴番号	平面 形態	断面 形態	床面 形態	坑底土層	規模 (m)			坑底 標高	残 存 構造物	時期 (大和 様式)	主要遺物	備考
					長軸	短軸	深さ					
Pit-103	楕円形	円筒形	平坦	黒褐色粘質土	0.44	0.40	0.40	47.20	柱根	VI		
Pit-105	円形	逆円錐形	平坦	黒褐色粘質土	0.32	0.30	0.30	47.33		IV		
Pit-119	円形	皿状	平坦	黒褐色粘質土	0.34	0.30	0.15	47.50			完形石包丁	
Pit-120	楕円形	円筒形	平坦	黒色粘質土	0.40	0.30	0.45	47.69		VI	上面に粘土塊を詰める	
Pit-133	楕円形	円筒形	皿状	黒色粘質土	0.30	0.25	0.39	47.65		VI	上面に粘土塊を詰める	
Pit-134	楕円形	円筒形	底 Pit	黒色粘質土	0.60	0.44	0.36	47.20		IV	土器片を詰める	
Pit-135	不整円形	円筒形	底 Pit	黒色粘質土	0.26	0.24	0.30	47.27		VI	管玉	
Pit-145	円形	円筒形	—	暗灰色粘質土	0.30	0.26	—	—		IV	土器片を詰める	
Pit-177	楕円形	ボール状	丸底	黒色粘質土	0.80	0.22	0.44	47.17		IV	土器片を詰める	
Pit-182	楕円形	円筒形	平底	黒褐色粘質土	0.45	0.35	0.64	46.85	礎板	Ⅲ-4	高坏	
Pit-187	楕円形	逆台形	平底	黒色粘質土	0.33	0.24	0.18	47.12	礎板			
Pit-202	円形	円筒形	丸底	灰黒粘	0.43	0.40	0.55	46.76	柱根			
Pit-203	楕円形	円筒形	平底	黒褐色粘質土	0.62	0.45	0.53	46.80	礎板			
Pit-208	円形	—	—	—	—	—	—	—		IV	土器片を詰める	
Pit-238	円形	円筒形	丸底	黒褐色粘質土	0.30	0.30	0.11	46.92		IV	近江系甕底部	
Pit-244	不正円形	逆台形	丸底	黒色粘質土	0.45	—	0.39	47.12		IV	土器片を詰める	
Pit-1114	楕円形	逆台形	丸底	黒褐色砂質土	0.40	0.30	0.18	47.32		IV		
Pit-1153	楕円形	円筒形	皿状	黒色粘質土	0.24	0.21	0.37	47.05	柱根	IV		
Pit-1166	円形	逆台形	丸底	黒褐色粘質土	0.26	0.26	0.22	47.22	柱根			
Pit-1176	楕円形	—	—	黒褐色粘質土	0.42	0.34	—	—		IV	土器片を詰める	
Pit-1180	円形	逆台形	丸底	黒褐色砂質土	0.34	0.32	0.13	47.22	柱根			
Pit-1187	楕円形	円筒形	平底	黒褐色砂質土	0.30	0.26	0.28	47.07	柱根			
Pit-1199	円形	円筒形	平底	灰白砂	0.36	0.35	0.40	46.85	柱根			
Pit-1200	円形	円筒形	平底	黒色粘質土	0.24	0.24	0.40	47.00	柱根			

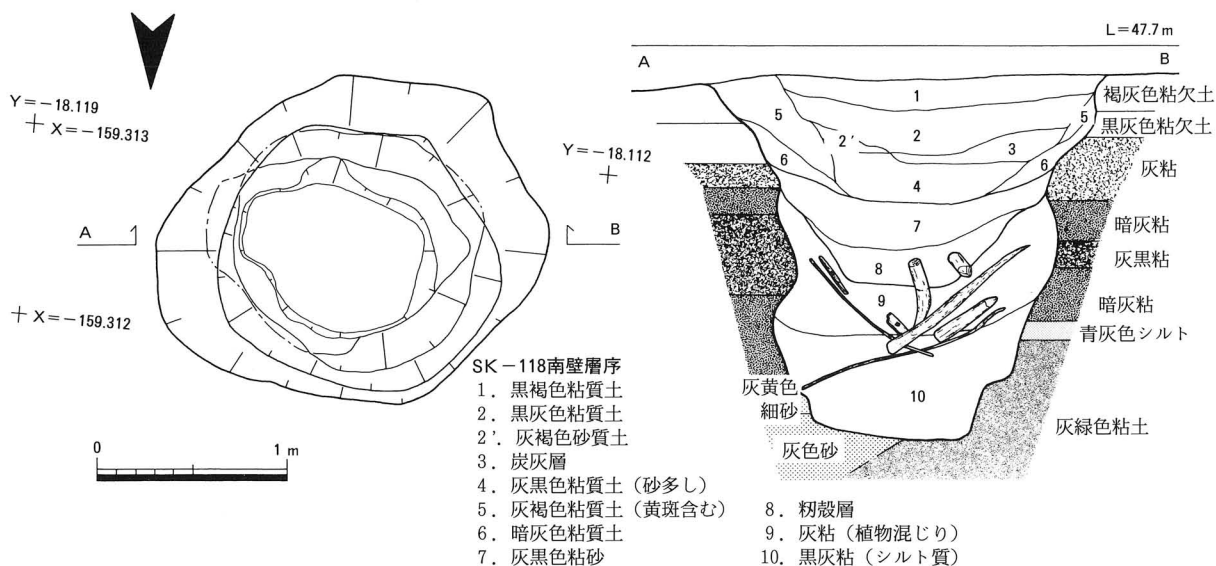


彌生中期前半遺構平面図 (S=1/200)

彌生中期後半～
後期前半遺構平面図 (S=1/200)

第5図 第61次調査遺構平面図(1)

III. 調査の成果



第6図 SK-118遺構平面図及び土層断面図 (S=1/40)

SK-108 (図版7)

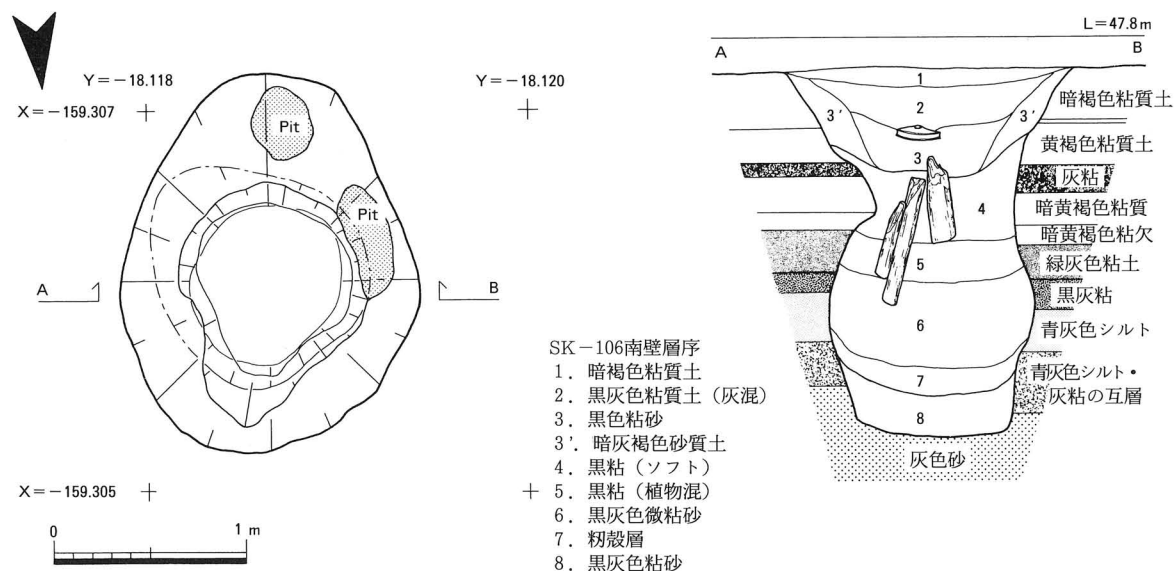
SK-108は調査区の南半で検出した土坑である。平面形は、長軸3.6m、短軸3.3mの不整円形である。断面形は、逆台形で深さ1.6mを測る。掘削時期は、その下層から出土した土器により大和第Ⅲ-1様式と考えられる。本土坑はSK-155を切っている。下層及び中層には多くの植物遺体を含んでおり、中層上面の炭灰層までは徐々に埋没していった状況がうかがえる。これに対して、上層は調査区南半全体を覆う弥生時代中期中頃の明灰褐色砂質土によって一時に埋没する。埋没後も土坑の上面は窪んでいたらしく、その窪みに大和第Ⅳ様式と第Ⅴ様式の土器とともに炭灰や多数の焼土塊が廃棄されていた。土坑の性格は、その形態から井戸と考えられる。

SK-118 (第6図、図版6)

SK-118は調査区の南半で検出した土坑である。前述したSK-108の西側に隣接している。平面形は、長軸2.05m、短軸1.75mの不整円形である。断面形は円筒形であるが、その上面はロート状に開く。深さは1.92mを測る。中層下面には、粃殻が厚さ約20cmに層をなして堆積していた。粃殻層の下には灰色粘土が堆積し、焼木などとともに木製農具が出土した。農具は、柄の着いた平鍬とえぶり各1点である。いずれも破損あるいは焼けた製品であり、破損したため本土坑に廃棄されたものと考えられる。土坑の性格はその平面・断面形態から井戸と思われる。また、同じ井戸と考えられるSK-108に隣接することから、SK-108が明灰褐色砂質土で埋没した後に掘削されたものと考えられる。掘削時期は大和第Ⅲ-3様式と考えられる。

SK-115

SK-115は調査区の南半西側で検出した土坑である。平面形は、長軸1.8m、短軸1.3mの長方形を呈する。断面形は逆台形で、深さは0.5mを測る。層位は中位に炭灰層を挟んで大きく上下二つに分かれる。特筆すべき遺物としては、上層下部に堆積した炭を含む黒灰色粘質土から青銅器製造に関連する土製送風管片が出土している。掘削時期は出土土器から、大和第Ⅲ-4様式と考えられる。また、最終埋没時期は大和第Ⅳ様式以降に下らないものと考えられる。



第7図 SK-106遺構平面図及び土層断面図 (S=1/40)

SK-106 (第7図、図版9-1)

SK-106は調査区の中央で検出した土坑である。平面形は、長軸2.0m、短軸1.57mの楕円形である。ただし、遺構の分布密度が高い地区に掘削されており、柱穴などとの切り合いによって、平面形はやや変形している。断面形は円筒形であるが、その坑底は脆弱な青灰色シルト及び灰色砂に達しており、壁面が下半から崩れ、大きくえぐれている。深さは1.9mを測る。上層下面からは、大和第V様式の高坏の坏部と完形の小型甕が出土した。また、中層からは、建築部材と考えられる丸太状や半裁状の柱材が出土した。これらの上部は腐食していた。この柱材が廃棄された段階には、既に腐食していたと考えられる。周辺部での整地作業を行った際に、不要になった柱材を本土坑に投げ入れたのであろう。最下層の黒灰色粘砂の上面には、粉殻が厚さ約15cmに層をなして堆積していた。土坑の性格はその平面・断面形態から井戸と思われる。最下層から出土した土器は、大和第IV様式に属する。

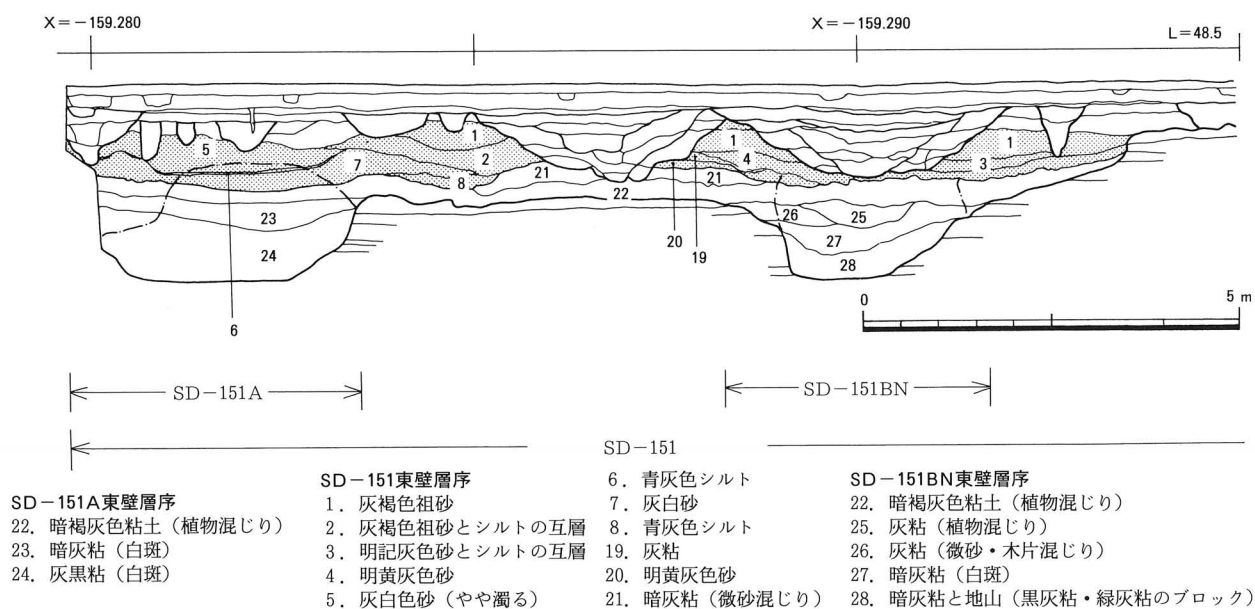
SK-140

SK-140は調査区中央の東端で検出した土坑である。平面形は円形を呈すると考えられるが、その大部分は調査区外の東側に広がっている。現状での最大径は約2.1mである。断面形は円筒形であるが、上部はロート状となる。また、本土坑はSD-151の北肩とその埋土である砂層との境に掘削されている。土坑の南壁部分は、砂層側にあたるため崩壊している。土坑内の層位は大きく上下2層に分かれる。下層では炭灰や木片が薄く交互に互層をなして堆積している。土坑の性格はその平面・断面形態から井戸と思われる。

SK-142 (図版10-1)

SK-142は調査区の南半西端で検出した土坑である。その大半は西側の調査区外に広がり、また調査区内は西側排水溝部分と重なっていたため、その上面を検出することはできなかった。現状での最大径は約1.0mである。断面形は逆円錐形を呈し、深さは約1.3mである。坑底面よりやや浮いた状態で、流水文を施した完形の水差形土器(図版24-5)が出土している。

III. 調査の成果



第8図 SD-151・151A・151BN東壁土層断面図（S=1/100）

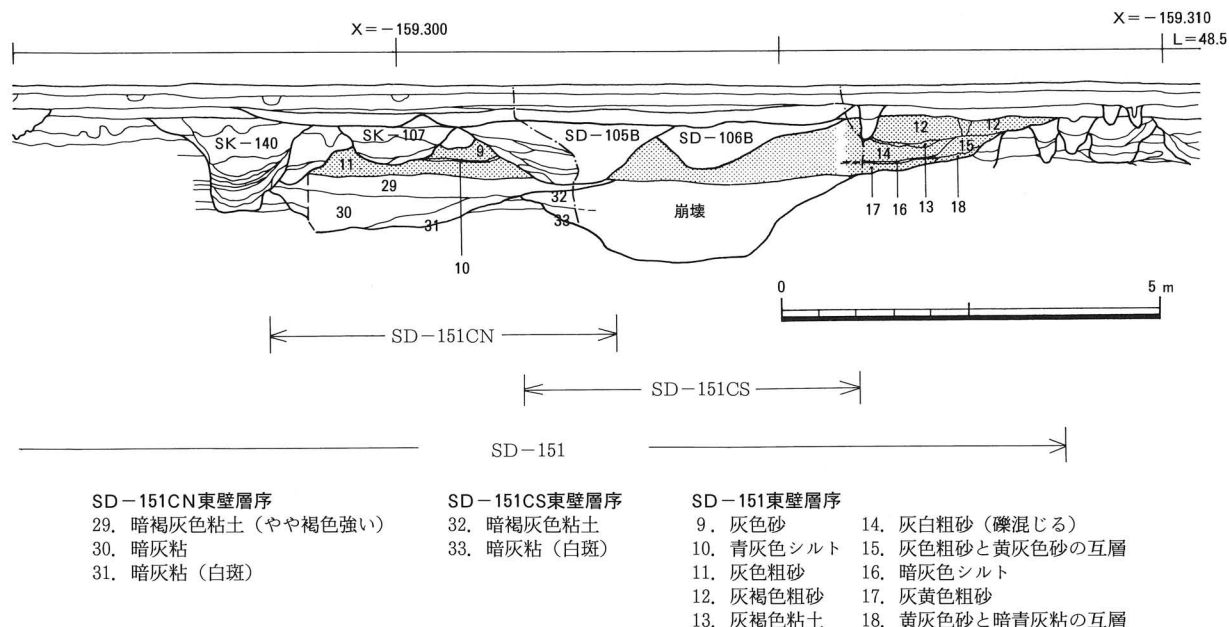
SD-151A・151BN・151BS・151CN・151CS（第8・9図、図版3）

調査区北半部は、弥生時代中期初頭に掘削された集落内部の南地区を区画する3条の大溝およびそれらを連結する溝が上部で合流し、大規模な1つの溝の様相を呈している。したがって、遺構の名称は下部でそれぞれに分かれた溝部分を北からA・BN・BS・CN・CSとし、上部の合流部分をSD-151として記述する。また、上部のSD-151については完掘しているが、下部の溝群については調査区東半のみ調査を行い、調査区西半は未掘である。

SD-151Aは調査区北端で検出した大溝である。北肩は調査区外であるが、溝底で北肩への立ち上がりを確認している。このことから、溝幅は調査区内の現状幅である3.5mから1m以上を越えないと思われる。深さは約1.1mを測る。北西から南東方向に走行する。溝の埋土は3層に分層されるが明瞭な差はなく、いずれの層も植物を含む白斑のある暗灰色粘土層である。出土遺物は最下層から大和第Ⅱ-2様式、上層から大和第Ⅲ-1様式の土器が出土している。また、最下層から大型蛤刃石斧の完形品が1点出土している。

SD-151BNは調査区北半の中央で検出した大溝で、溝幅約3.0m、深さ約1.0mを測る。北西から南東方向に走行し、SD-151Aに並行する。埋土は大きく3層に分層されるが、上層と中層の間に、薄く明黄灰色の砂層が認められる。遺物は木製品が多く出土しており、上層から柄着きの狭鍬が、中層から木製楯と共に用途不明木製品（あるいは窓枠）が、下層からは束になった有頭棒状木製品が出土した。土器は最下層が大和第Ⅱ-2様式、上層では大和第Ⅲ-1様式のものが出土している。

SD-151BSは、SD-151BNとSD-151CSの間で検出した溝で、溝幅約1.4m、深さ約0.5mを測る。SD-151BNから分岐し、南南西方向に走行する。南南西側は調査区西半が未調査のため不明であるが、その方向からSD-151CSに連結していた可能性がある。したがって、SD-151BSとSD-151CSを接続させる小溝であろう。遺物には、胴部上半に櫛描き波状文を施した甕があり、摂津地方からの搬入品と考えられる。溝の時期は大和第Ⅱ-3様式である。



第9図 SD-151・151CN・151CS東壁土層断面図 (S=1/100)

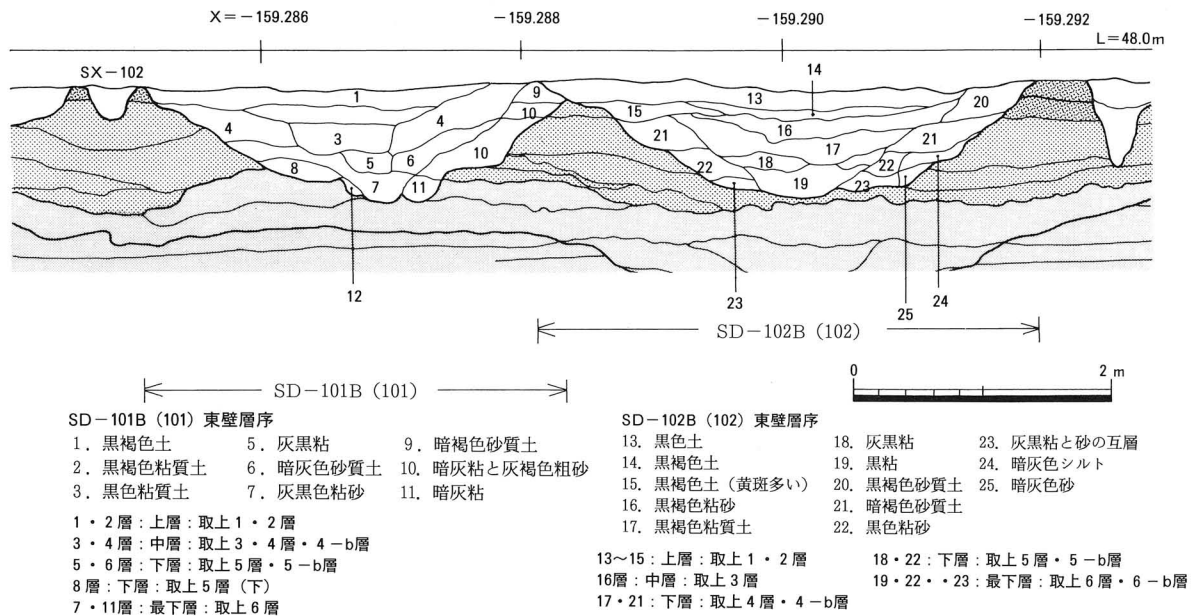
SD-151CNは、SD-151BNとSD-151CSの間で検出した小溝で、幅約0.7m、深さ約0.3mを測る。南南東から北北西にむかって走行する。平面的には確認できなかったが、土層断面の観察から、SD-151BN・BS・CS埋没後に掘削したものと考えられる。機能を果たさなくなったSD-151BN・BS・CSにかわって、排水を目的として掘削された可能性がある。出土土器は大和第Ⅱ-3様式のものと同様Ⅲ-1様式のもの混在している。

SD-151CSは調査区北半の南で検出した大溝で、幅約4.0m、深さ約1.7mを測る。SD-151A、SD-151BNに並行する。この3条の大溝が、集落内部の南地区を区画していた北側の大溝群と考えられる。埋土は大きく3層に分層できるが、最下層では南北両肩に地山の粘土をブロック状に含んだ暗灰色粘土が堆積している。ここに含まれる土器は、大和第Ⅱ-1様式のものであり、並行する3本の区画溝の出土土器では最も古い資料である。また、平面では確認できなかったが、中層埋没後に幅約0.8mの小溝が北肩に平行して掘り込まれていることが土層断面より確認できた。上層からは大和第Ⅲ-1様式の土器が出土している。

SD-151 (第8・9図、図版4)

SD-151は上記の151A・BN・BS・CN・CSが埋没した後、その上部が流路として機能していた段階のもので、灰黄色を主とする砂層で埋没している。SD-151CSの南肩がそのままSD-151の南肩となるが、北肩は調査区外にある。これより想定される規模は、溝幅25m以上、深さ約1.0mである。砂層の堆積状況は、大きく二分される。南半の下層では灰黄色細砂層、北半の上層では灰黄色粗砂層が堆積しており、徐々に北側へ流路を変更していったと推定される。また、上層遺構であるSD-101BとSD-102Bの肩となった西半の粘土層は、SD-151の内部にある中洲的(土手)なもので、流水は激しくここにぶつかって、その手前の底面をえぐるように長軸2.3m、深さ0.8mほどの穴を造ったようである。砂層の形成時期は、下層溝が埋没した大和第Ⅲ-1様式以降から、上層遺構群が形成される大和第Ⅲ-3様式以前に位置づけられる。ただし、これは南側の状況であり、北側の砂層形成は大和第Ⅲ-4様式まで下る可能性がある。

III. 調査の成果



第10図 SD-101B (101) ・SD-102B (102) 東壁土層断面図 (S=1/60)

SD-101B (101) ・SD-102B (102) (第10図、図版11~15)

両溝は、調査地の北端で延長10mにわたって検出した北西から南東方向に並走する大溝である。下層遺構面の大溝であるSD-151が粗砂層で埋没した後、再掘削されている。北側の溝をSD-101B、南側の溝をSD-102Bとする。両溝は近接しており、SD-101Bの南肩とSD-102Bの北肩は一つの土手として造られている。両溝ともほぼ同規模で、溝幅約3m、深さ0.7mを測り、南東方向に深く掘削されている。SD-101Bの底面は2つの小溝状に分かれており、調査では確認しえなかったが、最初の掘削時のものと再掘削時のものの2つである可能性がある。

溝の堆積状況もよく似ており、同時期に掘削・開口・埋没したと考えられる。溝内の堆積は大きく5層に分層される。溝の両肩には周囲からの流れ込みである灰褐色砂質土層が堆積した後、大きく4つの層で形成される。最下層: 黒色粘土層・灰黒色粘砂層、下層: 灰黒色粘土層、中層: 黒色粘砂層、上層: 黒褐色土層(鉄分凝縮層)で、最下層から中層にかけては自然埋没と考えられるが、上層は大量の土器細片を含む土器層であり、人為的に埋めた可能性がある。

最下層から中層までは、大和第IV様式の土器を混在しながらも大和第V様式の土器が、上層では大和第IV様式と大和第V様式の土器を混在しながら大和第VI-4様式の土器が大量に出土している。このことから、両溝は大和第IV様式に掘削され、大和第V様式まで溝さらえをしながら機能した後、埋没したと考えられる。このため、土器型式が混在する状況になったのであろう。ただし、大和第IV様式の土器のみを出す単純層がないことから、後期初頭の掘削の可能性も残している。その後、大和第V様式に埋没した溝が、大和第VI-4様式に幅3m、深さ0.3mほどの小規模な溝(SD-101・SD-102)に再掘削されたと考えられる。南側のSD-102Bは南南西から北北東に走行するSD-103Bと合流し、水が流れ込む構造になっている。

出土遺物は両溝とも各層から大量の土器が出土しているが、石器や木製品、獣骨、種子類は少ない。土器は、中層から完形を含む大形破片の土器(大和第V様式)が出土している。また、これらの土器は、両溝で出土した破片が接合するものがあり、同時開口であることを物語っている。

特に注目される遺物としては、土製鋳型外枠や送風管などの青銅器鋳造関連遺物と高熱を受け変形した多数の土器片がある。これらの遺物は、下層から上層までの各層から出土しているが、特に下層と中層に多く、大きな破片として出土している。

SD-103B (103) ・SD-108

SD-103B とSD-108は、SD-102B の南側で検出した溝で、ともに南南西から北北東方向に走行する。SD-108はSD-103B やSD-101B、SD-102B に切られていると考えられ、SD-101B の北側で検出したSD-107と同一の溝の可能性はある。したがって、SD-108はSD-151砂層埋没後に掘削された排水用の小溝の可能性はある。本溝埋没後、SD-103B がSD-102B がともに掘削され、後期初頭まで継続したと思われる。SD-103B は後期末に再掘削 (SD-103) され、SD-101とSD-102を切りながら、北東方向に走行する。両溝の埋土は粗砂層をベースに掘削していることから、砂質土で構成されている。遺物は土器が主であるが全体に少ない。土製鋳型外枠がSD-103B の上層から1点出土している。

SD-104 ・SD-107

SD-104とSD-107は前述SD-101B の北側に掘削された小溝である。両溝とも南南西から北北東方向に走行する溝で、調査区外に想定されるSD-101B やSD-102B に並行する大溝に流れ込むと考えられる。SD-104は南から北に向かって急激に深くなり、溝幅0.7m、深さ0.7mを測る。埋土は上層が黒褐色砂質土、下層の深みの部分は黒色粘砂層で構成され、下層から送風管と朱の付着した広片口鉢が出土している。溝の時期は最初の流れ込みの部分で大和第IV様式の半完形の高坏が出土しているが、下層では大和第V様式の土器が出土している。

SD-107は、前述SD-108と同一溝と考えられる。黒褐色砂質土で埋没し、遺物は少ない。溝幅1.4m、深さ0.3mを測る。

SD-105B ・SD-106B (図版16)

SD-105B とSD-106B は、前述のSD-151埋没後の砂層上に掘削された溝である。両者には切り合いの前後関係があり、SD-106B が埋没した後にSD-105B が掘削されている。しかし、両溝の出土土器にほとんど時期差はない。

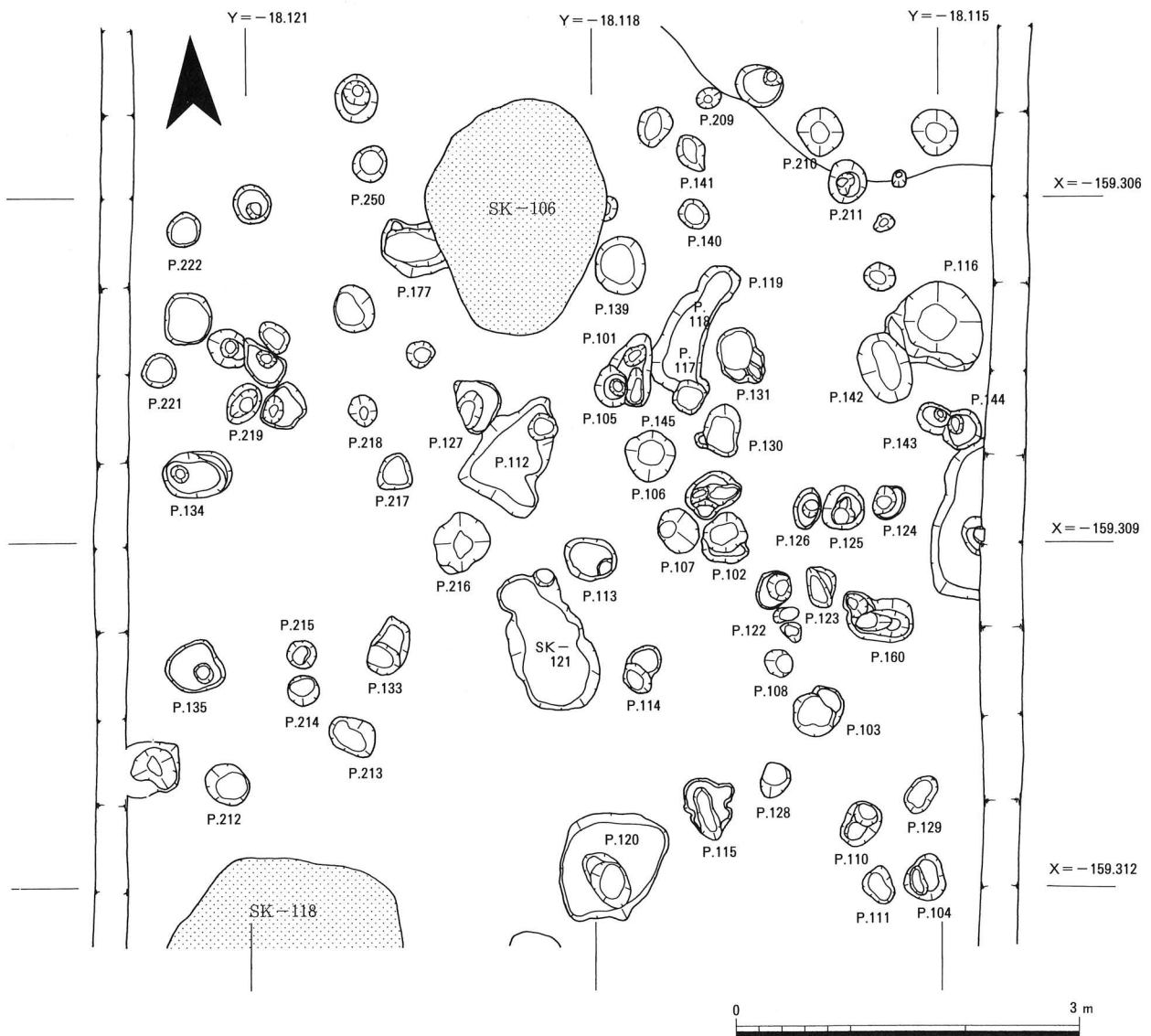
SD-105B は幅約2.2mで、深さは約0.7mである。溝底の標高は調査区西端で約47.0mであるが、溝東半では一段低くなっており東端で約46.7mを測る。このことより、SD-105B は西北西から東南東に向かって走行していたと考えられる。埋土は3層からなり、中・下層は多くの炭灰を含んでいた。下層では調査区中央において直径3cm前後の白い石 (投弾?) の集積が検出された。なお、SD-105B はSD-106B の北肩を切り込んでいる。

SD-106B は幅約2.6mで、深さは約0.7mである。溝底の標高は調査区西端で約47.0m、東端で約46.9mである。さほど高低差はないが、強いて言うならば西北西から東南東に向かって走行していたのであろう。埋土は3層からなる。

SD-113

SD-113はSD-105B の北側に隣接し、その西端部がSD-105B の北肩に連結する弧状の溝である。調査区の東端においてSK-140に切られている。溝幅は約1.4m、深さ約0.5mを測る。溝底標高は西端が46.9m、東端は47.0mであり、SD-105B に外部から水を引き込む施設だったと考えられる。埋土は中層の炭灰層によって大きく2分される。

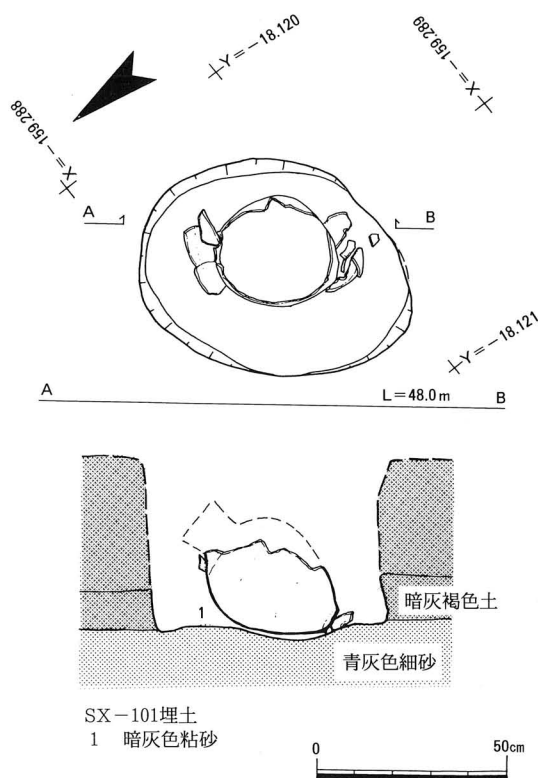
Ⅲ. 調査の成果



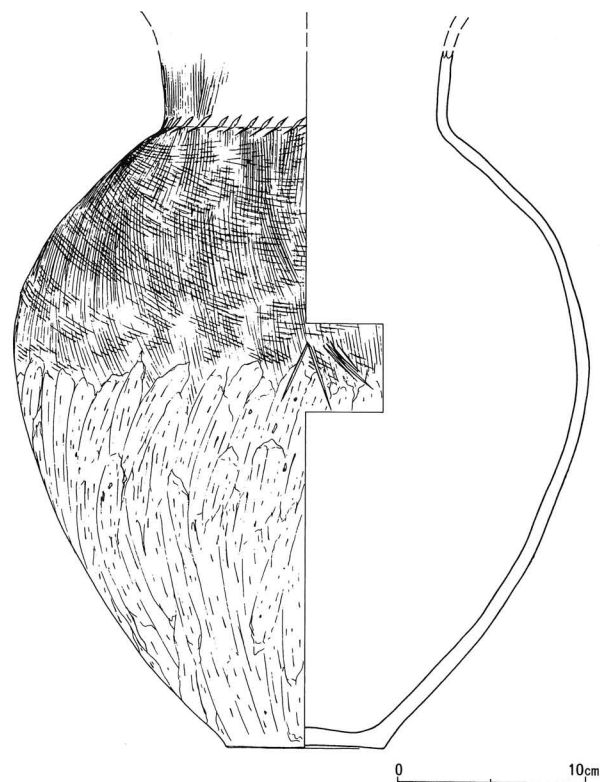
第11図 調査区中央柱穴群平面図 (S=1/60)

柱穴群 (第5表、第11図、図版17~22)

本調査区からは多数柱穴が検出された。柱穴の分布は調査区中央にあるSD-105B・106Bによって南半と北半に区分される。それは、検出面が基本堆積土層の第IV層：暗褐色粘質土であるのか、SD-151埋土の暗褐色砂質土であるかの違いでもある。また、この違いは遺構に差を生み出すようである。すなわち、北半ではSD-101BやSD-102Bに切られ消滅している部分があるが、柱穴は密に分布し重複が多く、炭灰を含むものがあることから竪穴住居跡が想定される。これに対し南半、特に調査区中央の柱穴は重複は少なく、疎らである。また、柱根や礎板を残すものや、柱を抜き取ったあと土器片や粘土を詰め込むものがある。これらの柱穴は高床建物が想定される。なお、調査区中央の柱穴から出土する土器は、第Ⅲ様式後半から第Ⅳ様式のもの、第Ⅵ様式後半のものに、二つに大きく分かれる。



第12図 SX-101土器棺検出状況図及び
見とおし図 (S=1/20)



第13図 SX-101土器棺実測図 (S=1/4)

SX-101 (第12図、図版23)

SX-101はSD-102Bの南肩、調査区西側で検出された中期後半の土器棺墓である。墓壇は、長軸75cm、短軸58cmの楕円形を呈する。暗灰褐色土を掘り込んでおり、埋土は暗灰色粘砂である。墓壇の検出面は標高47.55mであるが、土器棺の上面を47.65mで検出しており、墓壇の掘り込み面はより高いものであったと考えられる。

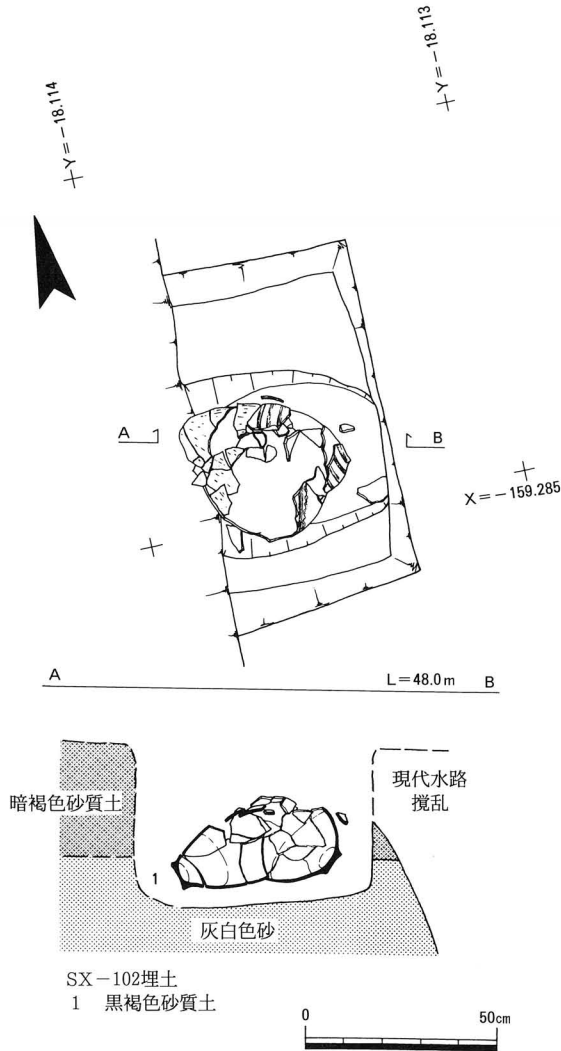
主体部は口縁部を打ち欠いた短頸壺である。頸部側をやや上げた状態で、横位に据えられている。また、台付鉢が打ち欠かれて、短頸壺の頸部側に鉢部が、底部側に脚部が添えられていた。台付鉢の鉢部は、短頸壺との土器棺の蓋に転用されていた可能性が高い。

SX-101出土土器 (第13図)

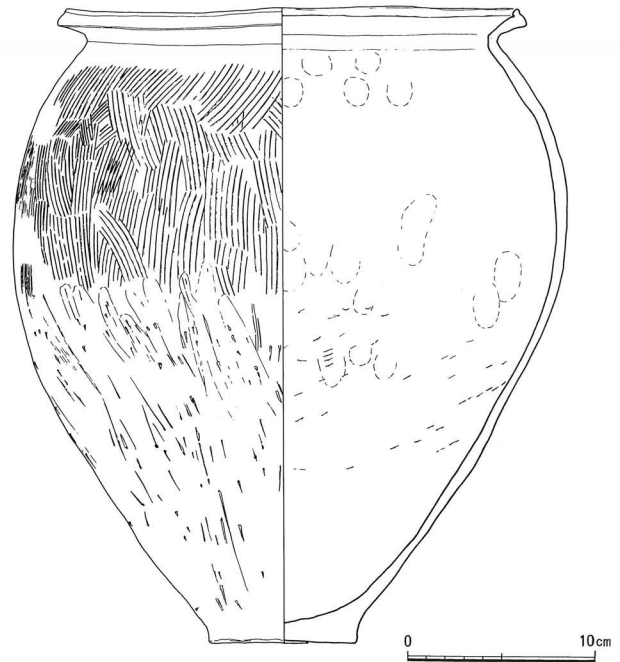
第13図は短頸壺である。胴部上半に最大径をもち、直立する頸部がつく。口縁部は打ち欠かれているため不明である。頸部には板状工具を用いた刺突文が巡る。外面胴部上半には左上がりのタタキと、それを消すように上から縦方向のハケが施される。外面胴部下半には下から上へのケズリが施されるが、胴部中央のケズリは上から下にむかって施されている。内面には丁寧なナデが施されている。なお、胴部中央には、逆V字形の記号文が焼成後に刻まれている。

台付鉢はほぼ完形に復元できる。脚部は短く開き、5方に円孔をもつ。鉢部は口縁をゆるやかに屈曲させる。口縁部に4条、脚部に3条の凹線文をもつ。これらは大和第IV様式の特徴である。

Ⅲ. 調査の成果



第14図 SX-102土器棺検出状況図及び
見とおし図 (1/20)



第15図 SX-102土器棺実測図 (S=1/4)

SX-102 (第14図、図版23)

SX-102はSD-101Bの北肩、調査区東側で検出された中期後半の土器棺墓である。墓壙は楕円形を呈すると考えられるが、長軸部分が擁壁と発掘時の排水溝によって削平されてしまっている。短軸は50cmを測る。暗褐色砂質土を掘り込んでおり、埋土は黒褐色砂質土である。墓壙の検出面は標高47.68mであるが、土器棺の直上を覆った基本堆積土層の第Ⅲ層：黒褐色土に侵食・攪乱をうけ、本来の掘り込み面の高さは残していないと考えられる。

主体部は、甕と胴部上半を打ち欠いた壺である。両者を横位の位置で合わせ口になっている。また、壺の打ち欠かれた胴部上半は、土器棺の上面におかれていた。

SX-102出土土器 (第15図)

第15図は甕である。胴部上半に最大径をもち、しまりのない頸部から直線的な短い口縁部が屈曲する。口縁上端はヨコナデによって、つまみだされる。外面上半はタテハケ、下半には下から上へのケズリが施される。内面は丁寧にナデられるが、中央付近にラセン状に爪痕を残す。

壺は胴部上半のほとんどを欠くが、頸部まで復元が可能である。短頸の広口壺であろう。胴部上半の櫛描文は、直線文と波状文が交互に施される。これらは大和第Ⅲ-4様式の特徴である。

(3) 弥生時代後期後半の遺構 (第16図)

落ち込み I・II

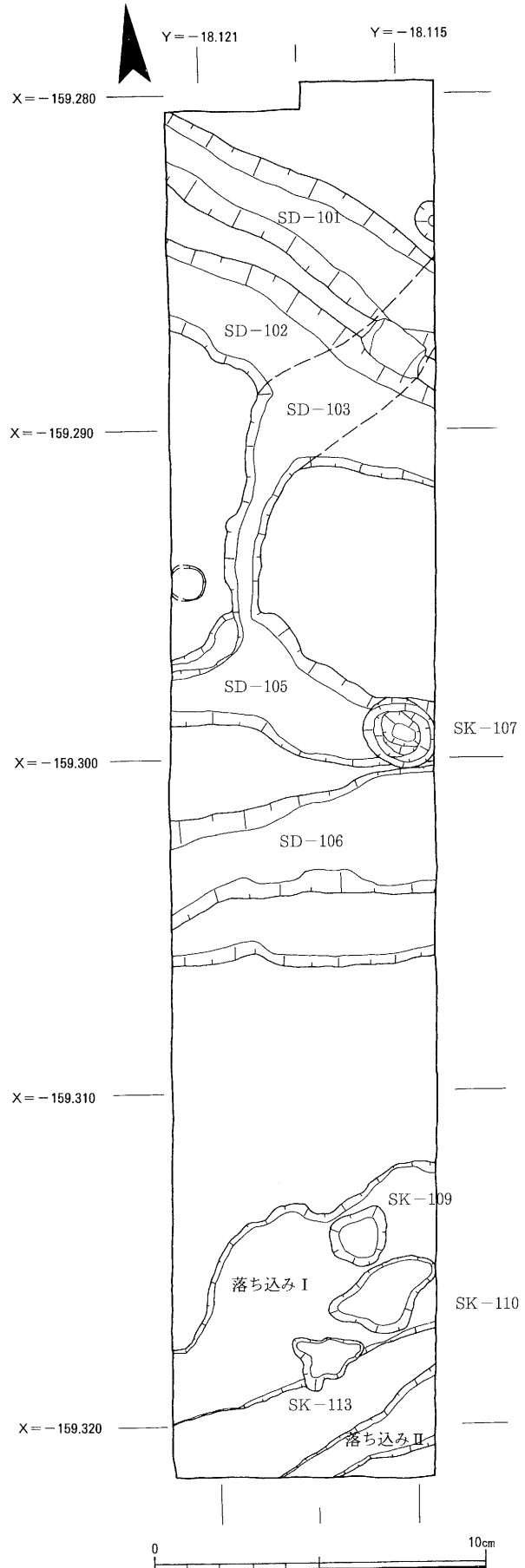
落ち込み I・II は、調査区南端部で検出した性格不明の遺構である。調査当初、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層である第Ⅲ層：黒褐色土を除去して弥生時代後期あるいは中期後半の遺構面を検出したわけであるが、調査区の南端部では、黒褐色土が2条の溝状に落ち込んでいた。しかし、その掘り方は明瞭ではなく、また平面形もいびつな、落ち込み状と呼ぶべき遺構であった。北側の規模の大きいものを落ち込み I、南側の小さいものを落ち込み II とした。

落ち込み I は北東から南西への軸をもち、幅は最も大きいところで約4.5m、最も小さいところで約2.0m、深さは約0.1mである。

落ち込み II もまた北東から南西への軸をもち、落ち込み I に並行している。幅は最も大きいところで約1.8m、最も小さいところで約1mである。深さは約0.1mである。いずれも大量の土器を含んでいた。

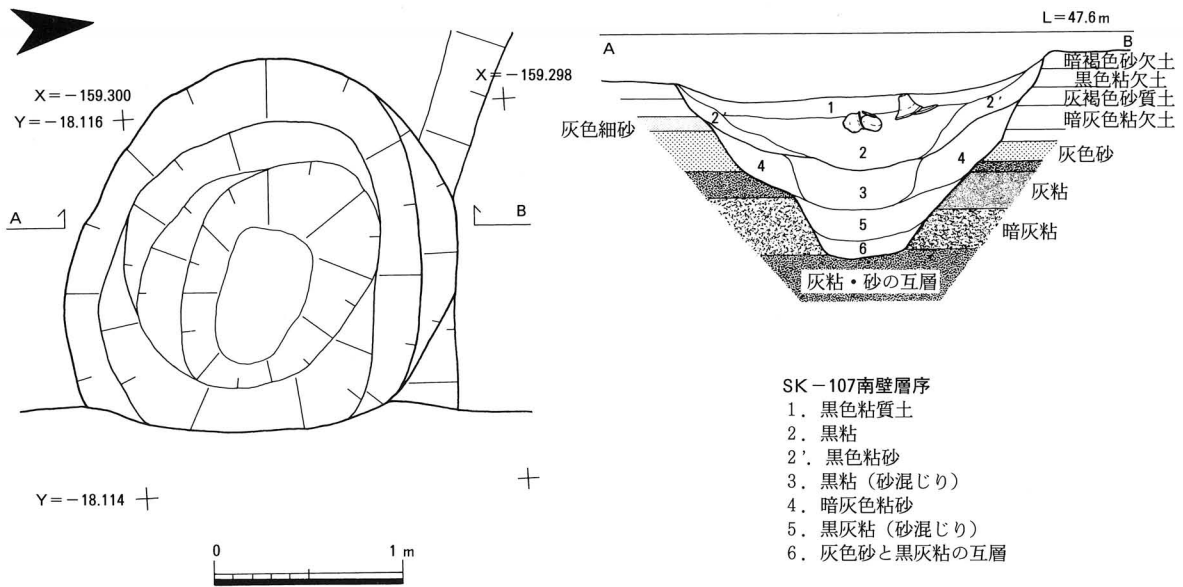
落ち込み I を完掘後、その底面で SK-105・108・109・110・113・114・115 などの弥生時代中・後期の土坑や、多数の柱穴を検出している。このうち、落ち込み I の出土土器と同じ弥生時代後期後半の土器を含んだ、SK-109・110・113 は浅く不整形な土坑である。これらが、土坑であるのか落ち込み I のより窪んだ底面の掘り残しになるのか検討の余地がある。また、一方の考え方として、落ち込み I の埋土内には後期後半の大きな土器破片がまとまっている地点が何か所もあり、切り合いの激しい遺構群の上面を落ち込みとして検出したことを想定しておく必要もあろう。

特筆すべき遺物として、落ち込み I 検出時にヒスイ勾玉が出土している。その他、落ち込み I と落ち込み II の間から銅鏃が、SK-110 の上面からガラス小玉が出土している。



第16図 第61次調査遺構平面図(2)

III. 調査の成果



第17図 SK-107遺構平面図及び土層断面図 (S=1/40)

SK-107 (第17図、図版8)

SK-107は調査区中央東端で検出した土坑である。SD-151の埋土である砂層に掘り込まれている。底面はSD-151の下層溝であるSD-151CNの上層埋土に到達している。また、その上面はSD-105によって、削平されていた。検出した状態での平面形は不整形で、長軸2.3m、短軸2.1mを測る。断面形は逆台形で、深さはSD-105の削平をまぬがれた北肩から底面までで約1.1mを測る。埋土は上層が削平された状態で7層に分層できるが、大きくは中・下層の2層である。下層はSK-107が砂層中に掘り込まれているため、早い段階に崩落して堆積した粘砂層であり、中層は井戸機能を果たさなくなった段階の窪みに堆積した粘質土層である。中層には大和第VI-3様式の土器が、半完形で多数廃棄されていた。土坑の性格はその平面・断面形態から井戸と思われる。

SD-105・106

SD-105・106は調査区中央で検出した溝である。SD-105は西から東に走行する溝で、幅約2.8m、深さ約0.2mを測る。北肩にSD-103が取り付く。SD-106もまた西から東に走行し、溝でSD-105に並行する。溝幅は約5.5m、深さ約0.2mを測る。

検出当初においてSD-105・106は、排水溝の土層観察から下層にあるSD-105B・106Bの再掘削溝を想定していた。しかし、SD-105B・106Bと105・106の方向が一致しないことや、出土土器の間には大きな時間の断絶があることから、下層溝を意識した再掘削といったものではないと判断した。おそらく、SD-105B・106Bが埋没した後も土地はやや低く、雨水の流路となっていたのであろう。それゆえに、南から北へむかって走行するSD-103をSD-105の北肩に取り付け、SD-102への排水を行う必要があったのであろう。その低地部分を弥生時代後期後半になって、幅を広げて浅く掘り窪め排水機能を高めたのが、SD-105・106であると考えられる。

4. 出土遺物

出土遺物は、弥生土器・土師器・石器・木製品など遺物箱500箱に及ぶ膨大な量が出土している。また、青銅器の鑄造関連遺物を検出することを目的として、それら遺物を多く出土したSD-101B・102B下層の堆積土を土嚢袋にして約300袋ほど採集した。これらの遺物に関しては目下、洗浄中であり、新たな重要遺物が発見される可能性を残している。遺物の大半は弥生時代中期から後期の土器が占める。弥生時代前期の土器は、下層の遺構が未調査のため、出土量は少ない。また、石器や獣骨類の出土量は集落内部の調査としては比較的少ないが、これも上層遺構に重点をおいた調査方法に起因するものである。特殊な遺物としては、青銅器の鑄造関連の遺物や銅鏃の青銅器類、大型の管玉未成品などの玉類がある。なかでも、重要である青銅器の鑄造関連遺物とその相伴土器は、詳しく触れることにするが、鑄造関連遺物は、かなり広範な地域に拡っており、また、未洗浄分にも含まれていることが想定されることから決定的なものではない。

このような状況のため、遺物全体を把握した報告とはならないが、これまでに判明した点を中心にその概要を報告する。

(1) 弥生土器

今回の調査で出土した弥生土器は、前期から後期末に及ぶものである。このうち本概報では、青銅器鑄造に関連する遺物が多数出土した、SD-101BとSD-102Bの弥生土器について報告を行う。なお、両溝はほぼ同規模で、肩を接して2条1対で機能していたと考えている。青銅器鑄造関連遺物や弥生土器は、両溝間の同層位どうして接合するものが多い。そこで、SD-101BとSD-102Bの出土土器については、遺構間の区別なく一括して報告を行う。

SD-101B・102B 出土土器（第18～21図、図版24）

SD-101Bと102Bの出土土器は、上層（SD-101・102）も含めると、大和第IV様式～庄内式までの時期幅がある。このうち、SD-101Bと102Bの埋土に相当する中層と下層からは、大和第IV・V様式の土器が出土した。大和第V様式の土器は最下層からも出土し、大和第IV様式の土器とは混在して出土する。大和第IV様式の土器は、溝の肩付近からまとまって出土しており、それが溝の掘削時期を示すのか、遺物包含層からの混入を示すのかは検討を要する。ただし、出土する大和第IV様式土器の破片は比較的大きく、まとまっている。また、両溝の周囲からは大和第IV様式の土器棺が2基検出されており、環濠や区画溝に接して土壇墓や土器棺墓が配置される例があることから、大和第IV様式に溝が存在していた可能性は高い。そして、大和第V様式の再掘削によって、大和第IV様式の土器単層が攪乱を受けてしまったと理解したい。

出土土器の遺構内訳は以下のとおりである。図の土器番号で示した。主に両溝の第4層～第5（下）層で出土している。

SD-101B 出土土器	2・7・10・11・13・26・27・29・30～34・36・40・41・44・46・47・49・52・54・57
SD-102B 出土土器	9・12・14・15・18～21・24・25・28・35・38・39・43・45・48・51・53・55・56・58・60
両溝出土土器	1・8・16・17・22・23・37・42・50・59

Ⅲ. 調査の成果

第Ⅳ様式（第18図）

壺 1～6は広口壺。1・2は加飾あるもので、どちらも口縁部内面には橢原体による刺突文を時計まわりに施す。1は拡張された口縁部端面に橢描波状文を、頸部直下には橢描簾状文を施す。2は口縁部端面と頸部下端に3条の凹線文を施す。口縁部端面の凹線文上には、円形浮文を等間隔に連続して貼り付ける。頸部下端の凹線文に接した胴上半部には、橢描簾状文を施す。3は口縁部に2孔1対の紐孔をもつ。4は拡張された口縁部の上端がやや長く、受け口状を呈する。口縁部を上下に拡張する際に施されたヨコナデが、2条の凹線状のくぼみとして口縁部端面に残る。頸胴間には粘土紐による偏平な凸帯を貼り付け、ハケ原体による刺突文が巡る。5は口縁端部を上下に拡張する。頸部と胴部の境にはハケ原体による刺突文が巡る。外面はタテハケを残し、胴部上半ではハケの下地調整として水平方向のタタキを施す。内面胴部上半には、横方向のハケを施す。6は胴部の中位に最大径をもつ小型の広口壺。口縁端部は上に拡張される。頸部には2孔1対の紐孔が開けられる。短い頸部の上端と下端には凹線文を施す。胴部の張る部分には、刺突文が2段に巡る。底部には、焼成後の穿孔がある。このような形態および文様施文は大和にはなく、中部瀬戸内地方まで含めた西方からの搬入品と考えるべきであろう。

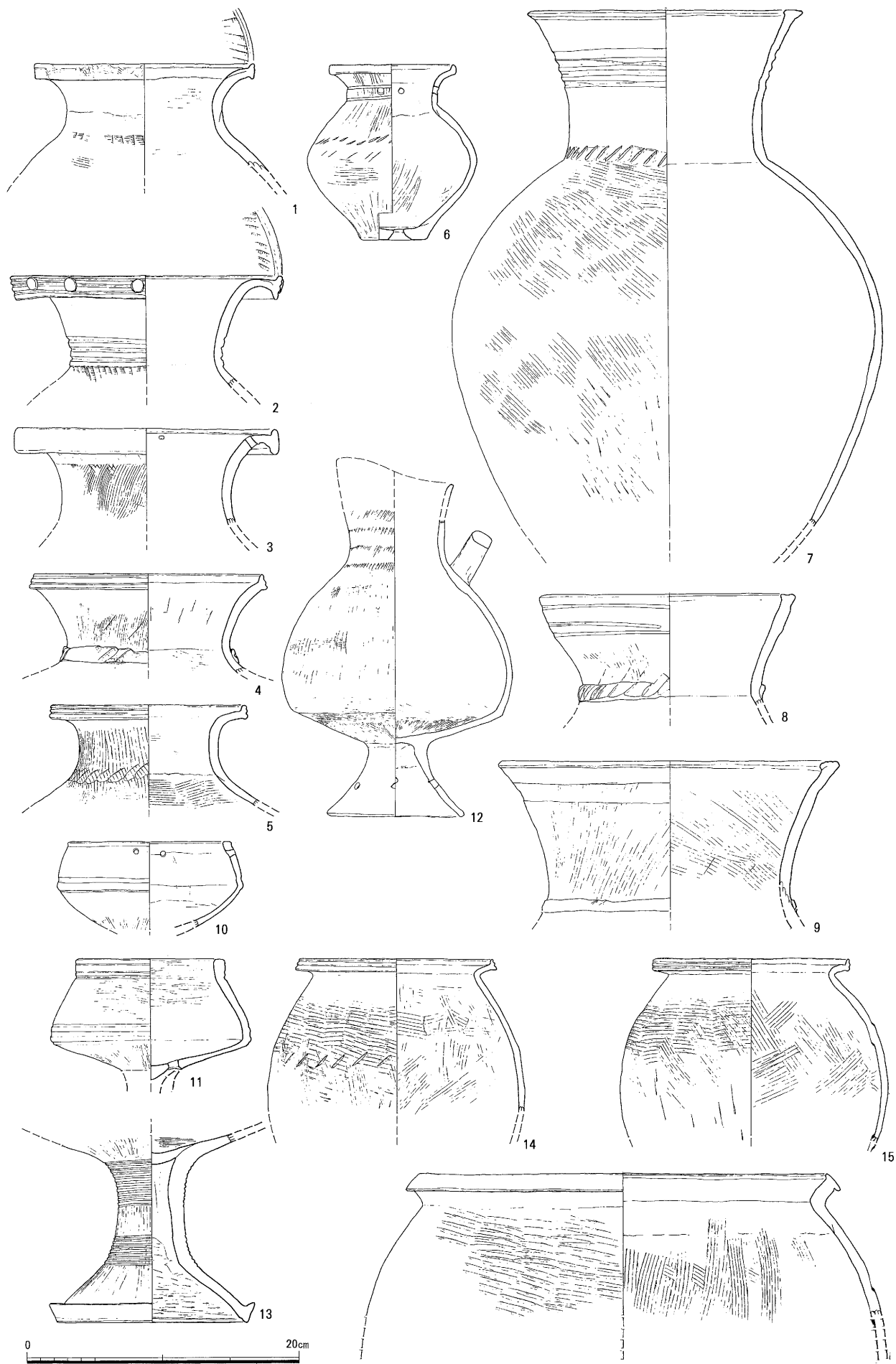
7～9は直口の短頸壺。いずれも口縁部の上端に幅広い面をもつ。7は口頸部の中ほどに4条の凹線文と、頸胴間にハケ工具による刺突文が巡る。胴部上半のタタキは、頸部付近が水平で胴中央から下は右下りの方向に施す。胴部下半は底部方向からのケズリを施す。胴部下半のケズリは、胴部上半のタタキを切る。内面には丁寧なナデを施す。8は口縁端部直下に間隔をもった2条の凹線文と、頸胴間の凸帯上にハケ原体による刺突文が巡る。9は口縁部の直下に幅広い凹線文と、頸胴間に凸帯が巡る。

10・11は無頸壺。10は胴部上半の立ち上がりがさほど長くはない。口縁部直下には2孔1対の紐孔がある。口縁部直下と胴屈曲部にはそれぞれ凹線文が1条ずつ巡る。内外面の最終調整にナデを施す。部分的にハケを残す。11は脚台をもつが、欠損する。胴部下半は浅く、全体的に下膨れの器形となる。やや肥厚した口縁部が、胴部から立ち上がる。肥厚した口縁部の側面には2条の凹線文を、胴屈曲部には3条の凹線文を施す。胴部の内外面には、ミガキを施す。なお、脚部分が欠損した後、胴部下半中央付近に円孔が穿たれる。

12は水差形土器。下膨れの胴部に、短く開いた脚部と把手、やや外開きに直口する口頸部をもつ。口頸部と胴部に簾状文が巡る。その胎土や形態的特徴から、生駒西麓からの搬入品と考えられる。風化が著しい。

高坏 13は高坏の脚部。柱状部には、坏部側で11本、脚部側で8本のヘラ描沈線文がミガキ調整を切って施される。裾部及び柱状部内面には、反時計回りのケズリを施す。

甕 14・15は形態、調整が類似する。胴部から強く屈折した口縁部をもつ。口縁部の端面には2条の凹線文が施される。胴部上半には水平～左上がりのタタキが施されるが、このタタキは胴部下半に施された底部方向からのハケによって切られる。さらに15は胴部中位よりやや上のタタキとケズリの調整境となる位置に、左上がりのハケを施す。このハケはタタキを切るが、ケズリには切られる。14は胴部の最も張ったところに、ハケ原体による刺突文が巡る。16は大型甕。口縁端部を上下に拡張する。外面には左上がりのタタキを密に施す。内面にはハケを施す。



第18图 SD-101B・102B土器実測图 (大和第IV様式) (S=1/4)

Ⅲ. 調査の成果

第Ⅴ様式（第19～21図）

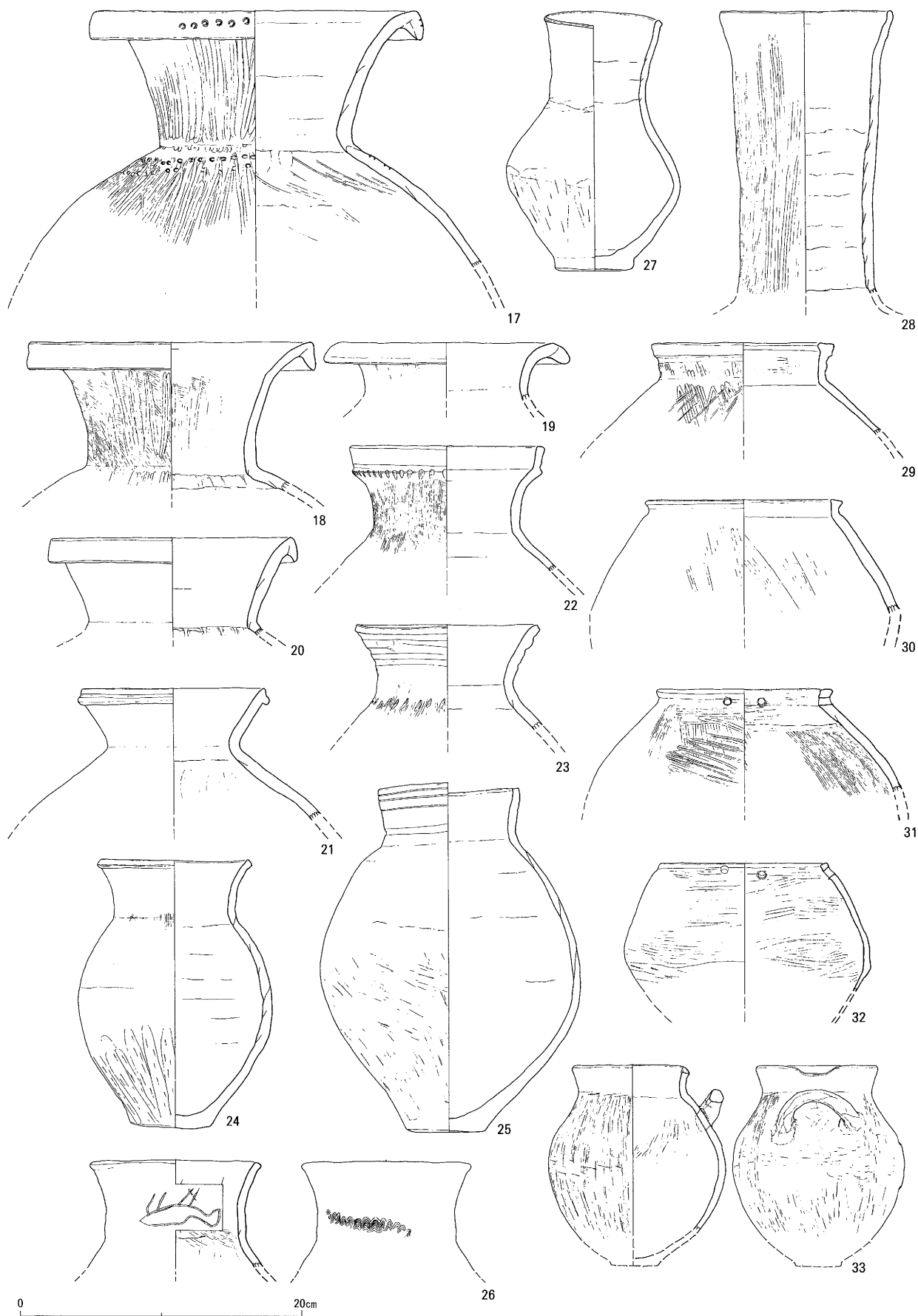
壺 17～21は広口壺。17～20の垂下する口縁部は、開いた口頸部の先端に粘土を貼りたすことによって成形する。17は竹管状工具の先端を用いて押圧されたと考えられる円形文が、垂下した口縁部の側面に1巡、胴部の上端で2巡する。円形文は一カ所が途切れており、「C」字状を呈する。ミガキによって潰れるものがある。18は頸部外面に施されるミガキが粗く、左上がりのハケを残す。頸部内面にもタテミガキが施されるが粗く、左上がりのハケを残す。19は17・18に比べ口縁垂下部の屈曲が緩やかである。内外面はナデを施す。20は口頸部のみの破片である。内外面はナデを施す。21は口縁部下端をヨコナデし、つまみ出す。

22～26は短頸壺。22は受け口状の口縁部を呈する。頸部と口縁部の屈曲部を強調するヨコナデが施され、凹線状のくぼみができる。強調された屈曲部には連続して刻みを施す。外面の最終調整はタテハケである。内面の最終調整はナデである。23は外開きの直口する口縁部をもつ。口縁端部からやや下がった位置に3条の凹線文が巡る。頸部と胴部の境には、刺突文が巡る。胴部外面にはタテハケを施す。24は口頸部の大半を欠くが、それ以下は完存。平底の底部に縦長の胴部をもち、短く外側に開いた口頸部がつく。口縁部の端は面取りを行う。風化が激しく調整の観察は困難であるが、胴部下半には底部方向から胴部へのケズリが確認できる。25は口縁端部をわずかに欠くのみである。平底の底部と楕円形の胴部をもち、短い直口の口頸部がつく。口縁部の上端に3条の凹線文が巡る。胴部下半には底部から胴部へのケズリが施される。胴部上半は風化のため、調整がよくわからないがナデであろう。頸胴部の境に、ネズミと考えられる爪跡を残す。26は絵画をもつ短頸壺。口頸部は外開きの直口である。口縁端部は丸い。内外面ともに最終調整はナデである。頸部には口縁部に脚をむけた四足獣と、櫛状工具による波状文を描いている。四足獣を描いた線のくぼみには、条線が観察できる。

27～28は長頸壺。27は口縁部を一部欠くのみである。中位に張りがあり、胴部は紡錘形を呈する。底部は、側面をつまんで施したヨコナデによってやや上げ底状になる。口頸部は外開きの直口である。口縁端部はヨコナデによって面取りを行う。胴部下半には底部から胴部へのケズリが施されるがナデ消される。28は長く直立してのびた口頸部をもつ。口頸部は端部付近で若干開く。外面の調整はタテミガキである。内面はナデであるが、粗く粘土の輪積み痕を残す。

29～32は無頸壺。29は極めて短い頸部をもち、粘土を貼りたして肥厚させた口縁部をもつ。胴部の外面と、口頸部の内面にミガキを施す。このような形態は大和にはなく、中部瀬戸内地方まで含めた西からの搬入品と考えるべきであろう。30・31はヨコナデによって口縁端部が、断面三角形で外側に張り出す。30は外面の胴部上半にタテミガキを施す。31は外面の胴部上半にヨコミガキを施す。内面にはタテハケを残す。32は口縁端部よりわずかに下がった位置に凹線を巡らせることによって、胴部上半と口縁部の区画を行う。胴部中央よりやや下がった位置に張りをもつ。ちょうどワイングラスのような形態である。口縁部に2孔1対の紐孔をもつ。内外面にはヨコミガキを施すが、その下地調整として胴部下半には反時計回りのケズリを施す。

33は水差形土器。その最終形態とも呼ぶべきもの。張りをなくした縦長の胴部をもち、口頸部のしまりはなく短い。把手をもつが細く小さく退化している。胴部外面には最終調整としてミガキを施すが粗く、下地調整のケズリを残す。



第19图 SD-101B・102B土器实测图2 (大和第V様式) (S=1/4)

Ⅲ. 調査の成果

高坏・鉢 34～39は高坏。34は坏部中央に、焼成後の穿孔がある。35は椀状を呈する坏部をもつが、その上端を欠く。脚部は細い柱状部と開いた裾部からなり、裾端部はヨコナデによって上方につまみ出される。裾部には2孔1対の細い円孔が4カ所に配置される。外面の脚柱状部および坏部にはミガキを施す。胎土はいわゆる生駒西麓産であり、搬入品と考えられる。36は裾部に2孔1対の透孔を3方向にあけるが、そのうちの1対は他よりも孔が大きい。坏部は椀状を呈する。37・38は形態、調整が類似する。大きく開いた坏部下半、それより屈曲して直立する短い坏部上半をもつ。外面の口縁端部直下には、ヨコナデによる凹線文が巡る。38は脚部が残存し、円筒形を呈する。39は大型高坏の坏部片。坏部下半と上半の屈曲部に、強いヨコナデを加えて、凸帯状に成形する。口縁端部はヨコナデによって内外に拡張する。面をもった上端部には、3条の凹線文が加えられる。坏部上半の外面には、櫛描波状文を施す。この形態は大和にはなく、中部瀬戸内地方まで含めた西からの搬入品と考えるべきであろう。

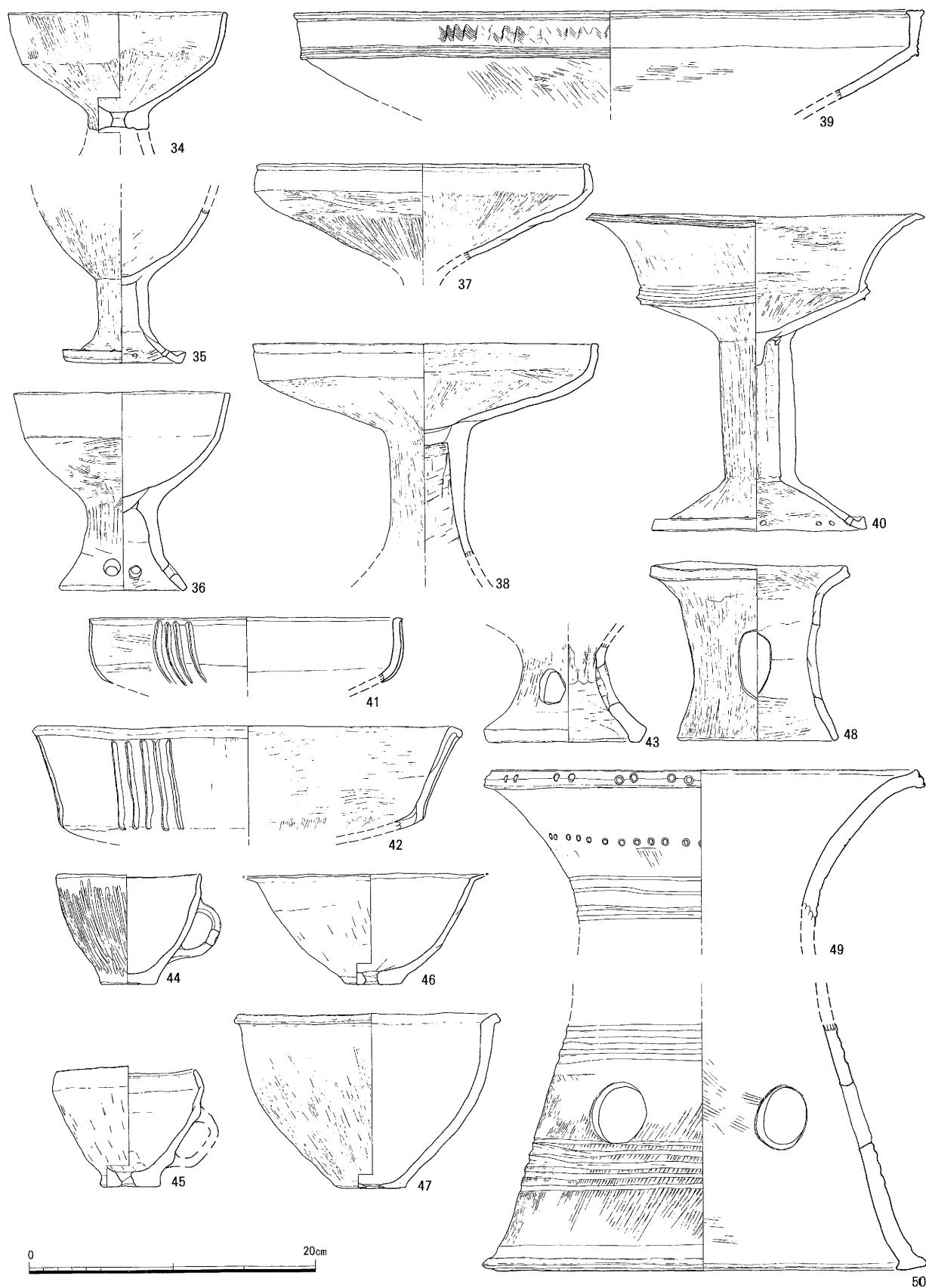
40は結合形土器。脚部は柱状部と、そこから屈曲して開く裾部からなる。裾端部はヨコナデによって、上方につまみ出す。裾部には2孔1対の孔を8カ所に施す。坏部は上半が外湾して長く伸びる。また、口縁部と坏部の結合部には、退化した凸帯が3条巡る。口縁部の上端と下端に施されたヨコナデが、凹線文状に残る。外面及び坏部内面にはミガキを施す。坏部上半の外面には、下地調整であるタテハケの痕跡を残す。

41～43は台付鉢である。41の鉢部は屈曲し、上半が短く直立する。口縁部外端はヨコナデによって、断面三角形に突出する。4条1対の棒状浮文をもつ。42の鉢部も屈曲するが、上半は長く外開きになる。口縁端部には粘土を貼り付け、外方に突出させる。5条1対の棒状浮文をもつ。風化が著しいが、鉢部上半の外面はタテミガキ、内面はヨコミガキである。43は台付鉢の脚部と考えられる。短い外開きの脚部は、3方向に楕円形の透孔をもつ。裾端部は幅広い面をもつ。内面は反時計回りのケズリ、外面はタテケズリの後、タテミガキを施す。

44・45は把手付鉢。44は口縁端部の一部を除き、ほぼ完存。小さくやや深めの鉢に、断面が長方形の把手がつく。口縁端部は、ヨコナデによって丸く収めている。内面はナデであるが、外面にはタテミガキを施す。45は把手を欠くが、鉢部は完存する。口縁部は粘土の積み上げとヨコナデによって内傾する。底部に焼成後の穿孔がある。

46・47は外反する口縁部をもつ有孔鉢。46は口縁部のほとんどを欠損する。半球形の胴部から底部が突出する。47は口縁端部に面をもつ。胴部下半に粗いタテハケが施される。

器台 48は小型の器台。完存。脚部は筒形を呈するが、口縁部は大きく開く。脚部には4方向に楕円形の透孔をもつ。口縁端部はヨコナデによって面をもつ。外面にはタテミガキを施し、内面はナデ後、口縁部のみにヨコミガキを施す。49・50は大型の器台。49は口縁部である。大きく開いた口縁部の上端と下端にはヨコナデが施され、端面には2条の凹線状のくぼみが生じる。その端面には、2個1対の竹管文を等間隔に施す。胴部には凹線文をまとめて施すが、それとは離れて1条の凹線文が口縁部と胴部を画するように施される。この線の上側に沿って、竹管文が巡る。内外面の調整はナデである。50は脚台部である。その裾部はあまり外側には開かない。裾端部はヨコナデによって内側と外側につまみ出される。円形の透孔をもち、それを境として上側に4条以上、下側に5条の凹線文を施す。外面はタテハケを残す。内面は裾部近くを丁寧にナデているが、一部に左上がりのヨコハケを残す。

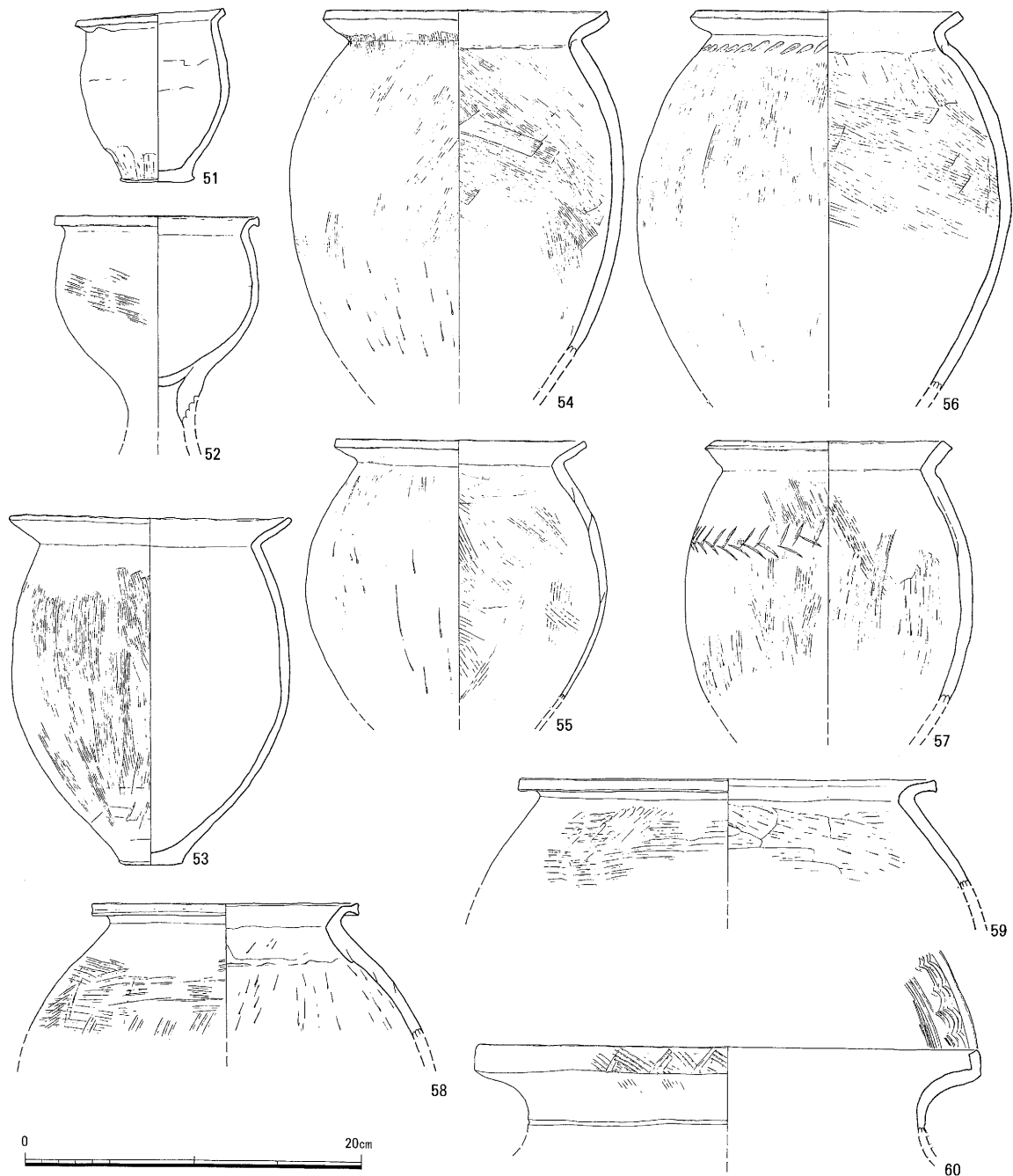


第20図 SD-101B・102B土器実測図3 (大和第V様式) (S=1/4)

Ⅲ. 調査の成果

甕 51・52は小型の甕。51はしまりのない頸部に、短い口縁部をもつ。口縁部は、強いヨコナデが施され面をもつ。さらに口縁上端部もヨコナデによってわずかにつまみ出される。内外面の調整はナデであるが、底部側面には上から下へのケズリを施す。底面にもケズリを施す。2次焼成を受けた痕跡は認められない。52は短い脚台部をもつ。しかし、2次焼成により脚台部は劣化して、欠損している。胴部上半に張りをもち、口縁部が短く外反する。口縁端部はヨコナデによって面をもつ。また、口縁部上端はヨコナデによってつまみ出されている。内外面の最終調整はナデである。外面の胴部上半にはタタキと思われる平行条線の痕跡を残す。外面上半は煤の付着が著しい。

53～58は中型の甕。53は胴部のほとんどを欠損するが底部から口縁部まで復元できる。長胴で胴部はあまり張らない。口縁部は直線的に外側に開いた「く」の字形である。口縁端部は丸い。外面の最終調整はタテハケであるが、胴部中央など部分的にタタキの痕跡を残す。底部よりやや上に、直線的な圧痕が水平に巡るが、これはハケ調整の始点と考えられる。内面はナデ調整である。外面上半に煤が付着する。内面下半には焦げの痕跡がある。54は底部を欠損する。長胴の胴部に短く厚い口縁部が屈曲する。口縁端部は面をもつ。胴部上半にはタテハケを施すが、一部にはタテミガキの痕跡を残す。また、頸部には胴部と口縁部を接合するために強いハケを施している。下半には底部から胴部へのタテケズリを施す。内面には、左上がりのハケを施す。器壁は厚い。風化のため、煤および焦げの痕跡は明らかではない。55は胴部下半を欠損する。長胴の胴部に、直線的に外側に開いた口縁部をもつ。口縁端部は、ヨコナデによる面をもつ。外面にはハケかケズリか判別のつかない調整を施す。器面がかなり乾燥した段階で施されているらしく、器面が波を打ったり、細密な条線が残る。頸部から胴部上半にむかって施される調整と、胴部下半から胴部上半にむかって施される調整の境は明瞭であり、後者が前者を切っている。内面には左上がりのハケ後、ナデを施す。外面上半には煤が付着する。56・57は刺突文を施す甕である。56は胴部上半の頸部付近に、ヘラ状工具の先端による刺突文が巡る。外面上半にはタテハケを施す。このタテハケの上端は、口頸部の屈曲から施された幅広いヨコナデによって消されてしまっている。外面下半は条線を確認しうるが、ハケかケズリか判然としない。おそらく、かなり器面が乾燥した段階に板状工具の木口でナデつけるのであろう。内面上半には左上がりのハケを施す。内面下半にも左上がりのハケが施されていたようであるが、ナデ消されている。外面には頸部付近を除いて煤が付着する。下半は2次焼成により変色する。57は胴部上半に、ハケ状工具の先端を矢羽状に押圧する。くの字に屈曲した口縁部はやや厚く、その端面にはヨコナデによるくぼみが凹線状に巡る。外面の下半には、ハケかケズリか判断のできない板状工具のナデが底部から胴部にむかって施される。内面は、上半に左上がりのハケを施した後、下半から上半にむかってケズリを施す。58・59は外面にタタキを残し、内面にケズリを施す。58は胴部下半を欠く。外面は上半にタタキを施すが、ハケかケズリか判断のできない板状工具のナデが下半から及ぶため一部消される。内面は下半から上半へのケズリが施される。外面には粘土の輪積み痕を残す他、煤が付着する。59はやや大型である。胴部上半も頸部付近までしか残存しない。口縁端部はヨコナデによって面をもつ。胴部には右上がりのタタキを施すが、頸部付近はヨコナデによって消される。また、破片の下端には、タタキを消すハケかケズリか判断のできない板状工具のナデが認められる。内面には頸部の屈曲部分まで、反時計回りのケズリが施される。外面には煤が付着する。



第21図 SD-101B・102B土器実測図4（大和第V様式）（S=1/4）

60は受け口の口縁部をもつ。口縁部の上端面は、内側に傾斜する。屈曲して立ち上がった口縁部の外面には、櫛工具による山形文を施す。開いた頸部の内側には、櫛描波状文と櫛描直線文を施している。口縁部よりに櫛描波状文、その下において一部を切られた櫛描直線文がある。外面頸胴部の境には櫛描直線文を施すようであるが、胴部欠損のためその上端しかわからない。多量の砂粒を混ぜた胎土で色調は乳白色を呈し、その形態や調整、胎土などの特徴より近江地方からの搬入品と考えられる。

Ⅲ. 調査の成果

絵画土器（第22図、図版25・26）

本調査では、絵画土器、あるいはそれに類するものが17点あまり出土している。ただし、明らかにその描かれた対象がわかるのは、第22図に掲げたものである。また、前述したSD-101B出土土器の短頸壺にも四足獣が1点描かれている（第19図-26）。これらは、いずれも破片となって出土しているため、その全容は分かりにくい。また、土器表面の残存状況も良いとは言えない。絵画土器の所属時期は、おもに大和第Ⅳ様式に多いものであるから、本調査においても必然的にSD-101B・SD-102B およびその上部の攪乱を受けた黒褐色土の遺物包含層から出土しているものが多い。ただし、一部は、明らかに大和第Ⅴ様式に属するものがある。

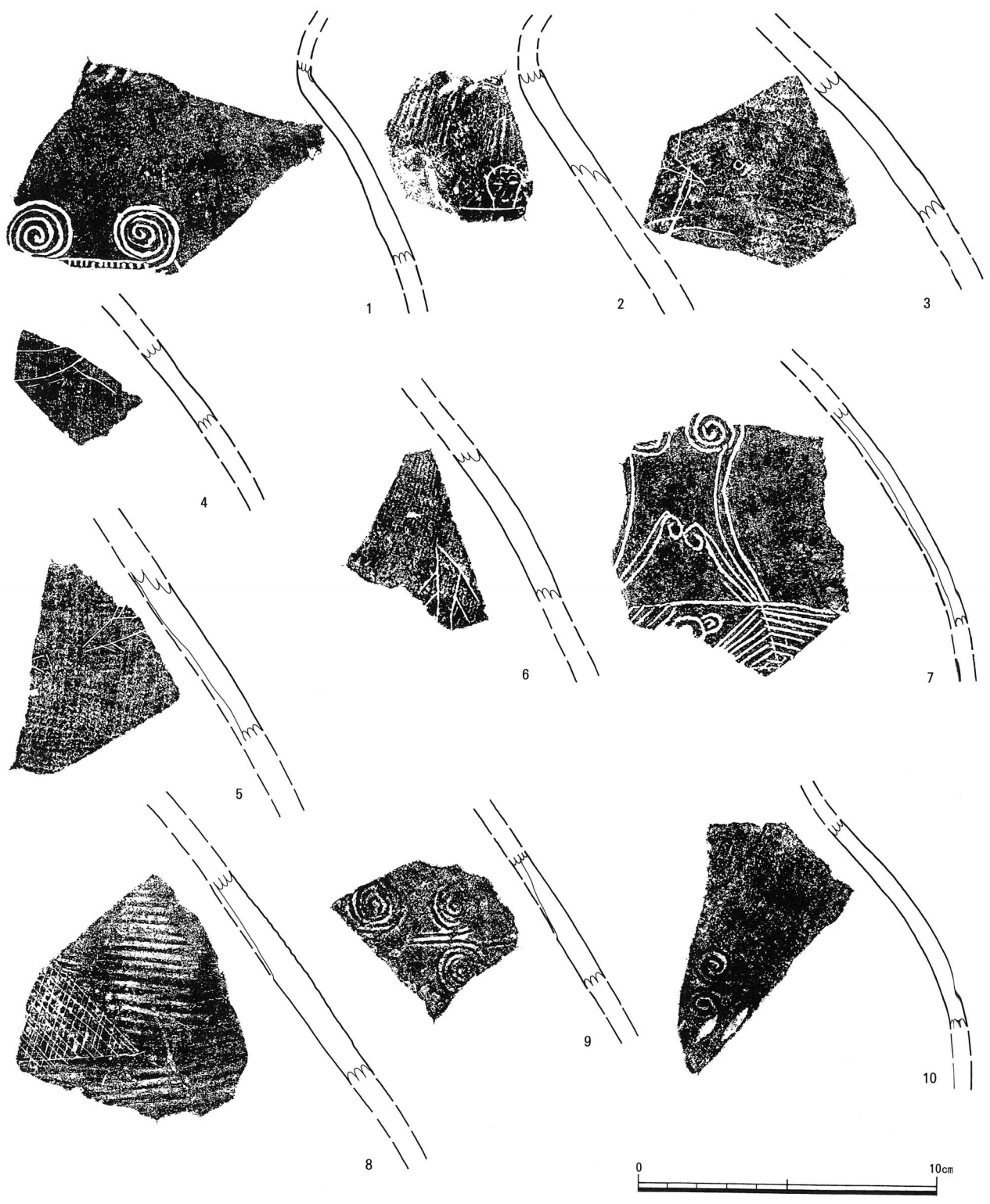
建物 第22図-1は、短頸壺の上胴部に描かれた建物の絵画である。大棟と渦巻き状の立派な棟飾りが表現されている。大棟上には、棟飾りからのびる2条の横線があり、その横線の間を短い縦線で充填している。また、右側棟飾りの右下には、右下に引かれた斜線があることから、寄棟づくりの建物と推定される。この建物は、棟の間が狭いことや渦巻き状の飾りが立派であることから、楼閣状の建物を想定しても良いだろう。SD-102B 第5層から出土した。壺の大きさや厚さ、器面調整や焼成の具合から大和第Ⅴ様式と考えられる。

人物 2は、壺の上胴部に描かれた正面を向いた人物の絵画である。直線で表された肩の上に、電球状の頭部がつく。顔の表現は、ヘラで軽く描かれた眉、ヘラの刺突による目、2つの円形刺突で表された鼻あるいは口がある。SD-105の第2層から出土した。破片の上端には、ヘラ描き列点がみられる。ハケ調整や列点から大和第Ⅳ様式と思われる。

鹿 3と4は、右向きに表現された鹿の絵画である。3は、頭から前脚にかけて残っている。頭部を描いた後、主幹と外側にのびた角枝の角が表現されている。鹿の胴部には、左下がりの斜線があることから、斜格子で充填していた可能性がある。外面にタタキを残す。SD-101B 第3層出土である。4は前脚と胴部のみ残っており、後脚は線刻部分で欠損している。鹿腹部の下側には微かな線刻が見え、下書き線あるいは書き損じ線と考えられる。線刻は細く弱々しい筆致である。SD-102B 第5層出土である。3・4はいずれも壺の破片で大和第Ⅳ様式と考えられる。

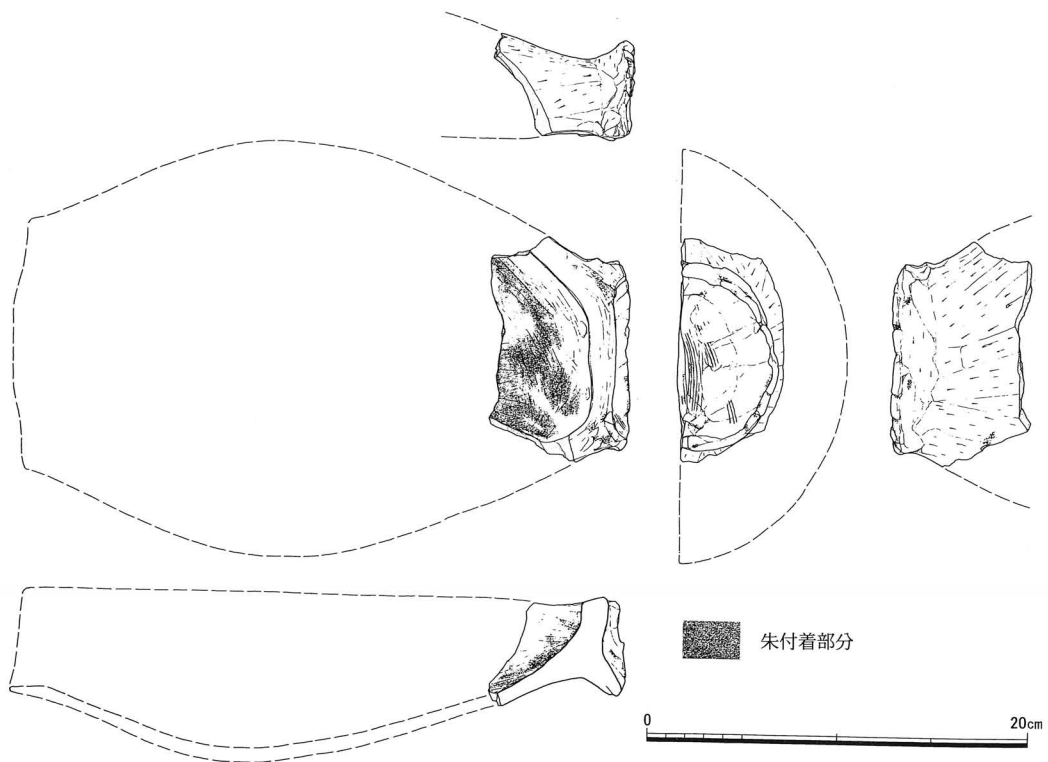
魚 5と6は、壺に描かれた魚の絵画土器である。2点の魚は同じ形態の魚で、背鰭・胸鰭・尾鰭を簡潔に表現している。ただし、5は、背鰭と胸鰭の表現を2本線を使っている。また、欠損しているが破片の左端にもう1匹の尾鰭があることから、2匹以上の魚が描かれていたと考えられる。6の魚は土器のハケ調整の方向から、上向きに描かれたと考えられる。5はSD-102B 第5-b層、6はSD-101第1層出土である。大和第Ⅳ様式の土器と考えられる。

意匠不明 7は欠損しているため、全容はわからない。意匠不明の絵画あるいは文様と考えられる。下部は複合の鋸歯状表現をとり、中央に渦巻きと思われる大小の表現が刺突によって表されている。上部は、大小の蕨手状の表現が左右対称に内側に向かい合うように描かれている。この上部の渦巻きも刺突によって表されている。このような表現方法は、建物の渦巻き状の棟飾りにも見られ、写実的な表現とみることができよう。SK-106第3層から出土した。大和第Ⅴ様式である。8は、大形の壺の上胴部に描かれた文様あるいは絵画である。意匠の左側が欠けているため、全容は分からないが、山形になるであろう。その内部は斜格子で充填している。土器の外面には左上がりのタタキが施される。SD-102B 第4層出土である。大和第Ⅳ様式の土器と考えられる。



第22図 絵画土器および特殊文様拓影 (S=1/2)

III. 調査の成果



第23図 広片口鉢実測図 (S=1/4)

文様 (第22図、図版26)

弥生土器に施される文様は、一般的に前期・中期の土器ならば多くみられるものである。また、搬入土器などでは、縄文や条痕を施したものも出土しているが、ここでは類例の少ない特殊な文様に限って報告する。

双頭渦文 第22図-9・10は、いずれも胴部上半にタタキ板によって、双頭渦文を押捺している。タタキ原体は異なる。10の文様の下には、ヘラ描き列点と煤の付着が見られる。9はSD-101B 第5層、10はSD-102B 第5層出土。いずれも大和第IVあるいはV様式と考えられる。

特殊土器 (第23図、図版26)

本調査において、特殊な土器は1点のみである。広片口鉢と呼ばれているもので、唐古・鍵遺跡では初出の遺物である。

広片口鉢 第23図は、SD-104第2層出土の広片口鉢である。平面が楕円形で一方に広い片口がつく浅鉢と推定されるが、尾部のみを残す。本来は甕を製作し、半裁したものと考えられ、尾部を底にしてたてると安定感もよい。尾部は粘土を貼り付け突出させるため、指頭圧痕や接合痕が明瞭に残る。体部外面は粗いケズリがみられ、体部の底ちかくは薄く仕上げている。内面や口縁部は、丁寧なミガキをおこなう。朱の付着は、剥落が激しいが、内面から尾部にかけてほぼ全面に、底部にあたる体部外面はわずかにみられる。体部の外面には、黒色の付着物が見られるが、これが煤がどうかは判断しがたい。大和第V様式である。

(2) 木製品

木製品の大半は、弥生時代中期前半の溝や土坑などから出土した。出土量のかたよりは、遺構内における木製品の保存状態にかかわる問題であって、弥生時代の時期別における木製品の使用頻度の差を示しているものではない。今回は、良好な状態で出土した弥生時代中期前半の木製品について報告を行う。時期決定は伴出土器による。

また、後述するようにSD-151BSからは、脆弱かつ複雑な組み合わせの木製品が出土した。本製品については、検出後、奈良県立橿原考古学研究所 今津節生所員の指導のもと、ウレタンで補強し切り取り、室内作業によってその全容を確認し、保存処理をおこなうことができた。

農具（第24図）

鍬 1は身の部分である。舟形隆起を除き、その周辺部の欠損が著しく、形態は不明である。舟形隆起は上端丸く、下端に長く伸びている。舟形隆起のある部分を正面として、舟形隆起と接する右側には孔が開けられている。欠損のため断言はできないが、舟形隆起と接した左側にはこの孔は認められず、2次的な補修孔のようなものと考えられる。刃部および頭部が焼け焦げている。SD-151CS 第7層出土。大和第Ⅲ-1様式。2はいわゆる狭鍬である。頭部および刃部先端を欠損する。舟形隆起をもち、隆起は上部先端がやや尖り、下端に長く伸びる。刃部は狭い。先端は丸く摩耗している。側面形は、刃部が舟形隆起側に内反りしている。SD-151CS 第7層出土。大和第Ⅲ-1様式。3もいわゆる狭鍬である。身が柄孔部分で厚みを増し隆起状を呈するが、舟形にはならない。隆起部を正面として、頭部右側は欠損している。残存する左側から、直線的な頭部であったと推定できる。頭部幅は約10cmであるが、刃部先端は3.5cmと幅狭く、柄孔付近から刃部にむかって徐々にすぼまっている。SK-152 第2層出土。大和第Ⅲ-1様式。

鋤 4は身の部分と考えられる。柄あるいは軸の部分が欠損しているため、一木であるか組合せかは不明である。肩が丸く隅丸長方形の身である。柄の根元から、肩部にかけて縁が一段高く、両側縁部の立ち上がりにつながる。また、刃部側からも内側に削り込んでおり、身の周囲が一段高く、中央が窪んだ形態となる。ここでは鋤として分類したが、形態的には「アカ取り」の可能性もある。SK-153 第2層出土。大和第Ⅱ-2様式。5は組合せ鋤の身の部分と想定している。それを前提とした部分名称で、本製品の説明を行う。肩は丸肩で、縁は肩部に近づくにつれて立ち上がりをもつ。身の上方には着柄軸をのぼし、軸の先端は紐かけ用の突起を作り出している。身の中央よりやや上には、柄を固定するための方形の孔をもつ。破損を免れた左側には、方形の孔よりもやや高い位置に三角形の孔をもつ。SD-151CS 第9層出土。大和第Ⅱ-2様式。

容器・食膳具（第25図、図版29）

匙 6は匙。柄と身の片側を欠損する。身は厚く、中央を彫り窪めることによって周囲を高め、匙面を作り出している。身の周囲よりも一段低い部分に柄がとりつき、その角度は鈍角である。柄の断面形は、長方形を呈する。SD-151BN 第8層出土。大和第Ⅱ-3様式。

木製容器 7は木製容器と考えられる。短辺約8.5cm、残存長辺11cm。丸木の表皮を剥いで外面を平滑に加工したものを半裁し、内側を削り貫いて容器とするようである。しかし、本体の半分以上が欠損したうえ、端部もほとんど残っていない。わずかに短辺上端の一部を残すのみである。短辺上端の内側を低めることによって、外側を一段高く作り出している。短辺の厚さは

Ⅲ. 調査の成果

約2 cmであるが、一段作り出された部分の厚さは約9 mmであり、長辺の器壁の厚さ約7 mmにほぼ対応する。とすれば、蓋はスライド式で、長辺内側に溝が切っており、一段高くなった短辺で蓋を受けていた可能性もある。SD-151CS 第8層出土。大和第Ⅱ-3様式。

高杯 8は一木式高杯の脚部である。小型の精製品であるが、杯部を欠く。脚部の底面は、中央を浅く丸く彫り窪めている。裾端部は内側に向かって斜めに削り取られており、面をもつ。仕上げは丁寧である。SK-152第3層出土。大和第Ⅱ-3様式。9は一木式高杯である。ボール状の直口の杯部に、短くハの字形に開いた脚部がつく。杯部は丁寧に仕上げられているが、杯部と脚部の基部であるとか、脚部内面には加工痕を残している。SD-151CS 第7層出土。大和第Ⅲ-1様式。10は組合せ式高杯の脚部である。脚部の部分であり、これとは別に脚柱部、杯部があり、3部材が組み合って製品となる。脚部の上面から下面にまで突き抜ける四角いほぞ穴が穿たれている。底面は平らである。裾端部は内側に向かって斜めに削り取られており、面をもつ。SD-151B 第7層出土。大和第Ⅲ-1様式。

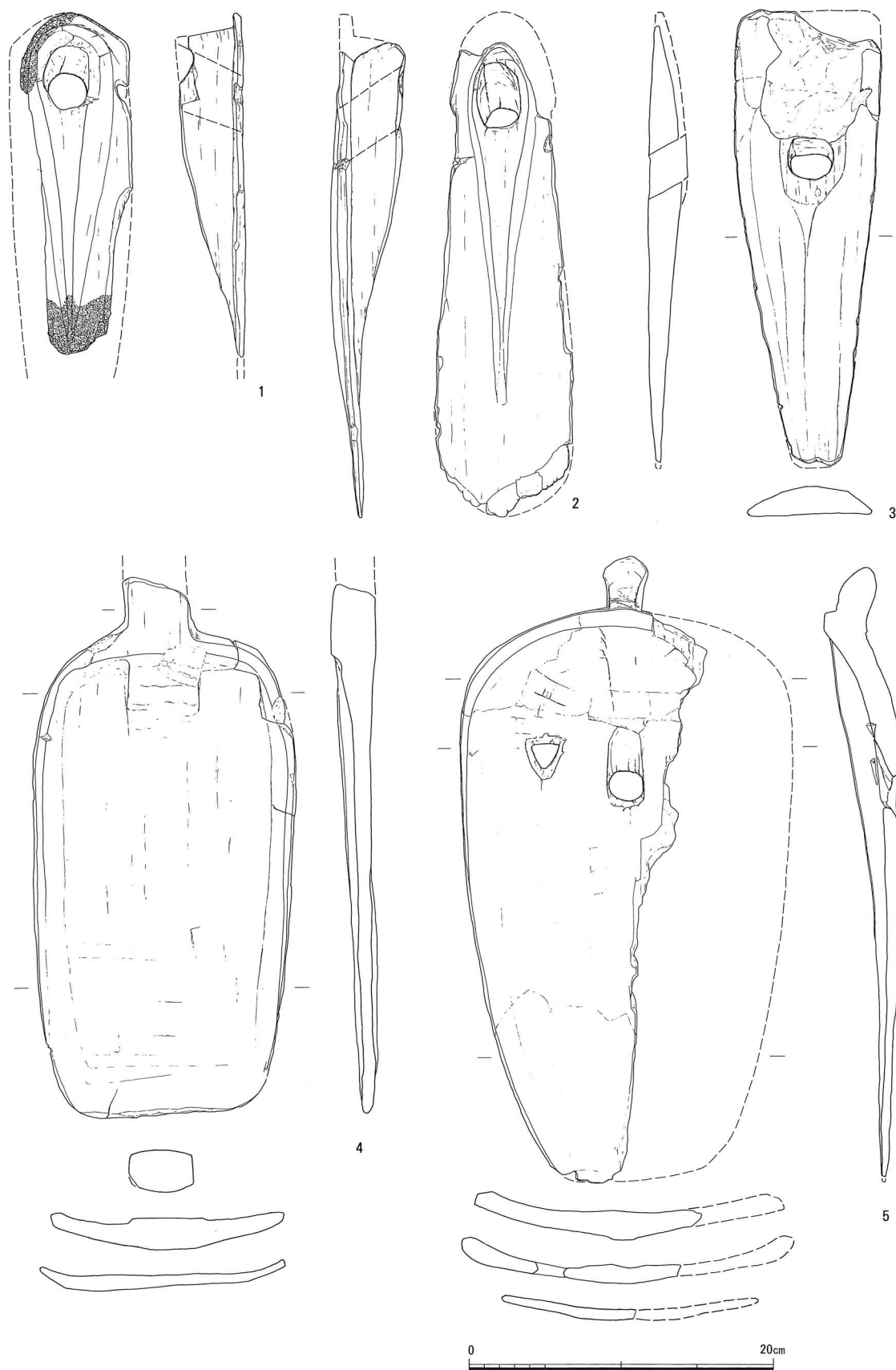
四脚合子 11・12は四脚合子の蓋と身である。蓋の平面形は楕円形で、断面形は山形をなし内側を削り貫くことによって均一な厚さに仕上げている。また、内側の縁は面取りを行っている。長軸の両端に紐孔突起をもつ。紐孔突起には、中央のやや大きい孔を中心として、その両脇の下がった位置に孔をもち、合計三つの孔があげられる。置き蓋の形式である。身の平面形は楕円形で、短く不定形な方柱状の四脚をもつ。口縁端部には、両端に紐孔突起があり、それぞれ一孔があげられている。内面には白色物質が付着する。SK-153第2層出土。大和第Ⅱ-2様式。

雑具・武器・用途不明木製品 (第26図、図版28・30)

柄状木製品 13は柄状木製品である。柄と考えられる部分は、細長い円筒形で裾が開く。柄の両端に突起をもつ。上端の突起は、細長い角柱状で、先端が鋭く尖る。突起の中程には目釘孔をもち、木釘が残存している。下端の突起は、扁平な方形で短く、孔をもつ。SD-152第2層出土。

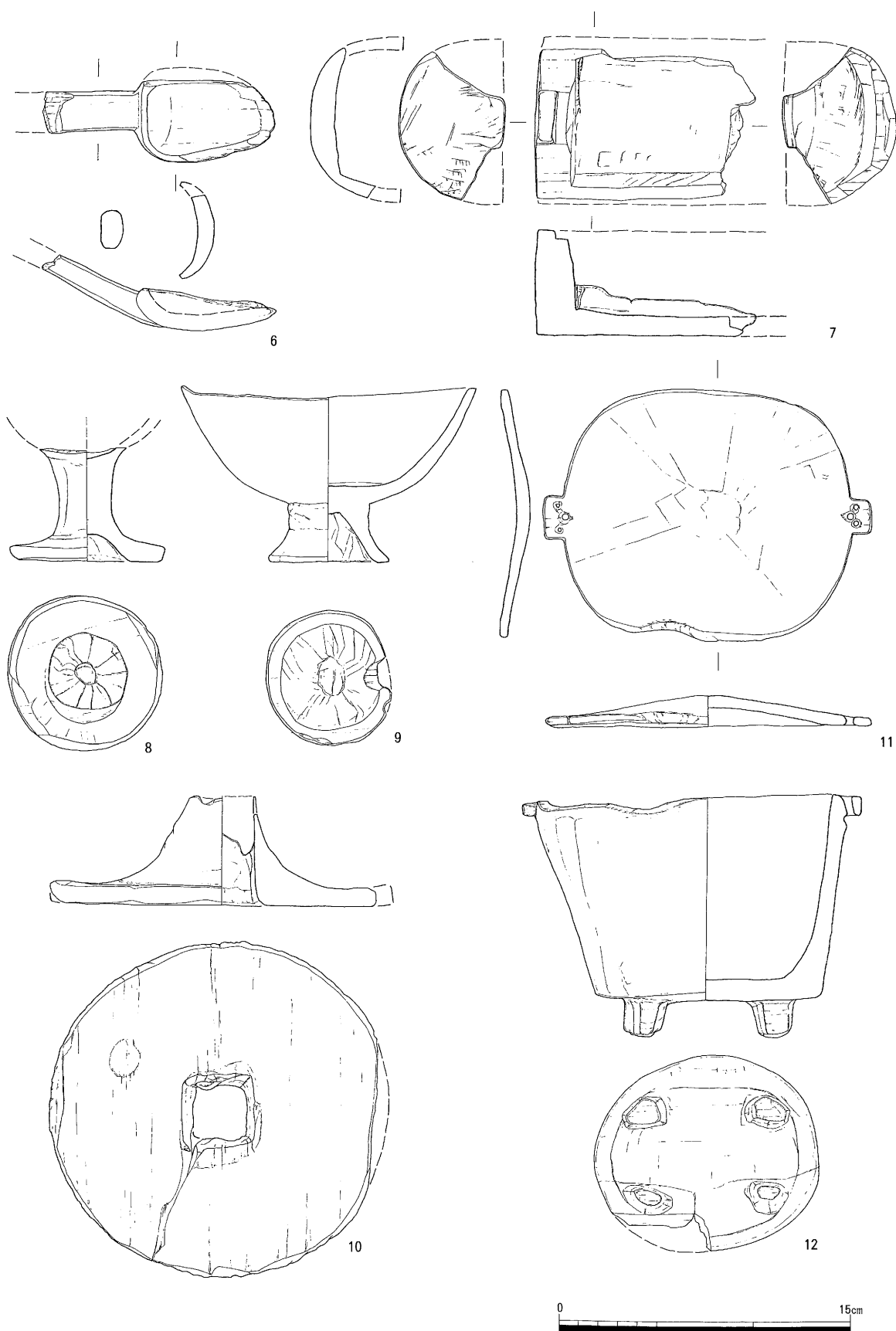
組合せ木製品 14は組合せ木製品の部材と考えられる。現存の値で長辺16.4cm、短辺6.7cm、厚さ9 mmを測る。長辺の一方は破損する。両短辺に平行して約1 cmほど内側の部分が、板の裏表ともに幅5 mmほどの帯状に変色している。この変色部分に2孔ずつ、計4孔を確認するが、破損していることを考えれば、孔数は増えるであろう。また残存する長辺にも平行するように、中央に1孔が開けられていて、両短辺の上段の孔と並んでいる。この5孔のうち、残存した長辺に接する1孔が方形であるが、他は円孔である。残存した長辺部分には、両短辺に沿った孔と対応する位置に浅いくり込みが入っている。SD-151BS 第9層出土。大和第Ⅱ-2様式。

楯 15は楯である。上端部と下端部は残存しており、全長114.9cmを測る。一側縁部が残存するも、木目に沿って縦に裂け、1/2以上が欠損していると考えられる。表裏不明。上端部はその隅を欠損するが、下端部は隅を丸く加工している。上端部はその端から約5 cm、下端部はその端から約4 cmのところから一方の面を削り、薄くしている。この薄くなった部分に、下端部では縦の切れ込みを多数入れて桜皮を通し、その両面と下端にわたした横棧をコイル巻に綴じる。上端では端から約3 cm下がったところに横棧を両面にわたし、横棧の上下の孔から通した桜皮によって三角綴じる。下端の横棧が接地面の補強であるのに対し、上端の横棧は羽などの飾りを差し込む為の装置であろうか。なお、下端部の切れ込み先端部付近に沿ってほぼ6 cmの等間隔で孔が穿たれるが、その性格は不明である。SD-151BN 第8層出土。大和第Ⅱ-3様式。

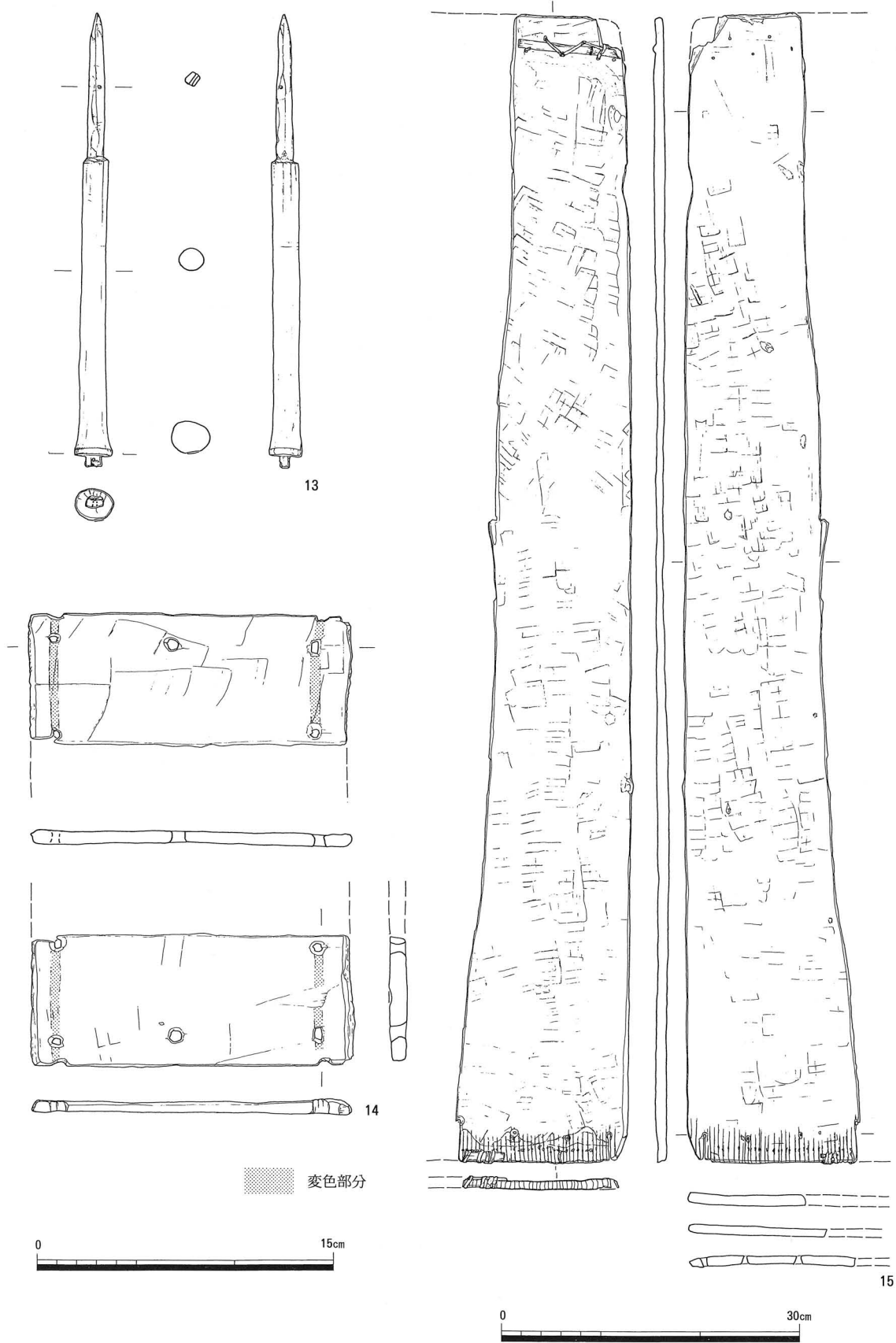


第24図 木製品実測図1 (S=1/4)

Ⅲ. 調査の成果



第25図 木製品実測図2 (S=1/3)



第26図 木製品実測図3 (13・14 : S=1/3, 15 : S=1/6)

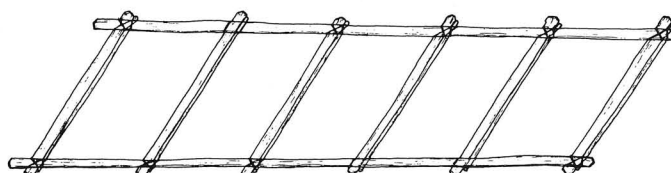
Ⅲ. 調査の成果

用途不明木製品 第28図はSD-151BNの第8層で検出した用途不明木製品である。同じ形状のものが2枚重なって出土した。本製品は用途不明のため、ここでは仮に笹葉のあるほうを表とし、横長においた状態で報告する。大きさはおよそ横軸長93.5cm、縦軸長38.5cmである。

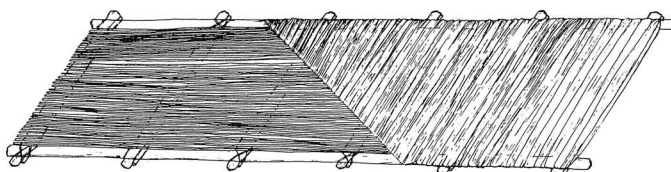
本製品は、木製の枠組みとそれを覆う植物質からなる。この上部の植物質は、タケ科植物の外皮を縦に裂いたひご状のものと、単子葉植物の葉である。その構造は、半截棒を横2本、縦6本を組んだ長方形の枠組みがベースとなる。この縦の半截棒の両端は抉りを入れ、有頭棒とし、紐を結ぶときのかかりとする。また、この縦棒6本に添う形で細棒がある。この細棒は上面の植物質を固定する役目を果たしている。枠組みの上面には、タケひご状のものが横方向に簾状に置かれ、その下面の細棒に巻き付けられていた。さらに、タケひごの上部には直交して笹葉が密に敷かれ、数本の竹ひご状のもので固定されている。時期は大和第Ⅱ-3様式。

本製品の用途は不明であるが、行李のような家具、窓枠あるいは屋根などの建築材の可能性が想定される。なお、本製品の製作工程としては、その構造観察から2案がある。1つは、木製の枠を組み上げてから、それにタケひご状のものをのせ、枠組みの細棒に巻き付ける案。1つは、タケひご状のものと細棒を巻き付け、先に簾状のものを作りそれにあわせて枠を組み込む案である。

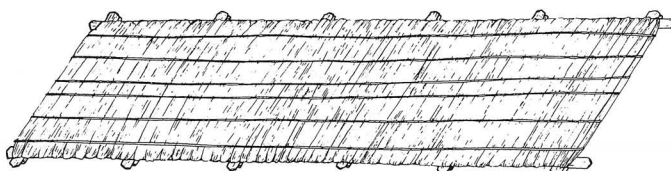
- 1 基本形となる木製の枠組み。



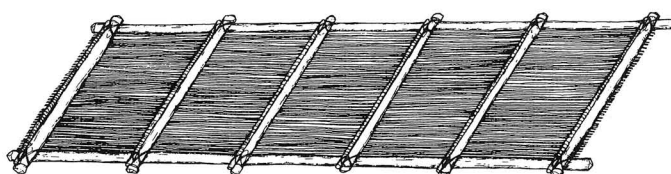
- 2 枠組みの上部にはタケひご。さらに、その上に植物の葉。



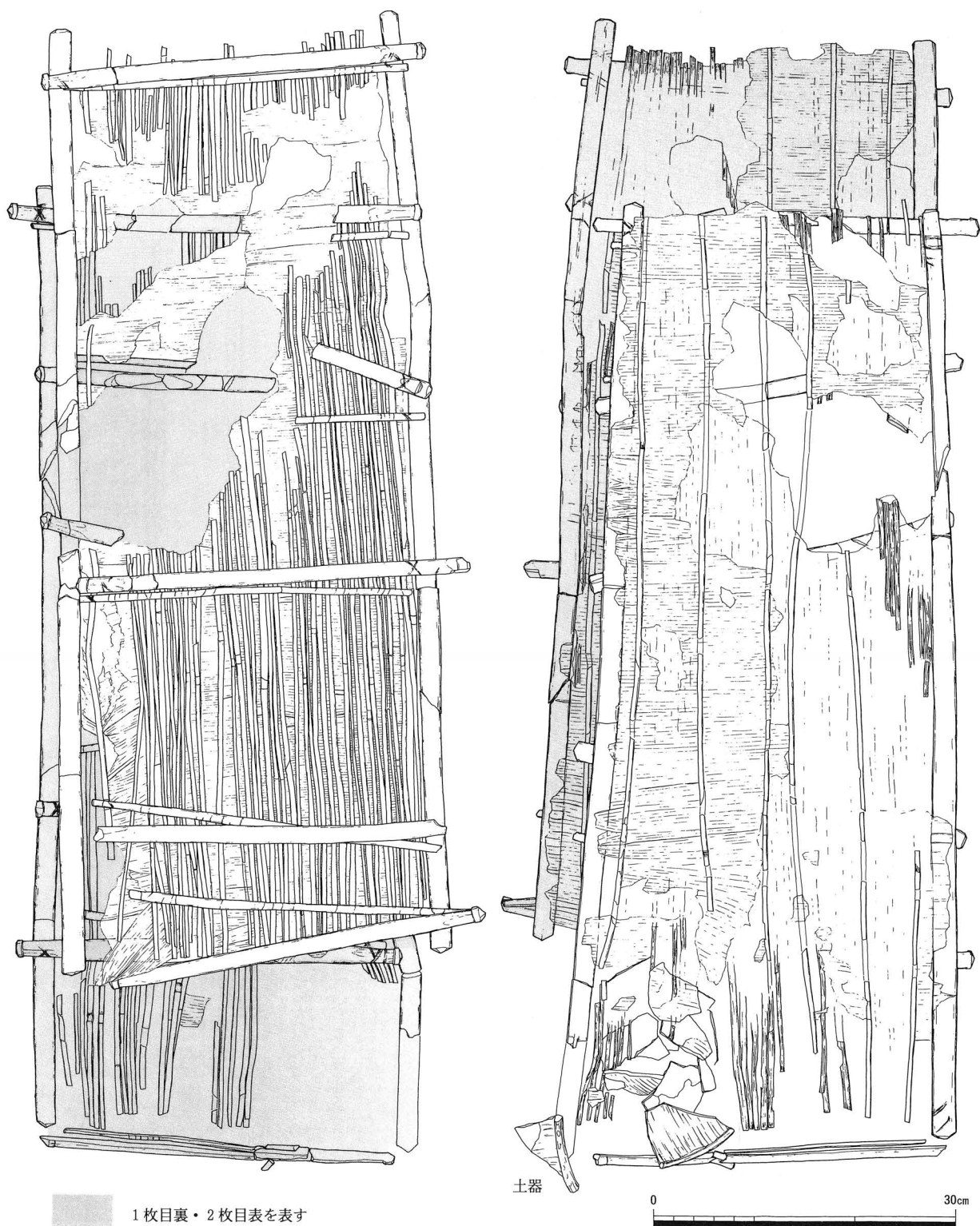
- 3 植物の葉を押さえるタケひご。竹ひごと植物の葉は巻き付けられている。



- 4 製品裏側。タケひごは細棒に巻き付けられている。

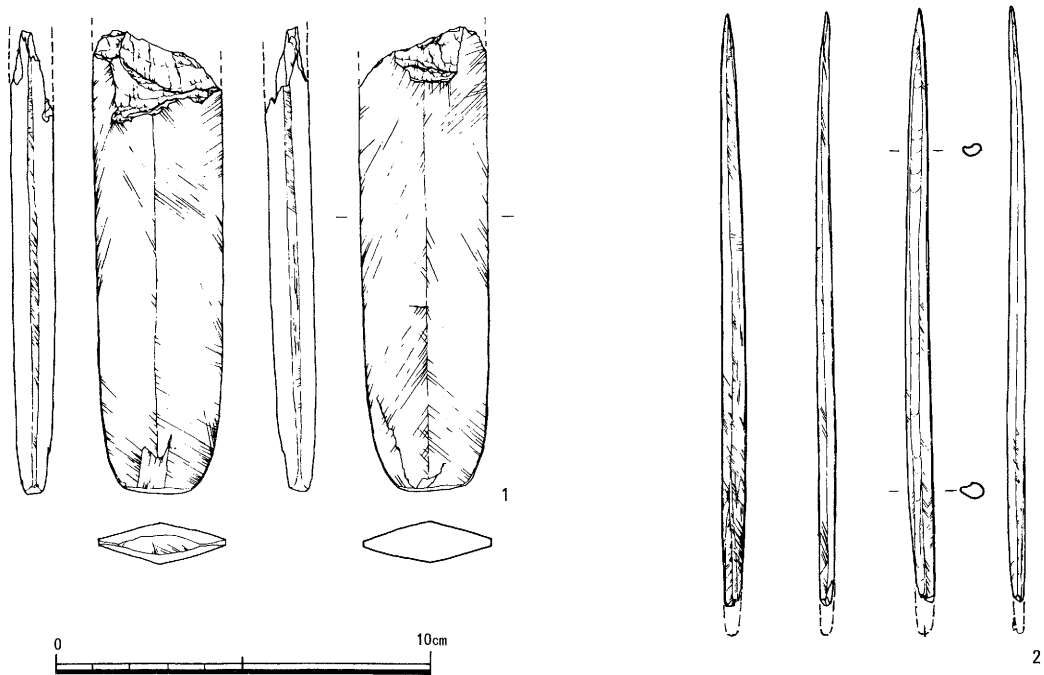


第27図 用途不明木製品の構造模式図



第28図 用途不明木製品実測図 (S=1/6)

III. 調査の成果



第29図 石器・骨製品実測図 (S=1/2)

(3) 石器・骨製品

石器 (第29図、図版27)

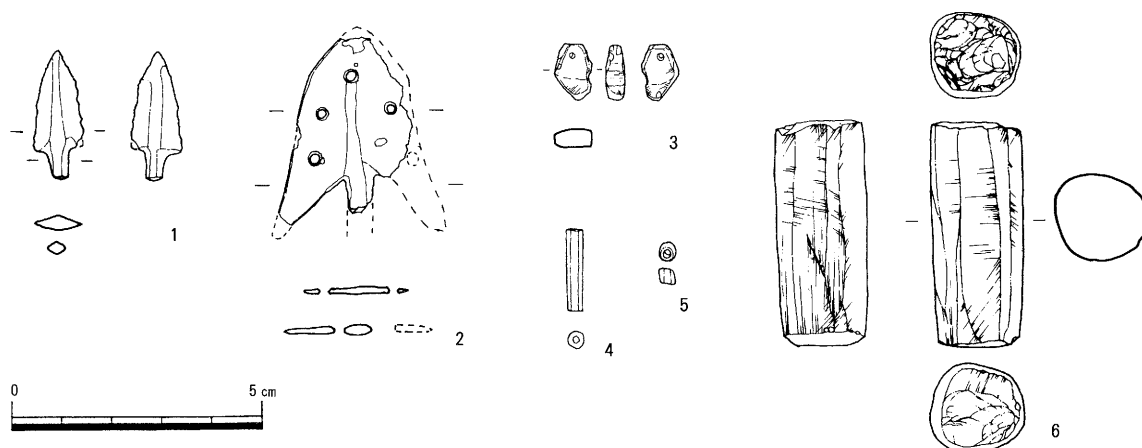
弥生集落で出土する様々な石器や石製品は、本調査においても出土している。打製は、サヌカイト製が主で、石鏃が最も多く出土している。磨製石器では石包丁や石斧類、石剣などがある。竪穴住居跡の炉跡と考えられるSK-117からは、流紋岩と結晶片岩の石包丁が完形で出土している。砥石は、他の調査区より多く出土している。SD-101B やSD-102B からは仕上げ砥石が出土しており、鑄造に関連する遺物になる可能性もある。

磨製石剣 第29図-1は、黒色粘板岩の鉄剣形磨製石剣である。先端は、折損している。ほぼ並行する側辺とわずかにすぼまる基部を有している。側辺は幅2mmほどの面をもち、把部をつくる。脊は、石剣の中央に真っすぐとおっており、断面は扁平な菱形を呈す。現長12.28cm、幅3.43cm、厚さ1.12cmを測る。SD-102B 第5層から出土した。大和第V様式である。

骨製品 (第29図、図版28)

本調査においては、獣骨をはじめ骨製品はほとんど出土していない。これは、木製品の項でも述べたように遺物の保存環境によるところが大きい。また、出土している遺構としては、弥生前期から中期前半の下層遺構に伴うものが多い。骨製品としては、刺突具がある。

刺突具 第29図-2は、鹿の中足骨と思われる骨を半裁し、縁辺を磨き上げた刺突具である。半裁しているため、骨内側の面にはわずかに骨本来の面が残る。先端と基部は欠損している。先端部分は、骨の内側方向にわずかに湾曲している。基部ちかくは全体に細くなりすぼまる。断面は、「凹」字状になる。SD-151BS 第10層出土である。時期は、大和第II-3様式である。



第30図 青銅器・玉類実測図 (S=2/3)

(4) 金属器・玉類

金属器 (第30図、図版40)

金属器としては、銅鏃2点が出土しているのみである。

銅鏃 第30図-1は調査区の南端、2は南西部西壁の各黒褐色土層から出土した銅鏃である。詳細な時期はおさえられないが、弥生後期頃と推定される。いずれも有茎の逆刺のある鏃である。1の表面は、錆化しているがほぼ完存している。全長2.55cm、現幅0.99cm、厚さ0.28cmを測る小型品である。断面はレンズ状を呈している。2は、先端から側辺、茎部を欠損しているが、全容のわかる大型鏃である。現長3.75cm、現幅2.88cm、厚さ0.22cmを測る。逆刺が大きく、刃部も鋭い。断面は偏平である。注目されるのは、鏃身に左右各2つ、中央1つの計5つの穿孔をもつことである。孔の周囲はわずかに盛り上がっており、鑄造後、錐で穿孔したと考えられる。

玉類 (第30図、図版40)

玉類としては、ヒスイ製勾玉1点、碧玉製管玉および未成品3点・ガラス小玉4点の計8点が出土している。碧玉製管玉未成品を除き、すべて後期の遺物である。

勾玉 第30図-3はヒスイ製勾玉である。全長1.1cm、厚さ0.37cmを測る小型の扁平な勾玉である。不整形な菱形の一边を抉り、勾玉状にしている。孔は片面穿孔である。色調は濃緑色を呈す。石質は、透明質であるが、小さな黒色の不純物が混ざる。

管玉 4は碧玉製の管玉、5は同未成品である。4は、全長1.62cm、外径3cmを測る小型品である。外面は、磨ききれず縦筋がはいっている。色調は、淡緑色を呈す。石質は良い。6は、全長4.5cm、外径1.9cmを測る大型の管玉未成品である。両端は、折損後に磨いている。外面の大部分は磨いているが、一部には剥離面を残している。断面形も不整円形である。色調は濃緑色を呈し、石質も良い。SK-151第1層出土である。時期は、大和第Ⅲ-1様式である。

小玉 5は、SK-110から出土したガラス小玉である。外径0.3cmを測る歪な小玉である。色調は、淡青色を呈す。風化はしておらず、残存状況は良い。

Ⅲ. 調査の成果

(5) 青銅器鑄造関連遺物

青銅器の鑄造に関する遺物は、以前の第3・14・33・40・47次調査で既に出土している。特に第3次調査では、石製の銅鐸鑄型1点のほか、「土製の鑄型外枠」と考えられる土製品が多数出土している。今回の調査においても、同様な土製品を含む多数の鑄造関連遺物が、SD-101BとSD-102Bおよびその上部の遺物包含層を中心に多く出土した。これらの遺物は、数次にまたがって出土した破片が接合するものあるいは同一個体とみなされるものがある。

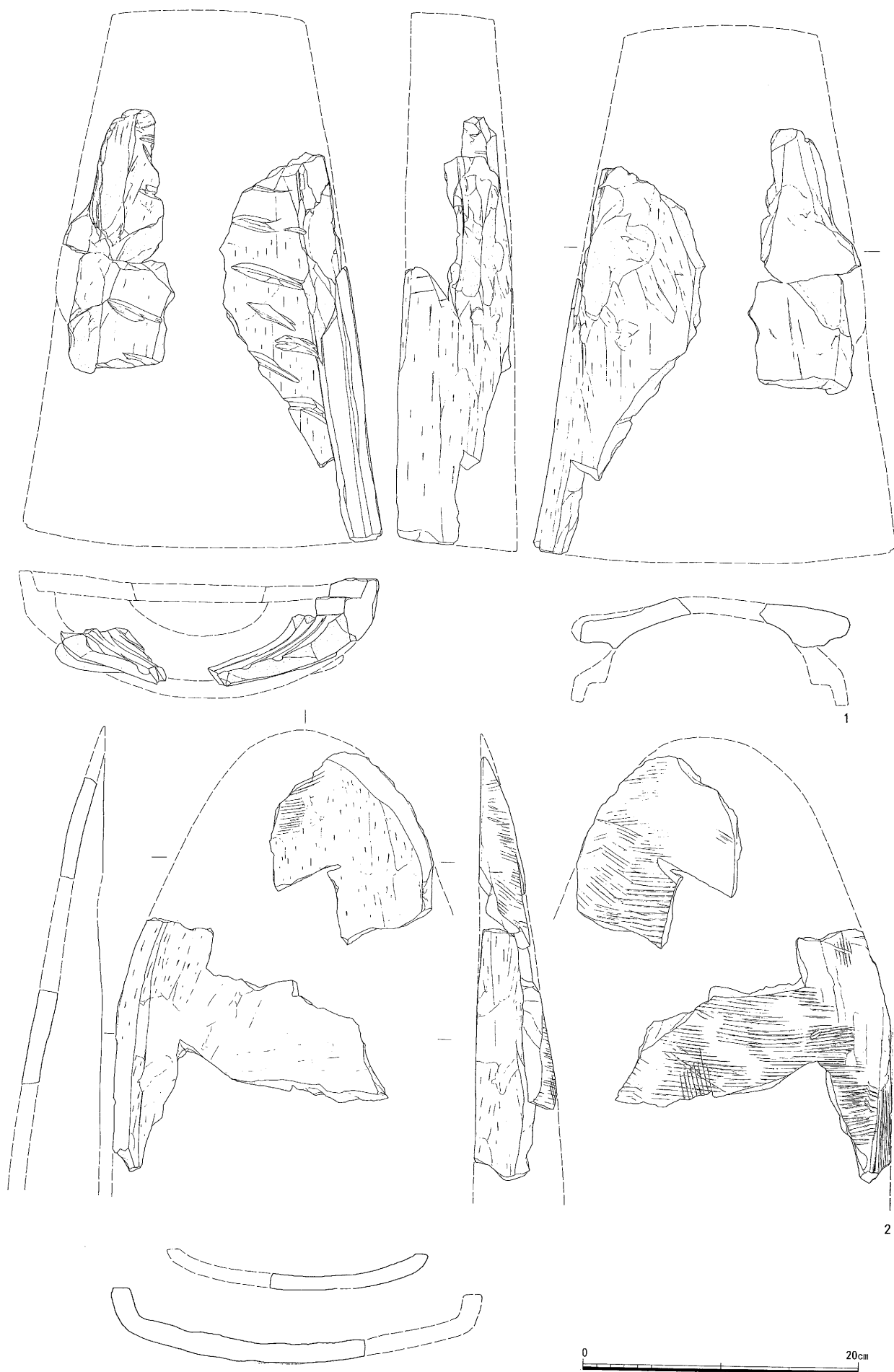
土製鑄型外枠（第31～34図、図版31～37）

「土製鑄型外枠」とした土製品は、その内側に精製された粘土（真土）あるいは砂を貼り付け、製作する青銅器の形と文様を彫り込んで鑄型にする「鑄型の外枠」と考えている。ただし、これら土製品には、真土の付着の可能性があるものも一部認められるが、他の土製品には真土は残っていない。この原因は、鑄造後に青銅器を取り出すとききれいに剥離（青銅器側に付着したまま）したか、鑄型廃棄後に土中の水分によって流れ落ちたのではないかと考えている。本報告では、これらの土製品を青銅器の「鑄型の外枠」として記述する。鑄型の外枠の形態は、大きく6タイプに分類される。各タイプは作られた青銅器の形が異なる結果だと考えられる。この6タイプの他、全容の把握できないA型に似た土製品（図版31-2・3）がある。

鑄型外枠A型 A-1とA-2は、銅鐸の鑄型外枠に推定しているものである。今回の調査では全容のわかるものは出土していないが、数点の破片がある。図版31-1は、A-1の下端の部分（裾部）で、外面の左方は貼付の把手ちかくで膨らみをもっていることから、銅鐸でいえば、鐸身の中央から鱗ちかくにあたる部分の鑄型外枠と推定される。下端部分はやや外反する。外面は下方へ、内面は横位のケズリを施した後、側辺部付近（鱗）を縦位に削る。厚さはおよそ2.5cmである。SD-101BとSD-102Bの各第5層から出土した。この他、2片ある。

第31図-1はA-2の形態で、第3次調査のものと接合した。両側辺と下端の部分の破片である。外面の両側辺には、貼付の把手がみられる。側辺の端部は水平でなく歪んでおり、粗雑である。第3次調査で出土したこの形式の鑄型外枠と比較すると、本製品の身の中央部分はあまり膨らみをもたず、扁平な形態で厚さは1cmほど薄い。本製品の厚さは、約1.3～2.5cmで側辺ちかくが厚くなっている。内面の鱗に相当する部分は、同じように段をもっているが段の幅は約1.2cmと狭い。また、段の下端は「L字」になっていない点や下面のヘラによる合わせ目の刻線がない点など相違点がみられる。調整では、内外面ともにケズリを施す点は共通するが、内面はヘラ状工具で大きく刻み目をいれる。SD-101B第3・4層出土。

鑄型外枠B型 B-1とB-2は、その大きさと形態から扁平で長い武器形の青銅器の鑄型外枠に推定している。大きさから二つのタイプに分類できるが、胎土・厚さ・調整などバラエティに富んでおり、破片ではどちらのタイプか判断できないものがある。B-1の確実な資料は1個体である。第31図-2はSD-102B第5層と第3次調査分が接合したものである。平面形態は舌状を呈し、中央の断面形態は扁平な蒲鉾形である。先端部分は、段はなくなり緩やかに収束する。外面は横位のタタキ、内面は一部にハケ調整が残るが周辺部はケズリ、中央は強いナデ調整を施す。

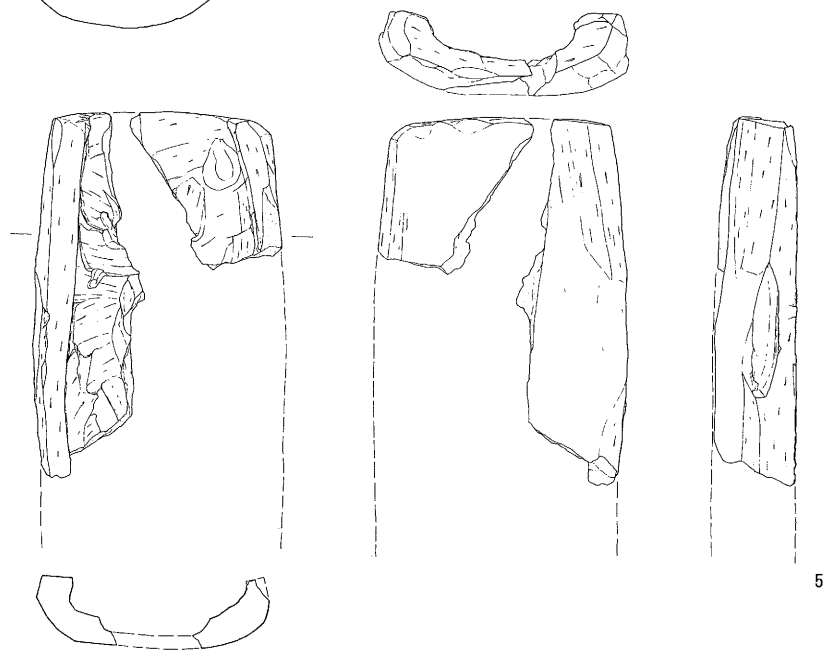
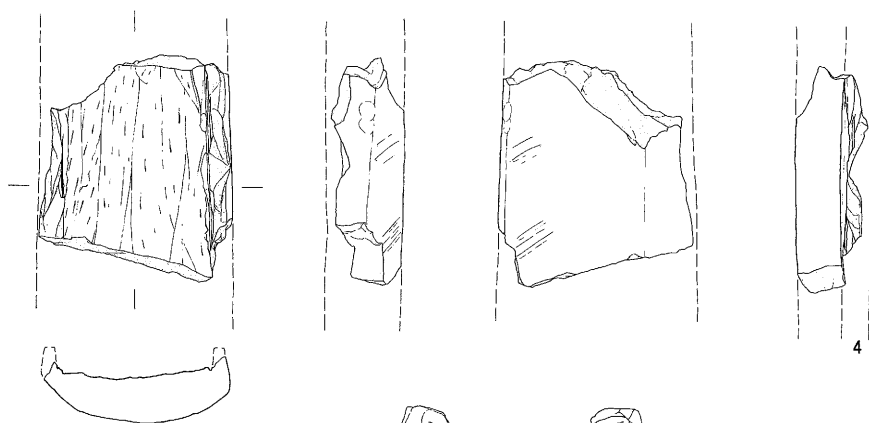
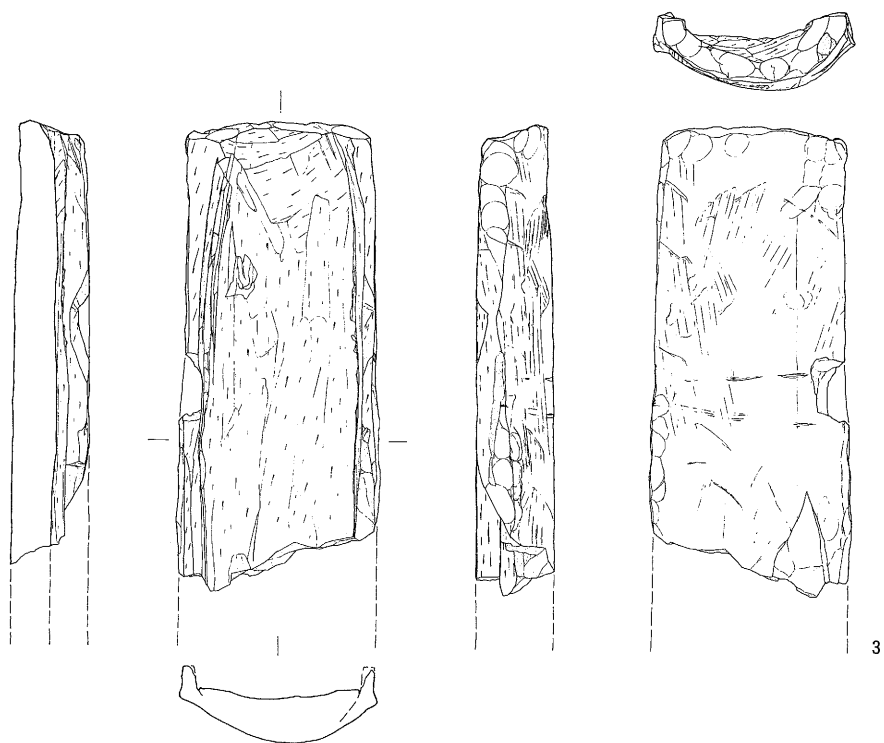


第31図 土製鑄型外枠実測図1 (S=1/4)

Ⅲ. 調査の成果

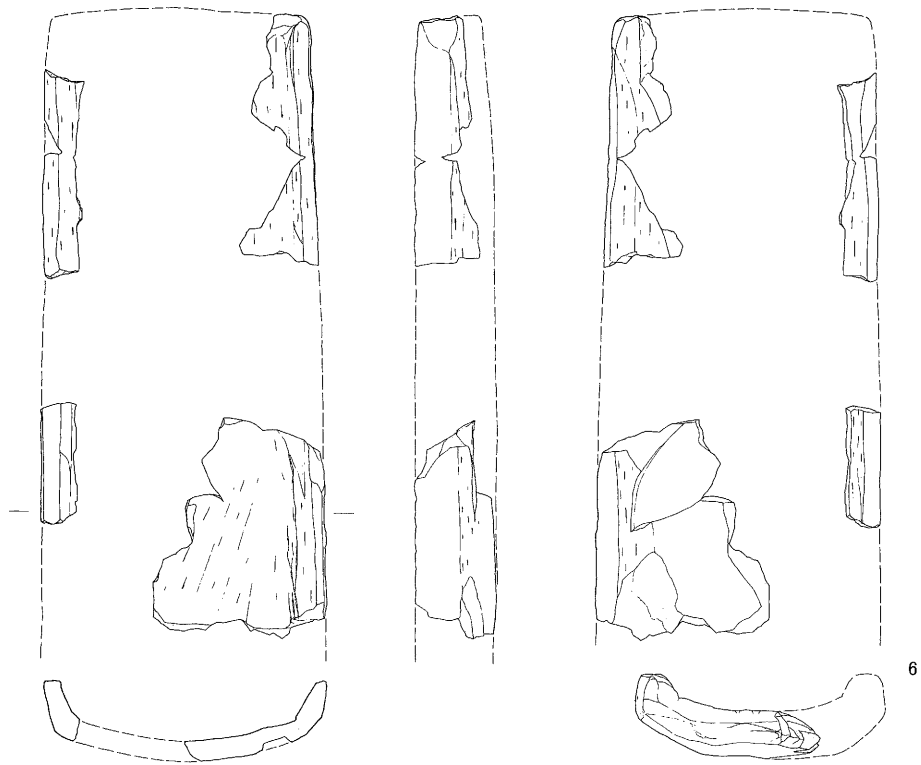
第32図-3～5と第33図-6～8は、B-2に属する。これらは、長方形の平面形態と断面が蒲鉾形を呈す点が類似しているが、厚さや調整等で異なる。3と4は、胎土・形態・大きさ・調整などが類似しており、対になる資料と考えられる。外面はタタキ後ナデ調整をおこなう。中央側辺は指頭によってわずかに窪ませ、把手をつくっている。内面は縦位方向のケズリをおこなっている。また、小口（鑄型の湯口に相当する部分）は横位方向に削り薄くし、湯口部分を整形する。これらの製作順序は、まず粘土を蒲鉾形の板状にし、外面からタタキ締めた後、タタキをナデで消す。その後、半乾燥させ内面を鉄状のナイフで掻き取りながら、整形すると考えられる。注目すべき点は、3の小口と側辺の外面に、わずかであるが使用時の焦げ跡が残っていることである。3はSD-102B第4-b層・5層、4はSD-102B第2層出土である。5・6・7も、B-2の小口部分の破片である。5・6は、ほぼ同じ調整である。外面はケズリ後、ナデ調整、内面はケズリをおこなっている。5の内面は粘土を掻き取るようなケズリで、器面の凹凸が激しい。5の外面側辺には、器面を抉って窪ませた把手が作られている。3の場合は側辺が薄く作られていたが、5は厚さ1.5cm前後、6は1cm前後と均一にちかく整形されている。7は、前者に比べ厚さ2.2cm前後の厚手の粗雑な作りである。外面はナデ調整によって仕上げられている。側辺部ちかくには焦げ跡らしき痕跡がみられる。第3次調査出土ものと接合した。8は、B-2の基部にあたる部分である。他のB-2に比べ、縁辺部の段が明瞭で、断面は蒲鉾形というより細長い長方形にちかい。内面の縁辺部では、幅5mm前後のV字形の溝を切っている。外面はナデ調整、内面はケズリ後、格子状に刻み目をいれる。5はSD-101B第4層・SD-103第1層、6はSD-102B第5層と第3次調査分が接合、7は黒褐色土層と第3次調査分が接合、8はSD-102B第2層・黒褐色土層出土である。

鑄型外枠C型 第34図-9・10は、C類に属するものである。細長い半円筒形を呈する形態である。9・10は、胎土・形態・大きさ・調整などがほぼ同じであり、対になる可能性が高い。9は小口部分、10は基部にあたる破片である。10は現長38.5cm、基底部の幅10.8cmを測る。基底部分はきれいに塞がっているのではなく、直径3cmほどの穴があく。このような基底部の状況は、A-2型の鑄型外枠にもみられる。9・10とも、外面はナデ調整であるが、基部と小口付近では、指頭圧痕が残る。また、縦方向に細長い圧痕があり、所々で2本平行していることから半裁竹管状のものを押し当てたと考えられる。また、所々に縄状の圧痕も見られる。このような調整は、後述する送風管にもみられる。最終調整としては、中央部で部分的にミガキを施す。内面は縦方向にケズリをおこなっているが、部分的に未調整のところがある。基部底面は、砂と植物繊維の圧痕がみられる。これらの調整から、本製品の製作工程は下記のとおりで復元される。丸太状のものに粘土板を巻き付け成形し、基部付近はさらに厚く粘土を巻き付け太くする。基底部を地面において、半乾燥させた後、半裁竹管状のものを押し当て縄状のものを巻き付け簀巻き状にして内部の丸太棒を抜く。その後、これを半裁して内面を削り、整形したと推定される。使用痕に関して、10の外面の基部右側辺には煤・焦げの痕跡がみられることや、基底部の外面と内面の右側辺基部ちかくの色調が淡赤褐色を呈していることから、高熱を受けたことが窺える。9はSD-101B第4層・第5層、SD-102B第5層（下）・第6層から出土し、第3次調査分と接合した。10はSD-101B第5層から出土し、第47次調査分と接合した。この2片の距離はおよそ63mある。

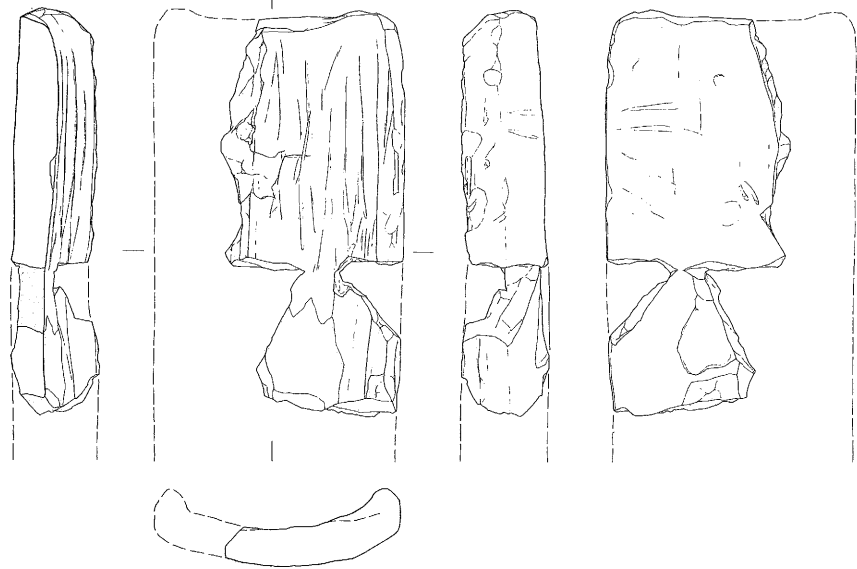


0 20cm

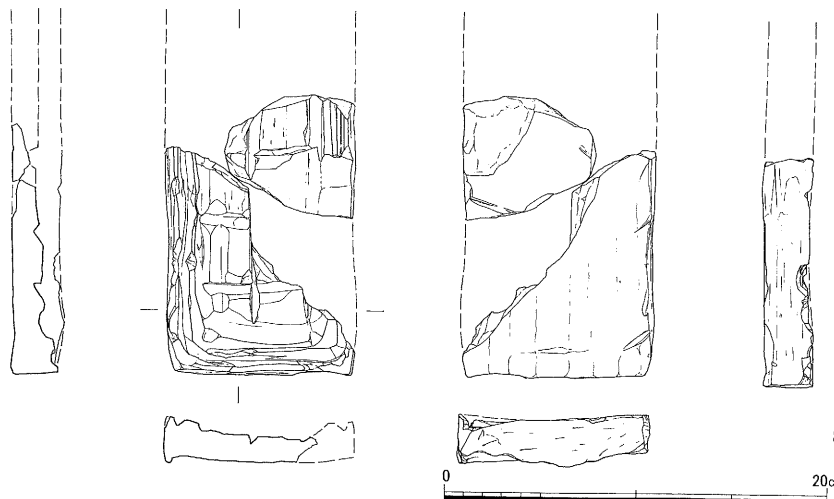
第32图 土製鑄型外枠実測図2 (S=1/4)



6



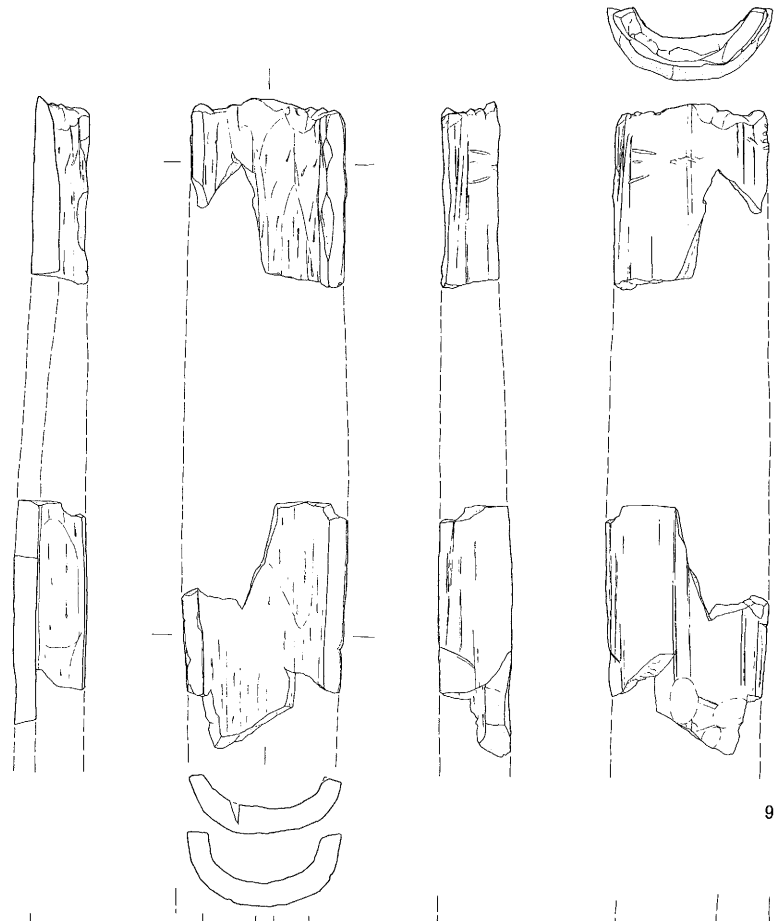
7



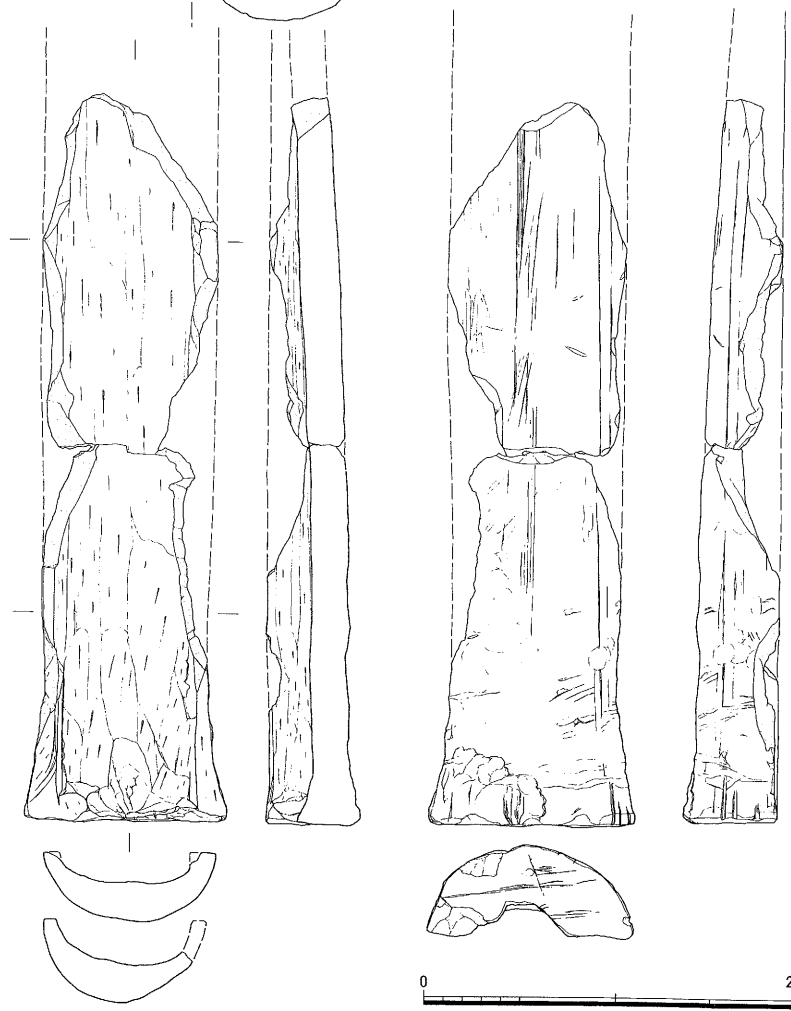
8

0 20cm

第33图 土製铸型外枠実測图3 (S=1/4)



9



10



第34図 土製鑄型外枠実測図4 (S=1/4)

Ⅲ. 調査の成果

高坏状土製品他（第35図、図版38）

高坏状土製品は、形態的に日常土器である高坏に類似しているところもあるが、胎土や調整、器壁の厚さ、付着物、坏部が有孔であること、などから日常一般土器とは大きく異なっていると考えられる。また、これらは本遺跡の各所で出土するのではなく、この鑄造関連遺物の出土するこの地点のみしか出土しないことから、鑄造に係わる遺物として認識できる。このようなことから、本品を青銅器の鑄造に関連する「高坏状土製品」として報告する。これらは2つのタイプがあり、第3次調査のものと多くが接合する。本品の用途として、取瓶を考えている。

高坏状土製品A 第35図-1・2・3は、脚裾部が広がらない長脚状の脚部に椀状の坏部がつくタイプで、安定感のないものである。坏部外面の口縁部ちかくには、小さな粘土粒を貼付し、つまみ出した瘤状の突起を4カ所ほどに付ける。注目されるのは、坏部内側から直径8mmほどの円孔を4段にわたってあけていること、坏部底面の円盤充填がなく脚部と中空でつながっている点、さらに、わずかであるが外側へ注口が作り出されている点である。注ぐ機能を有しながら、坏部に穴をもっている点は不可解であるが、鑄型外枠と同様、坏部内面に「真土」を貼り付けたと推定したい。1と3の坏部や注口部内面の一部に、高熱による変色や鉍滓状の付着物がみられる。1の脚部内外面はケズリ、坏部の内面は粗いハケ後ナデ、外面はハケ後ケズリをおこなう。口縁部はヨコナデを施す。2も、1と同様のケズリを主とする調整をおこなうが、ハケ調整はみられない。2の注口部上端内側は高熱による変色とひび割れがみられる。

高坏状土製品B 4は、前者と対照的な形態を有している。大きな椀状の坏部に、短く安定した脚台部がつく。器壁も厚く約2cmを測る。坏部外面の瘤状突起や底面にみられる中空（未充填）、注口をもつことは前者に共通しているが、坏部にみられた小円孔はない。坏部の口縁部はヨコナデによって外方へ丸く突出させている。外面はハケ調整、脚台部上半はケズリをおこなう。脚端部には2条の不明瞭な太い凹線がめぐる。また、外面全体には煤と思われる黒色物が付着している。内面は、ハケ後ナデ調整で仕上げられている。脚台部の内面は、ケズリをおこなう。

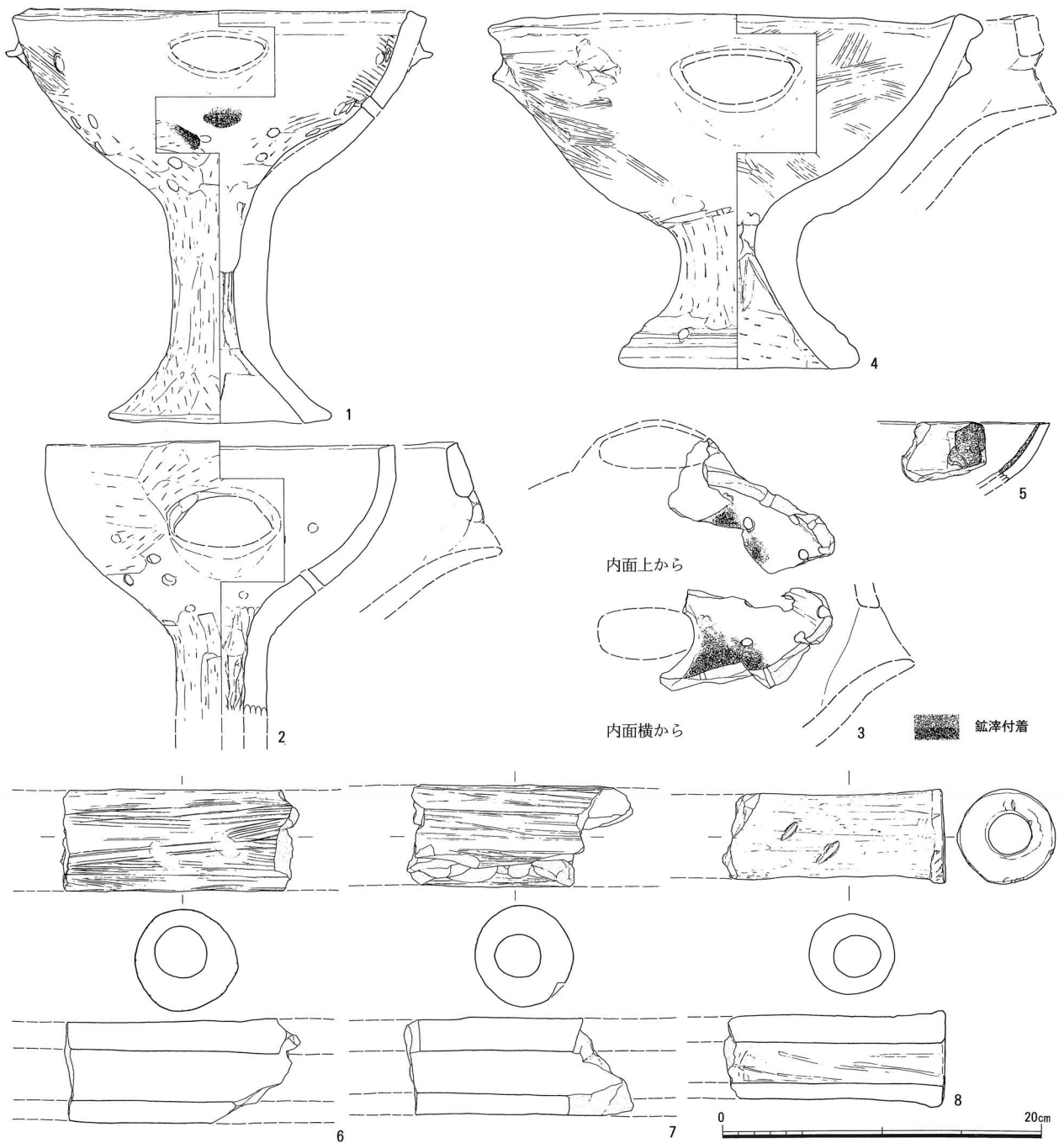
鉍滓付着土器 5は、一般的な大和第V様式の高坏口縁部である。内面には、約0.2cmの厚さの発泡状の鉍滓が付着している。土器に接着している部分は真土の可能性がある。図版38-4は、高坏状土製品Aの坏部の破片である。内面には、鉍滓が滴状に付着しており周囲が灰色に変色している。表面からの蛍光X線の分析では、前者はSiO₂ (73.829%)、Cl (9.741%)、Fe₂O₃ (5.872%) が、後者はPbO (51.267%)、Fe₂O₃ (19.558%)、SO₃ (14.791%)、CaO (6.040%)、K₂O (3.862%) などが検出されている。

送風管（第35図、図版39）

送風管は、今回の調査では約17片、7個体分が出土した。大半は、SD-101B・SD-102Bから出土しているが、時期の溯る送風管の1点は調査区の南西部SK-115で検出した。

送風管 第35図-6・7・8は、送風管である。6・7は両端を欠損しているが、8とは大きさや調整方法で異なる。送風管の外径は5・6とも約6.4cm、内径は5が約3.1cm、6が約2.6cmを測る。送風管の成形は、丸太棒に粘土を巻き付け成形する方法である。6・7は、外面に粗いハケ調整と一部ケズリがみられる。注目されるのは、このハケ調整の上にみられる2条一対の半裁竹管状の圧痕と縄状の圧痕である。これと同じものは、鑄型外枠C型にも見られる。

恐らく、半乾燥になった送風管から丸太棒を抜き取る時、半裁竹管状のもので5カ所をおさえ、



第35図 高坏状土製品・送風管実測図 (S=1/4)

繩を巻き付け篋巻き状にして棒を抜いたのであろう。6はSD-104第2層出土。7はSD-102B第3層と調査区中央の黑色粘質土層出土のものが接合した。この2点は、大和第V様式と考えられる。8は、調査区の南西端のSK-115第3層から単独で出土したものである。先端は欠損している。残存長13.8cmを測る。前者同様、丸太棒に粘土を巻き付け成形したと考えられるが、棒の抜き取り方法は異なるようである。これは時期差となって表れているのであろう。基部は平坦で、製作時にはこの面を下にして乾燥させたのか押し潰れている。外面はミガキ調整をおこなっている。送風管の外径約5.3cm、内径約2.5cmを測る。本製品は大和第Ⅲ-4様式である。

IV. まとめ

重要遺跡確認緊急調査として、平成8年度から唐古・鍵遺跡の発掘調査が開始された。今回の調査地は、はじめに述べたように青銅器鑄造に関する遺構を確認し集落構造を把握することであった。残念ながら、青銅器の工房跡を積極的に認める遺構は確認しえなかったが、鑄造に関する遺物は極めて多く出土しており、本地の北側および東側の第3次調査地付近に工房跡が存在したであろうことは間違いあるまい。以下、今回の調査で判明したことと課題をまとめておきたい。

1. 南地区の大溝群

今回の調査では、調査区南半で居住区の微高地を、北半でムラ内部を区画する大溝を3条確認した。この大溝群は大和第Ⅱ-1様式から存在しており、唐古・鍵ムラが各地区ごとにまとまりをもつ段階で、1つの画期となっている。この南地区を区画する範囲は、おおよそ東西200m、南北150mの範囲である。第61次調査地は、ちょうど東側の区画溝の分岐点近くであることがほぼ確実となった。また、この南地区の中心的な位置としては、第33次調査地付近が想定できるようになってきた。この第33次調査地は微高地上にあり、遺構の密度（集住度）が高いことや遺物の豊富さと細形銅矛片や木製戈などの重要遺物の出土からも裏付けられる。

第61次調査の大溝群は、大和第Ⅲ-1様式に粘土層で自然埋没する。これは、ムラを囲む大環濠の成立に起因しているかも知れない。その後、この北半部分全体は粗砂層で完全に覆われてしまう。この粗砂層に関しては、ムラの各所で検出した環濠を埋没させる粗砂層と同一のものと見なし、中期末の洪水層と考えていた。しかし、今回の調査地点では、粗砂層の形成は遅くても大和第Ⅲ-2様式に開始されていることが初めて確認された。このことから、唐古・鍵ムラにみられる粗砂層には、南地区にみられる大和第Ⅲ-2様式のものや北方砂層など北地区にみられる大和第Ⅳ様式の2時期のものが存在することが明らかになった。北方砂層は、ムラ北東部の環濠帯付近を流れるが、南地区の粗砂層はムラ内部に大規模におよんでいる。この南地区の粗砂層は、その東側である第3次、40次、47次調査でも大溝を埋没させたものとして確認している。さらに東側である第9次調査でも砂層を確認しているがこれが一連のものであるかどうか、また、これらの砂層の供給元がどのようなになっているのか、この大規模な砂層堆積がムラ内部にどのような拡がりをもっているか、課題がでてきた。今後、集落構造と変遷を考える上で、この粗砂層の範囲と形成・消長を把握していく必要がある。

2. 遺跡における青銅器鑄造場所と南地区の占める位置

唐古・鍵ムラにおける本調査地の占める位置は、南地区における単なる一居住区に留まらない。第40・47次調査地ではムラの東南側の環濠を検出し、その内部にあった橋脚から出入り口を確認している。そして、その橋脚は中期と後期の2時期が存在することから継続的に使われていたことが判明している。このようなムラの東南部の、出入り口の西側に青銅器の工房跡が存在することは、ムラ全体の中で計画的に配置されていた可能性がある。この遺跡地周辺を含め奈良盆地においては、通常、西風あるいは北西風が吹いている。このような気象条件を考慮すれば、当然ながら火を使用する鑄造はムラの風下になければならない。さらには、青銅器等の鑄造技術や製品

等の管理は厳しくおこなわれていたことも想定するならば、ムラの一番奥まったところに位置する南地区の重要性が浮かび上がってくるのである。

第47次調査では、大和第IV様式の楼閣の描かれた土器片が出土したが、本調査においても大きな棟飾りをつける楼閣建物と推定される大和第V様式の絵画土器片が出土した。このことは、この付近にこのような建物が、数時期にわたって存在していたことを窺わせており、この地区の重要性を裏付ける資料になろう。今後、調査によっては、大型建物が検出される可能性が高いであろう。

3. 青銅器鑄造関連遺物について

1977年に実施された唐古・鍵遺跡の第3次調査において、初めて土製の鑄型外枠の存在が明らかになった。その後、20年間の間には各地で青銅器の鑄造関連遺物が出土することになるが、これらは従来知られている石製鑄型がおもで、まとまった土製鑄型外枠の確実な資料は残念ながら、蓄積されずにきた。このような状況のなかで、今回の調査は、まさに不明であった青銅器の鑄造技術や工房に焦点をあてる機会となった。残念ながら、遺構については不明と言わざるをえないが、遺物については、下記に述べるようにほぼその全容を把握できるところまできた。

青銅器鑄造関連遺物の種類と推定される製品名 この鑄型外枠は、内側に精製された粘土（真土）を貼り付け鑄型としたと考えるわけであるが、ことごとく真土は外れており、作られた製品については断定できない。しかし、外枠の形態からできあがる鑄型は規制されており、真土の厚さを考慮すれば、ある程度作られた製品は推定できる。また、後述するように鑄型外枠の時期は、後期初頭、溯っても中期末と考えられることから、青銅器についてもかなり限定できるのである。

鑄造される製品名については、重要な問題であり、鑄造技術や青銅器との比較検討など詳細な検討を必要としている。したがって、その検討については、正式報告でまとめたいが、ここでは一応の大雑把な見通しと問題点を述べておく。鑄型外枠は、大きく6つに分類できる。

A型は大小あるが、いずれも同じ形態である。それらの形態と時期から、A-1とA-2は銅鐸を製作したと推定できる。これに関しては、第3次調査以来、銅鐸と考えられてきたものである。大型の方は大きさから天理市石上銅鐸などが候補としてあげられる。この場合は、外枠の大きさいっぱいまで銅鐸の本体が占めることになり、真土の厚さも均一でなくなるという問題がある。小型のほうは、大きさから比較するとやや厚手のつくりで、下辺には合わせ目の刻線がある。外枠は、一般的な銅鐸の比率からすると鐸身に想定される部分が長くなる。ただし、外枠内面のケズリが縦方向から横方向が変わる部分があり、この縦方向までを銅鐸鑄型面になると推定すれば、30cm前後の銅鐸と推定できることになる。この場合、その下部分は幅木を想定する必要がある。鑄造された銅鐸は多数あり限定できない。A-1、A-2ともに3対以上ある。

B型はその形態から武器を想定している。B-1とB-2は、先端部で形態が異なるだけで、破片では区別はつかない。B-2は銅戈などの武器が候補としてあげられる。B-1は、推定復元すれば、全長60cmほどの大型になると思われ、今のところ限定できる製品はない。このBタイプが外枠の中では最も個体数（大半が破片）が多い。

C型も同様な形態であるが、幅が狭くなるので細長いものしか作れない。他の遺跡の出土品に連結した鑄放しの銅鏃があるので、連鑄式の銅鏃鑄型の可能性が高い。この場合、真土は作られ

IV. まとめ

第6表 土製鋳型の外枠一覧表

型式	形態	全長	最大幅	推定される青銅器	点数(最低個体数)
A-1	台形の箱形(大型)	約64.0	約44.2	50cm前後の銅鐸	5以上
A-2	台形の箱形(小型)	約40.0	約26.0	30cm前後の銅鐸	5以上
B-1	長方形の箱形(大型)	30以上	推定27	不明(武器の可能性あり)	15以上
B-2	長方形の箱形(小型)	25以上 推定31	約10.0	武器(銅戈の可能性あり)	
C	円筒を半裁した形	38以上 推定47	約10.8	武器(銅鏃の可能性あり)	2以上
D	方形の箱形	15以上 推定18	約12.0	不明(鏡あるいは釧の可能性あり)	2以上

※ 単位はcm

※B-1・B-2の破片は区別できないものがあるので点数は2つを合わせた点数である。

※一覧表の点数は個体数。文中の総点数は破片の点数なので同一個体を識別できないものもあることから別々にカウントしている場合があるので、表とは一致しない。

る製品に比べ厚くなり、前述B型では真土は薄いものがあることから、真土の厚さでは逆転してしまうことになる。作られる製品と真土に相関関係はないことになる。

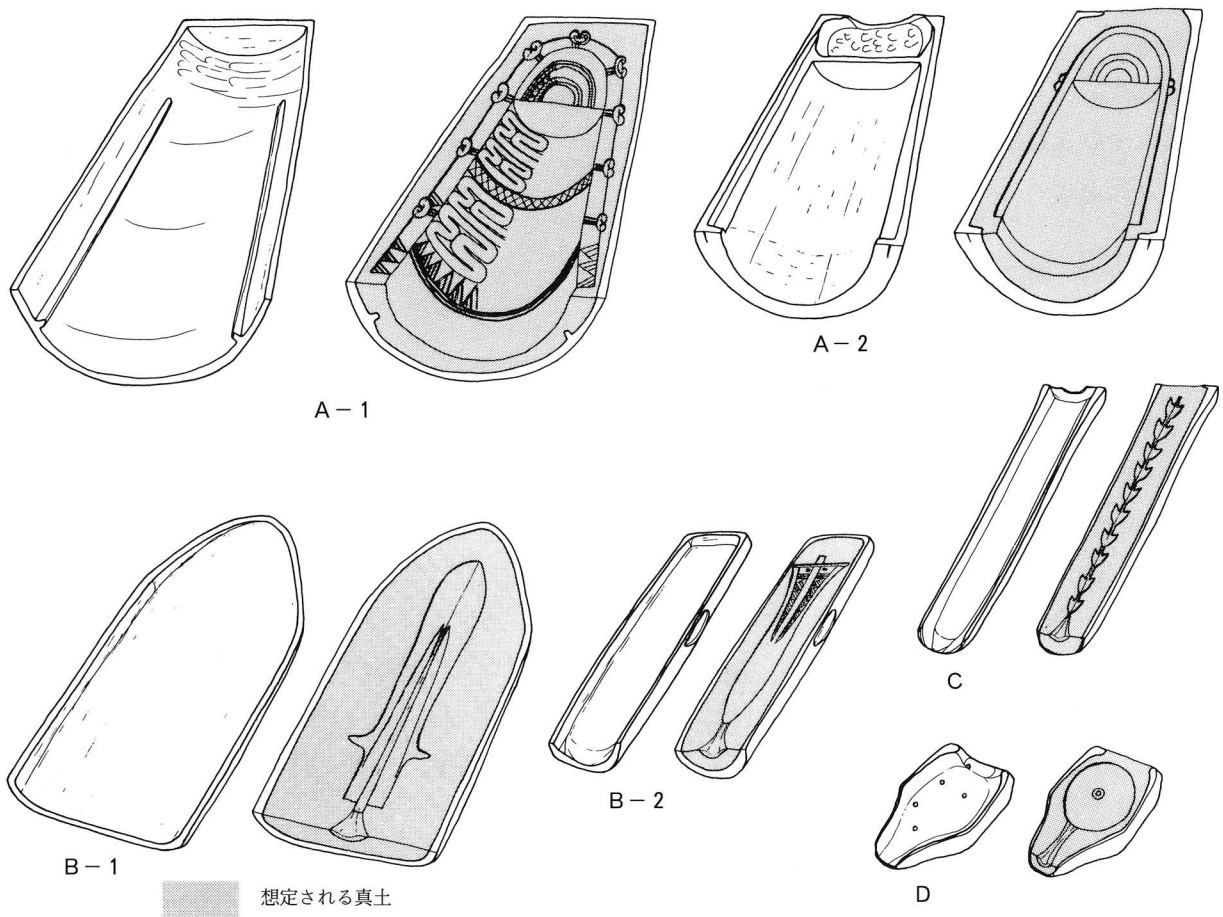
D型は、12cm前後の方形であることから、それより小さくて薄い製品しか製作できない。時期を考慮するならば、鏡や釧などが候補として考えられる。本製品は第3次調査で2点出土しているのみである。

このような鋳型外枠とは、別に鉍滓付着土器がある。このなかには、SiO₂が検出されていることから、上記のような青銅器類だけでなく、ガラス製品の鋳造もおこなっていたとするほうが妥当であろう。

その他の鋳造関連遺物 鋳型外枠のほか、鋳造に関連すると思われる遺物がある。1つは、高坏状土製品である。厚手のつくりで、鋳型外枠と同じ胎土と作り方をもっていることから、鋳造に関連するものと考えられる。形態的には脚台の長いもの(Aタイプ)と短いもの(Bタイプ)がある。いずれも椀状の坏部で、その大半に0.5cm前後の穴が多数あいている。この穴は真土を貼って塞いでいると考えられる。また、6cm前後の注ぎ口がある。注目されるのは、この坏部の内面の注ぎ口ちかくに鉍滓状の付着物があることである。目下、この成分については分析中であるが、表面からの蛍光X線の分析では、Pb_oが約50%検出されている。多数ある鋳造関連遺物のなかで、確実に高熱を受け、鉍滓状の付着物があるのはこの高坏状土製品のみである。現在のところ、これだけの遺物が出土していて確実な埴埴や取瓶がないことから、この土製品をその候補として考えたい。

2つ目は、ふいごの送風管である。直径6cm前後、内径3cm前後、長さ40cm以上の円筒状の土製の管である。今回の調査では破片のみであるが、先端がL字状に曲がって火を受けたものが第40次調査で出土している。これは炉の内部に付けられたものであろう。今回、初めて送風管には2種存在することがわかった。その大多数は、鋳型外枠とともに出土したものであるが、大和第Ⅲ-4様式のもので1点単独出土し、胎土や製作技法も異なることが判明した。

3つ目は、多数の被熱土器片である。すべて5~10cm前後の弥生土器片(中期・後期初頭)で



第36図 土製鑄型外枠の型式模式図と鑄型復元想定図

ある。かなりの高温を受けており、焼きぶくれと変形で元の形状がわからないものもある。これらは完全な形の土器が火熱を受けたのではなく、破片となった段階に火熱を受けたものと考えられる。被熱土器片の軽微なものについては、これまでの調査でも出土しており、火災や事故によるものと考えてよいと思われる。しかし、今回の調査で出土したその多くは、SD-101BとSD-102Bに集中しており、変形の度合いも大きいことから鑄造に関係すると考えてよからう。おそらく、炉付近の施設の一部として使われたものであろう。

青銅器鑄造関連遺物の所属時期 これらの遺物は、すべて廃棄された状態で出土した。大半は調査地北端で検出した2条の大溝から出土している。この2条の大溝は大きく3つに分層され、下層・中層は中期後半から後期初頭、上層は後期初頭と後期後半の弥生土器が混在して出土している。したがって、この両大溝は弥生時代中期後半（大和第IV様式≒従来の第四様式〈小林・佐原編年〉）に掘削され、後期初頭に埋没、さらに後期後半に再掘削されたと考えられる。ただし、中期後半の単純層はないことから、後期初頭の掘削の可能性も残している。

鑄造関連遺物は、中層から上層にかけて出土しており、後期初頭（大和第V様式）に廃棄されたと考えられる。上層から出土したものは、再掘削による攪乱のため、混在したと考えられる。また、高坏状の土製品には、第V様式的な特徴も備えている。このようなことから、これら鑄造

IV. まとめ

関連遺物は、溯っても中期後半あるいは末であり、その下限は後期初頭に青銅器鑄造関連遺物を廃棄したと推定される。発掘調査の状況からすれば、それらの大半は弥生時代後期初頭（大和第Ⅴ様式）に所属すると考えている。さらに、鑄造の時期は、大和第Ⅴ様式の高坏坏部に鋳滓が付着しているものや被熱土器片が大和第Ⅳ～Ⅴ様式の土器片であることから、廃棄の時期とはほとんど差がないものと考えられる。

4. 唐古・鍵遺跡における青銅器鑄造の意義

唐古・鍵遺跡は、弥生時代前期に集落が成立し、中期には大規模な環濠集落に変貌を遂げ、後期まで維持されている。その集落規模、遺構密度の高さ、遺物の豊富さは、一般的な弥生集落をはるかに越える質量を保持している。このような状況は、基本的には拠点集落に共通するものであるが、それらの拠点集落のなかでも群を抜く遺構遺物の質量と言えよう。このようなことから、奈良盆地あるいは近畿地方の盟主的な集落として位置づけられるのである。では、この遺跡において、金属器をいつごろから入手しあるいは鑄造し、利用したのであろうか。

唐古・鍵遺跡では、中期初頭には鑿に転用されているとは言え、細形銅矛が出土し、金属器を早くから入手できる状況であった。中期前半から中葉では、金属器は今のところ出土していないが、銅鐸形土製品（第13・19・23・44次、大和第Ⅲ－1～Ⅳ様式）や銅戈を描いた絵画土器（第50次、大和第Ⅲ－4様式）、木製戈（第33次、大和第Ⅲ－4様式）などの関連遺物から、それら製品を実見、保有していたことが読み取れるのである。

唐古・鍵遺跡において、いつの段階から青銅器を鑄造していたかが、いまのところ不鮮明である。今回の調査では、大和第Ⅲ－4様式の送風管が1点確認されており、また、第3次調査では石製の銅鐸鑄型片が出土している点から、この時期まで溯ることは確実であるが、他の関連遺物は少なく、状況的には大規模な生産には至っていないと考えられる。あるいは前述の銅鐸形土製品などを積極的に評価するならば、さらに時期は溯ることになる。いずれにしても、唐古・鍵遺跡における青銅器の鑄造は、中期を通じて活発であったとすることはできない。

このような中期の状況に対して、これまでの調査で出土した土製の鑄型外枠は、今次の調査で約40点、それ以前の調査分を合わせると総数で100点以上になる。実際は同一個体も含まれているため、個体としては減る。また、これらは合わせて使うため2個一対でひとつの鑄型となることから、実数としては、20数点ぐらいであろうか。ただし、この鑄型外枠では真土さえ貼れば何回も使用できる可能性があり、鑄造された製品はこれより多く見積もる必要があろう。このようなことから、後期初頭の一時期、短期間に多量かつ多種類の青銅製品を鑄造したことは間違いのないであろう。

圖 版



1. 遺跡全景
(南から)



2. 調査区全景
(上が北)



1. 調査区全景
上層遺構（北から）



2. 調査区全景
下層遺構（北から）



3. 調査区全景
下層遺構（南から）

1. SD-151A完掘
(西から)



2. SD-151BN・BS完掘
(北東から)



3. SD-151CS完掘
(東から)

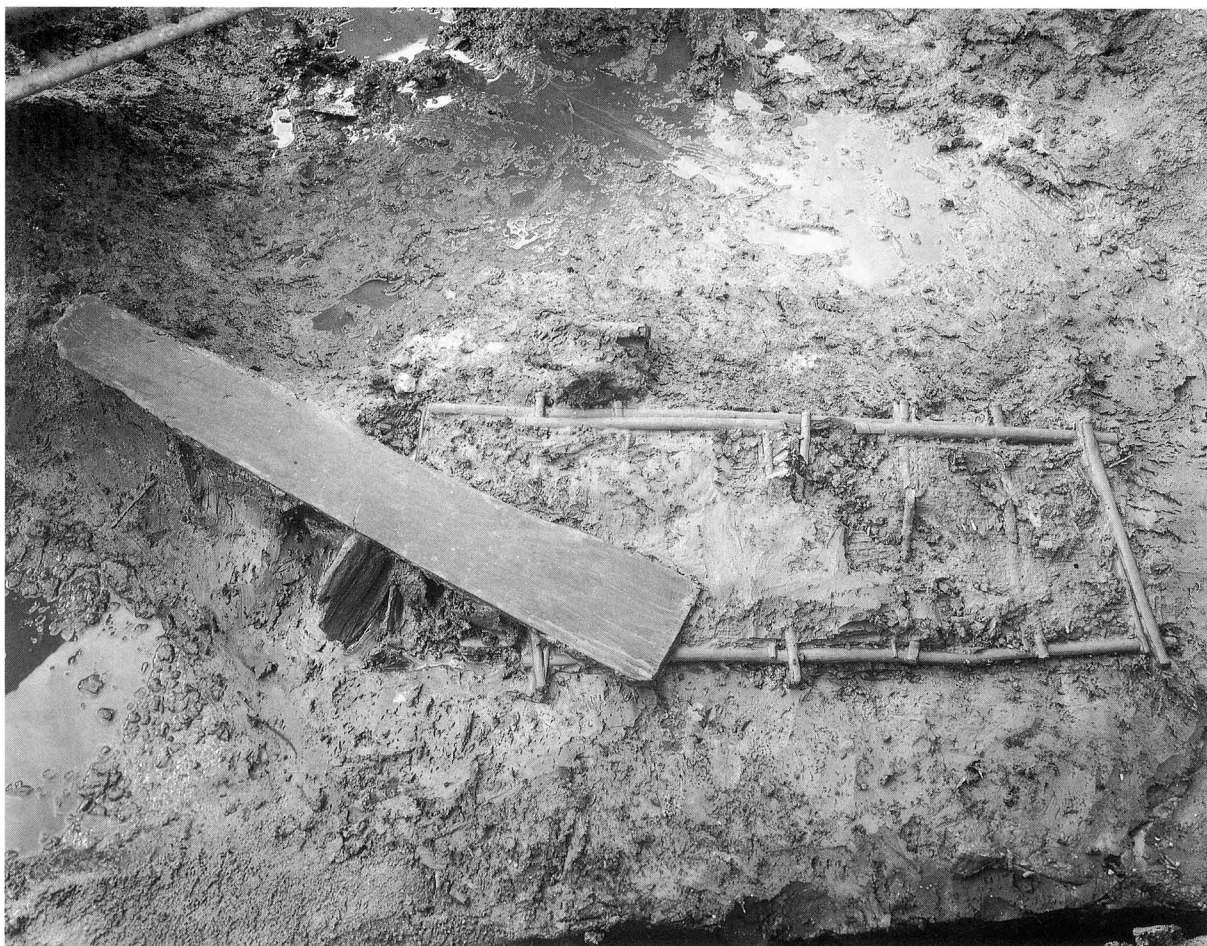




1. SD-151西壁
堆積状況



2. SD-151完掘
(北から)



1. SD-151BN
楯等出土状況



2. SD-151BN
高杯等出土状況



1. SK-118完掘



2. SK-118
鍬等出土状況



1. SK-108完掘



2. SK-108上層
検出状況



1. SK-107完掘



2. SK-107
土器出土状況



1. SK-106
柱出土状況



2. SK-117
遺物出土状況



1. SK-142水差形土器出土狀況



2. SK-115送風管出土狀況



3. SK-151大型管玉出土狀況



1. SD-101B・
102B
西壁



2. SD-101B・
102B
完掘 (南東から)